

チベット仏教学説綱要書に伝わるサーンキヤ思想

——チャパ・チューキセンゲ『仏教説と外教説の弁別』サーンキヤ章解説研究——

近藤隼人

チベット仏教カダム派の学匠チャパ・チューキセンゲ (Phya pa Chos kyi seng ge, 1109–1169) は、学説綱要書 (grub mtha') として *Phya pa grub mtha'* (PhPGT, *bDe bar gshegs pa dang phyi rol pa'i gzhung rnam par 'byed pa*、仏教説と外教説の弁別) を著している。同書は後伝期最古の学説綱要書とみなされており、後代 17–18 世紀頃のチベットで興隆する数多の学説綱要書の祖としてきわめて重要な位置づけを有している¹。PhPGT は西沢 (2013) によって先鞭がつけられ、全体の科段とともに仏教四学派 (毘婆沙師、経量部、唯識派、中観派) の内容と構成に関する概観が示されている²。仏教の記述に先行して外教説もまとめられているが、その記述は仏教よりも多くの分量が割かれており、チャパは外教説の学修に対しても一定程度の意義を認めていたことが推察される。

チャパは外教説を五種に分類して「タルカ五部」(rtog ge'i sde lnga) と称しているが、それは (1) ヴィシュヌ派 (Khyab 'jug pa)、(2) イーシュヴァラ派 (dBang phyug pa)、(3) ジャイナ教徒 (ディガンバラ派、Nam mkha' gos can rgyal ba pa / gCer bu pa)、(4) サーンキヤ派 (Grangs can pa)、(5) ローカーヤタ派 (Tshu rol mdzes pa / Phur bu / rGyang phan pa) である³。中でもヴィシュヌ派はヴェーダーンタ派 (Rig byed kyi mtha' gsang par smra ba) とミーマーンサー派 (sPyod pa ba)、イーシュヴァラ派はヴァイシェーシカ派 (Bye brag pa) とニヤーヤ派 (Rigs pa can) から成る。インド撰述文献の中でも仏教文献において先

* 本稿執筆に際しては、一部チベット撰述文献の検索に“Online Search System on Logical Works in the Pre-Gelug pa Period” (<http://tibetan-studies.net/tiblogsearch/index.cgi>) を活用した。

¹ 西沢 2013, 67, 77–78 参照。チャパの同時代人であるチャ・チェウカワ (Bya 'Chad kha ba Ye shes rdo rje, 1101–1175) の著した学説綱要書 *Grub mtha' chen mo* (GTCM) も PhPGT と同列に論じられるべきであろう。GTCM の抄訳を含む概観としては Kapstein 2009 参照。また、チャパやチャ・チェウカワにやや先立つニンマ派学匠ロンゾン・チューキサンポ (Rong zom Chos kyi bzang po, 11 世紀) も学説綱要書を三点著しており、後伝期最古の学説綱要書の一角を占めている (Mimaki 1982, 10–11、御牧 1982, 192 参照)。なお、当時未刊行であった PhPGT や GTCM には触れられていないが、チベットにおける学説綱要書の概要については Mimaki 1982, 1–54、御牧 1982 参照。

² PhPGT に関するその他の代表的な先行研究としては、中観派の下位分類である「幻理成就派」(rGyu ma rigs grub pa) ならびに「不住論者」(Rab tu mi gnas par smra ba) 言及箇所校訂と訳出を行う Almogi 2010, 165–68, 195–97、および中観派の四分類言及箇所校訂と訳出を行う Hugon 2016, 135–40 (PhPGT 仏教セクションの科段については Hugon 2016, 98 参照) が挙げられる。

³ 西沢 2013, 71 参照。チャパは先の四者を恒常説 (rtag par lta ba、常見)、ローカーヤタ派を断滅説 (chad par lta ba、断見) としてタルカ五部を分類している。

PhPGT (2a2–3): de la rtog ge'i sde lnga ste | khyab 'jug pa dang | dbang phyug pa dang | nam mkha'i gos can rgyal ba pa dang | grangs can pa dang | tshu rol* mdzes pa'o || de dag la dang po bzhi ni rtag par lta ba yin la | lnga pa ni chad par lta ba'o || (彼ら (外教徒) の中にはタルカ五部がある。(1) ヴィシュヌ派、(2) イーシュヴァラ派、(3) ディガンバラ派、(4) サーンキヤ派、(5) ローカーヤタ派である。彼ら (タルカ五部) の中で最初の四者は恒常説、第五は断滅説である。)

* tshu rol] em.; tshur rol PhPGT

なお、サキヤ派学匠シャーキヤチョクデン (Shākya mchog ldan, 1428–1507) もその著 *mKhas 'jug rnam bshad dri lan dang bcas pa* (*mKhas 'jug dri lan*) において「タルカ五部」に言及しているが、その際チャパにも

駆的に他派説がまとめられ始め、代表的なものとしてはバーヴィヴェーカ (Bhāviveka, ca. 490/500–570) 著 *Madhyamakahr̥dayakārikā* (MHK) および自注 *Tarkajvālā* (TJ)、シャーンタラクシタ (Śāntarakṣita, ca. 725–788) 著 *Tattvasaṃgraha* (TS) およびカマラシーラ (Kamalaśīla, ca. 740–795) 注 *Tattvasaṃgrahapañjikā* (TSP)、カマラシーラ著 *Nyāyabindupūrvapakṣesaṃkṣipta* (NBPS)、アーリヤデーヴァ (Āryadeva) に帰される *Jñānasārasamuccaya* などいわば散発的に著述されてきたが⁴、仏教以外においてもジャイナ学匠マツラヴァーディン (Mallavādin, 5–6 世紀) 著 *Dvādaśāraṇayacakra* (DANC) やハリバドドラ (Haribhadra, 8 世紀頃) による *Ṣaḍdarśanasamuccaya* など、諸派の哲学思想を体系的に通覧しようとする文献も少数ながら徐々に登場してきていた。かかる機運の高まりを受けてか、ヴィクラマシーラ僧院の密教十学匠の一人に数えられるバヴィヤキールティ (Bhavyakīrti, 9 世紀中葉頃) 著 *Pradīpoddyotanābhisaṃdhiprakāśikā* や⁵、彼の系譜を継ぐボーディバドドラ (Bodhibhadra, 10–11 世紀) 著 *Jñānasārasamuccayanibandhana* (JSSN) にも外教説がまとめられた。さらに、ボーディバドドラの弟子にしてヴィクラマシーラ僧院からチベットへと招聘され、チベット仏教再興に多大なる功績を果たしたアティーシャ・ディーパンカラシュリージュニャーナ (*Atīśa *Dīpaṃkaraśrījñāna, 982–1054)⁶ も仏教説と外教説の概要をまとめた一種の引用集 *Dharmadhātudarśanaṅgīti* (*DhDhDG*) を著している⁷。しかしながら、*PhPGT* のみならず、チベットに伝えられた外教説の典拠を文献実証的に解明しようとした研究はこれまでほとんど報告されていない。本稿はチベット仏教史における外教説の理解と伝播過程解明の端緒を開

触れられている (Jackson 1985, 9n7 参照)。 *mKhas jug dri lan* の記述は *PhPGT* の「タルカ五部」と順序こそ異なれど内容は一致しており、シャークヤチョクデンの記述を裏付けるものとなろう。Tauscher (2009–2010, 4) の推定によると、シャークヤチョクデンはチャパの著作を読んでいた最後のチベット学匠であるとされている。

mKhas jug dri lan (129.7–130.1): slob dpon phyra pa ni | grangs can pa | dbang phyug pa | khyab 'jug pa | gcer bu pa | rgyang phan* pa dang lnga rtog ge sde lnga'i rnam gzhag mdzad cing | (学匠チャパは、(1) サーンキヤ派、(2) イーシュヴァラ派、(3) ヴィシュヌ派、(4) ジャイナ教徒、(5) ローカーヤタ派という五 [派] が「タルカ五部」であると定めており、…)

* rgyang phan] em.; rgyang pan *mKhas jug dri lan*

また、van der Kuijp (1985, 81n17) はサキヤ派学匠タクツァンロツァーワ・シェーラプリンチェン (sTag tshang lo tsā ba Shes rab rin chen, b. 1405) もチャパと同じ五分類を挙げていることを指摘している。なお、「タルカ五部」に関しては非仏教説の分類として特にチベットでは広く知られていたが、その内容に関しては必ずしも一定していない (Jackson 1985, 4–5, 9–10n7, van der Kuijp 1985, 80–84 参照)。また、続く仏教説を加えれば、インド撰述文献にもしばしば登場する「六タルカ」(ṣaṭtarka/ṣattarki) に相当することになる。「六タルカ」の内容も一定はしていないが、*PhPGT* に登場する六分法はそのいずれにもみられない独特のものと考えられる。「六タルカ」に関しては Gerschheimer 2007、丸井 2014, 131–48 参照。

⁴ *Jñānasārasamuccaya* 著者のアーリヤデーヴァは、『四百論』(*Catuhśataka*) 著者の初期中観派学匠アーリヤデーヴァ (2–3 世紀頃) とは異なると考えられており (山口 1975, 342–45、Ruegg 1981, 54、Mimaki 1987, 431b、Tillemans 1990, 1:7 参照)、Mimaki (2000, 233) は 8 世紀の人物とみなした上で “Second Āryadeva” と称している (Mimaki 1976, 184 も参照のこと)。

⁵ ターラナータ (Tāranātha, 1575–1634) 著 *rGya gar chos 'byung* (esp. p. 196) 参照。また、*Pradīpoddyotanābhisaṃdhiprakāśikā* における外教説の概要に関しては Tomabechi 2016 参照。

⁶ 「アティーシャ・ディーパンカラシュリージュニャーナ」という呼称に関しては、Isaacson and Sferra 2014, 70–71n51、Szántó 2015, 539, 539n2 を参照した。また、Kano 2016, 83n2 も参照のこと。

⁷ *DhDhDG* については望月 (2007, 923–922) がその概要をまとめており、別稿において和訳も提示している (望月 2011, 11–20; 2016, 243–53)。また、Dorjee Rabling (*DhDhDG*_{DR} 66–214) は選梵テキストとともにヒンディー語訳と英訳を示している。なお、アティーシャは自らボーディバドドラを師の一人として言及しているが、*PhPGT* サーンキヤ章にも *JSSN* と *DhDhDG* とに共通して引用される詩節が四点見受けられる (後掲引用詩節①および③–⑤)。アティーシャの著作におけるボーディバドドラへの言及に関しては望月 2006 参照。

く一環として、PhPGTにおけるサーンキヤ章の解説を試みるものである。

PhPGTは西沢(2013, 68)がコロフォンにもとづいて指摘しているように、その著述に際してTJやアヴァローキタヴラタ(Avalokitavrata, 8世紀前半頃)著Prajñāpradīpāṭikā (PPT)、TSおよびTSP、チャンドラキールティ(Candrakīrti, 7世紀)著Madhyamakāvātāraなどに依拠したという。本稿においてはPhPGTサーンキヤ章訳注に先立ち、PhPGTの用語法を起点としつつ著述時に参照したと目される文献について考察し、さらにPhPGTとの関連が指摘されているカダム派学匠ウパロセル(dBus pa blo gsal Byang chub ye shes, 14世紀前半)による学説綱要書Blo gsal grub mtha' (BSGT, Grub pa'i mtha' rnam par bshad pa'i mdzod)との関連についても若干の考察を加える⁸。

サーンキヤ章の内容構成

最初にPhPGTサーンキヤ章の内容構成を概観する。全体の分量は二葉半ほどであるが、その大部分がサーンキヤ説の記述に充てられている。イーシュヴァラクリシュナ(Īśvarakṛṣṇa)著Sāṃkhyakārikā(SK)においてもその多くが割かれているプルシャ(puruṣa)とプラクリティ(prakṛti)の各存在論証や輪廻の様相などは扱われておらず、必ずしもサーンキヤ説を総覧しようとする性格のものではないが、主要な教説が簡潔にまとめられている。サーンキヤ説に対する批判は掉尾を飾る四詩節のみがそれに充てられており、主として根本原因(pradhāna)の存在に対して批判の矛先が向けられている。全体の内容科段は次の通りである。

- A. 二十五タットヴァ (15a1-16a2)
 - 1. 概要 (15a1-4)
 - 2. 根本原因 (15a4-7)
 - 3. 大 (15a7-15b1)
 - 4. 三グナ特性 (15b1-4)
 - 5. 自我意識とその展開物 (15b4-7)
 - 6. 帰滅次第 (15b7-16a2)
- B. 因中有果説 (16a2-4)
- C. プルシャによる対象享受 (16a4-7)
- D. 認識手段 (16a7-16b2)
 - 1. 七種の関係 (16a7-16b2)
 - 2. 三種の認識手段 (16b2)
- E. イーシュヴァラを奉ずるサーンキヤ説 (16b3-4)
- F. アートマン論の総括とサーンキヤ説 (16b4-17a1)
- G. サーンキヤ説批判 (17a1-4)

⁸ ウパロセルの本名としては、Deb ther sngon po に伝えられる名称に従う御牧 1978, 104n1、Mimaki 1982, 13n26 を参照した。また、年代に関しては御牧 1978, 96-97、Mimaki 1982, 12 参照。

サーンキヤ章の特徴的用語法

本章の特徴として特筆すべきは、サーンキヤ術語に対する特有の用語法である。9世紀に編纂された *Mahāvīyutpatti* (MVy) との関連から筆を起こせば、行為器官 (karmendriya) の一つである “upastha” (生殖器官) の訳語が最も顕著な例である。MVy においては “doms” ないし “mdoms” という訳語が収載されているが (MVy_s 4574; MVy_{IF} 4560)、PhPGT においては “nyer gnas” とされ (15a2)、“upastha” を直訳したような表現が用いられている。チャバが参照したであろう TJ や PPT、TSP においては MVy と同じ “doms” ないし “mdoms” が用いられていることを考慮すれば⁹、本章特有の用語法としてその一端を窺い知ることができる。

また、MVy から逸脱するサーンキヤ術語としては、“tattva” に対して “de tsam” (15a3)、“guṇa” に対して “rang bzhin” (15a4, 15b1) という表現を用いていることも挙げられる。いずれも地の文と典拠引用において一度ずつ用いられており、地の文としては二十五タットヴァを列挙した後に “de tsam nyi shu rtsa lnga po” (15a3) とあり、純質 (snying stobs, *sattva)・激質 (rdul, *rajas)・翳質 (mun pa, *tamas) の特性を述べた後で “rang bzhin gsum” とあるため、それぞれが “tattva”、“guṇa” に対応することは確実である。また、典拠として引用される詩節は、チャバが参照したと目される PPT や TSP にも引用されているが、それらに登場するテキストとは部分的に大きく異なっている¹⁰。そこで、校異を示しつつ前者の詩節を掲げる。

⁹ TJ ad MHK 6.1 (D dza 227b6-7; P dza 254a8-254b1; TJ_{He} 406.16-17, 408.1-2; TJ_N 148.5-9): de tsam gyis bskyed pa ni yang* 'gyur ba** bcu drug ste | 'di lta ste |*** sa dang | chu dang | me dang | rlung dang | nam mkha' dang | rna ba dang | pags pa dang | mig dang | lce dang | sna dang | lag pa dang | rkang pa dang | 'phongs dang | 'doms† dang | ngag dang‡ bcu drug po 'di dag ni ... (タンマートラによって生じたものもまた、十六種の変異物である。すなわち、地・水・火・風・虚空・聴覚器官・触覚器官・視覚器官・味覚器官・嗅覚器官・取得器官・歩行器官・排泄器官・生殖器官 (doms)・発声器官 [・マナス] というこれら十六種は…) See also TJ ad MHK 3.135 (D dza 90a1; P dza 96b4-5).

* P omits yang. ** 'gyur ba] D, P, TJ_N; 'gyur pa TJ_{He} *** P omits |. † 'doms] P, TJ_{He,N}; mdoms D ‡ P inserts |; [yid ces bya ba] TJ_N

PPT ad *Prajñāpradīpa* 1.1 (D wa 139a3-5; P wa 160a8-160b1): de la rnam par 'gyur ba las gyur pa'i nga rgyal snying stobs shas che ba las ni dbang po bcu gcig skye ste | 'di lta ste | mig dang | rna ba dang | sna dang | lce dang | lus dang | yid dang | ngag dang | rkang pa dang | lag pa dang | rkub dang | 'doms* zhes bya ba rnam so ||

* 'doms] P; mdoms D

TSP_{Tib} ad TS 7 (D ze 147a5; P 'e 178a7): las kyi dbang po lnga ni | ngag dang | lag pa dang | rkang pa dang | rkub dang | 'doms* so ||

* 'doms] P; mdoms D

なお、チャンドラキールティ著 *Madhyamakāvātārabhāṣya* (MABh) の記述は後掲脚注 48、BSGT は脚注 47 参照。また、その他チベット撰述文献においても概ね “doms” とされるか、より婉曲的な表現が用いられるかのいずれかであり、“nyer gnas” という表現は見受けられない (後掲脚注 48 参照)。

¹⁰ PPT ad *Prajñāpradīpa* 1.1 (D wa 140a1-2; P wa 161a7): de nyid nyi shu lnga shes pas ||* ral pa'am byi bo'am gtsug phud kyi || bsti gnas gang du dga' ba der || grol 'gyur 'di la the tshom med ||

* ||] D; | P

TSP_{Tib} ad TS 7 (D ze 147b2-3; P 'e 178b5-6): de nyid nyi shu lnga shes* na ||** ral pa'am mgo zlum cod pan can ||*** gnas ni gang dang gar gnas kyang || grol 'gyur 'di la the tshom med ||†

* shes] D; zhe P ** ||] D; | P *** ||] D; | P † P omits ||.

引用詩節① *PhPGT* (15a3-4)

de tsam* nyi shu [lnga] shes nas** ||
 ral pa 'am byi bo 'am*** cod pan gyi† ||
 cha lugs gang gis gnas kyang rung‡ ||
 grol 'gyur 'di la the ts[h]om med ||

* de tsam] de nyid *PPT*, *TSP* ** nas] pas *PPT*; na *TSP* *** byi bo 'am] *PhPGT*, *PPT* (byi bo'am); mgo
 zlum *TSP* † cod pan gyi] cod pan can *TSP*; gtsug phud kyi *PPT* ‡ cha lugs gang gis gnas kyang
 rung] gnas ni gang dang gar gnas kyang *TSP*; bsti gnas gang du dga' ba der *PPT*

本詩節は *PPT* および *TSP* の他に、チベット語訳のみ現存する文献としてアーリヤデーヴァに帰される **Skhalitapramardanayuktihetusiddhi* (*SPYHS*)、*JSSN*、*DhDhDG* 等にも引かれているものの、完全に一致するものは見受けられない¹¹。*SPYHS* には *PhPGT* と同じく “de tsam” という表現が用いられているが、特に第二パーダ、および第三パーダの後半は大きく字句を異にしているため、チャバが *SPYHS* を参照したとは断定できない。その場合、“tattva” を “de tsam” と表現する手法がチャバ以外にも存在していたことになるが、実際にチャバと同時代と目されるチャ・チェカワ (Bya 'Chad kha ba Ye shes rdo rje, 1101-1175) 著 *Grub mtha' chen mo* (*GTCM*) にも同様にサーンキヤの “tattva” が “de tsam” と表現されており¹²、時代

¹¹ *SPYHS* (D tsha 21b3-4; P tsha 23a6): de tsam nyi shu lnga shes shing || ral pa'am spyi bo* gtsug phud** kyis || cha lugs gang du gnas pa ni || grol 'gyur 'di la the tshom med ||

* ral pa'am spyi bo] D; ral pa'ang spyi'u P ** gtsug phud] D; gtsug pud P

JSSN ad *Jñānasārasamuccaya* 9 (D tsha 34b2; P tsha 39a1-2; *JSSN_{PD}* 128.6-9): de nyid nyi shu lnga* shes na ||**
 ral pa'am mgo reg gtsug phud*** kyis || bsti gnas gang du dga' ba der || grol 'gyur 'di la the tshom med ||†

* lnga] P; lngar D, *JSSN_{PD}* ** ||] D, *JSSN_{PD}*; P *** gtsug phud] D, *JSSN_{PD}*; gtsug pud P † P omits ||.

DhDhDG (D zhi 259a3; P₁ tsi 274a5-6; P₂ gi 23a5-6; *DhDhDG_{DR}* 174): de nyid* nyi shu lnga** shes na || ral pa'am
 spyi bo'am*** gtsug phud† kyis || bsti gnas‡ gang du dga' ba der || grol 'gyur 'di la the tshom med ||

* de nyid] P₂; de dag D, P₁, *DhDhDG_{DR}* ** nyi shu lnga] P₂, *DhDhDG_{DR}*; nyi shu lngas D, P₁ *** ral
 pa'am spyi bo'am] P₂; ral pa spyi bo D, *DhDhDG_{DR}*; ral pa'ang byi bo P₁ † gtsug phud] P₁, *DhDhDG_{DR}*;
 gcug phud D, P₂ ‡ bsti gnas] D, P₁, *DhDhDG_{DR}*; bsti nas P₂

SPYHS における引用に関しては山口 1975, 346 参照。なお、*SPYHS* に関してもその著者は後代のアーリヤデーヴァと考えられている (山口 1975, 346、Tillemans 1990, 1:7n19 参照)。また、ジュニャーナシュリーバドラ (*Jñānaśrībhadrā*, 11 世紀) 著 *Āryalankāvatāravṛtti* (*LAV*) にも同内容の詩節が二点引用されているが (最初の引用に関しては山口 1972, 244-45、Furusaka 1998, 499-498 参照)、*PhPGT* を含め上掲のものとはテキストを大きく異にしている。

LAV (D ni 15a7-15b1; P ni 18a3-4): kho na shes pa nyi shu lnga || gnas ni gang la gar dga' rung || mgo bregs
 ral pa phud bu can || grol bar 'gyur la der dogs med ||; (D ni 214a3; P ni 245b4-5): kho na shes pa nyi shu lnga || gnas
 ni gar dang gar yang rung || mgo bregs ral pa phud bu can || grol ba der ni gdon mi za ||*

* P omits ||.

¹² *GTCM* (2a2-3): grangs can pas de tsam nyi shu rtsa lnga bya bar khas len la | de yang bdag skyes bu shes shing rig
 pa rtag pa cig pu'i rang bzhin du 'dod la | de'i longspyod du gtso'o dang | chen po dang | nga rgyal dang | de tsam
 lnga dang | 'byung ba lnga dang | dbang po bcu gcig ste de tsam nyi shu [rtsa] lnga khas len la | (サーンキヤ派は二十五タットヴァを「認識」対象として承認しているが、すなわちアートマンはプルシャであり、知的にして精神的、恒常、唯一という本性を有するものと認められており、それ (プルシャ) の享受 [対象] としては根本原因、大、自我意識、五タンマートラ、五元素、十一器官という二十五タットヴァが承認されている…) Kapstein (2009, 145) は “de tsam nyi shu rtsa lnga” をいづれも “the twenty-five primitives (*tanmātra*)” と解しているが、*PhPGT* 等の表現を考慮すると「二十五タットヴァ」として理解すべきである。

的な特徴の一つを成している可能性も指摘されうる¹³。

また、“guṇa”を“rang bzhin”とする詩節はPPTにもTSPにも引用されないが、チベット語訳が現存している仏教文献としてディグナーガ (Dignāga, ca. 480–540) 著 *Pramāṇasamuccayavṛtti* (PSV)、シャーンタラクシタ著 *Madhyamakālaṃkāravṛtti* (MAV)、プラジュニャーカラグプタ (Prajñākaragupta, ca. 750–810) 著 *Pramāṇavārttikālaṃkāra* (PVA)、*DhDhDG* に引用されている¹⁴。前者の詩節ほどではないにせよ、完全にテキストが一致するものは見受けられない。

¹³ サキヤパンディタ・クンゲーゲンツェン (Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182–1251) に帰されている学説綱要書 *gZhungs lugs legs par bshad pa* (ZL) サーンキヤ章にも本詩節と類似したものが引用されており、部分的にPhPGTとの共通性が見て取れる。

ZL (ZL_{BT} 126a2–3; ZL_K 230.9–11): ji skad du | khyab 'jug gi zhal snga nas | ral pa'am byi bo'am cod pan gyi* || cha lugs gang gis gnas kyang rung || de nyid** nyi shu lnga shes na || grol 'gyur 'di la the tshom med || ces so || (次のようにいわれている——「ヴィシュヌの面前では、二十五タットヴァを知れば、編髮行者であれ剃髮行者であれ髻髮行者であれ、いかなる格好をしようとも解脱するのである。この点に関して疑惑はない」と)。

* gyi] ZL_K; gyis ZL_{BT} ** de nyid] ZL_{BT}; de tsam ZL_K

引用の冒頭には「ヴィシュヌの面前では」という他にはみられない語句が付されている他、従来の第一パーダが順序を異にしている。また、上で検討した文献には一切みられなかったPhPGTの第三パーダ“cha lugs gang gis gnas kyang rung”が登場している点の特徴的である。また、「タットヴァ」に関してデルゲ版 (ZL_{BT}) ではTSPなど多くの文献と同じく“de nyid”としているが、中国蔵学出版社版 (ZL_K) はPhPGTと同じく“de tsam”としている。後者の場合でもパーダの順序は一致しないため、ZL著者がPhPGTを参照したとはいえないが、両者に共通する典拠が存在していた可能性も指摘できよう。ただし、ZLはJackson (1985) およびvan der Kuijp (1985) が偽撰説を論じており、16世紀頃に著述された可能性を指摘している (Jackson 1985, 7, van der Kuijp 1985, 84 参照)。PhPGTとZLとの対応については、後掲脚注37も参照のこと。そして、ニンマ派学匠ロンチェン・ラプジャンパ (Klong chen Rab 'byams pa, 1308–1363) による学説綱要書 *Theg pa mtha' dag gi don gsal bar byed pa grub pa'i mtha' rin po che'i mdzod* (GTD) サーンキヤ章に引用される類似詩節も“de tsam”とし、第三パーダを“cha lugs gang gis gnas kyang rung”とする点はPhPGTならびにZLと同様であるが、着目すべき差異としてはPPTの第三パーダ“bsti gnas gang du dga' ba der”も加えられて全体が5パーダとなっている点である。

GTD (GTD_D 24b5–6; GTD_A 33b5–6; GTD_O 52b5–53a1): de tsam nyi shu rtsa lnga shes na | ral pa'am spyi bo gtsug phud dam || cha lugs gang gis gnas kyang rung || bsti gnas gang du dga' ba der || grol 'gyur 'di la the tshom med ||

また、チュミクパ・センゲペル (Chu mig pa Seng ge dpal, 13世紀) 著 *Tshad ma nam par nges pa'i 'grel pa la ldeb* ('*Grel pa la ldeb*) にも類似詩節が引用され、同じく“tattva”が“de tsam”とされているが、その他“cod pan gyi”を“gtsug phud”とする点や第三パーダのテキストはPPTに一致しており、同書も“de tsam”が“tattva”対応語として用いられていた一資料となろう。その一方で、チュミクパと同時代と目されるチョンデンリクペーレルティ (bCom ldan rig pa'i ral gri, 1227–1305) 著 *Tshad ma nam nges rgyan gyi me tog* (rGyan gyi me tog) においては“de tsam”の代わりに“de nyid”とされているが、その他はすべて'*Grel pa la ldeb* と同一である。

'*Grel pa la ldeb* (59.7–8): de tsam nyi shu lnga shes na || ral pa'am byi bo'am gtsug phud kyi || bsti gnas gang du dga' ba der || grol 'gyur 'di la the tshom med |

rGyan gyi me tog (508.8): de nyid nyi shu lnga shes na || ral pa 'am byi bo 'am gtsug phud dam || bsti gnas gang du dga' ba der || grol 'gyur 'di la the tshom med ces 'byung ba yin no ||

¹⁴ PSV_{Tib}V ad *Pramāṇasamuccaya* 5.40 (D ce 76a5; P ce 81b3; PSV_{Tib}H 142.2–5): yon tan* rnams kyi rang bzhin mchog || snang ba'i lam du gang ma gyur || snang ba'i lam du gang gyur pa || sgyu ma bzhin du shin tu stong ||; PSV_{Tib}K ad *Pramāṇasamuccaya* 5.40 (P ce 167b1; PSV_{Tib}H 143.3–6): yon tan rnams kyi rang bzhin mchog || mthong ba'i lam du 'gro

引用詩節② *PhPGT* (15a4–5)

rang bzhin gyi* rang bzhin mchog ||
 mthong pa'i lam du** 'gyur ma yin*** ||
 mthong pa'i lam du† gang gyur pa‡ ||
 sgyu ma bzhin du shin tu gsog†† ||

* rang bzhin gyi] yon tan rnams kyi *PSV_{Tib}*, *PS*, *PVA_{Tib}*, *MAV* ** mthong pa'i lam du] . . . ba'i . . .
PSV_{Tib}K, *PVA_{Tib}*, *MAV*; snang ba'i lam du *PSV_{Tib}V*; snang ba'i lam du 'ang *PS_V* *** 'gyur ma yin] 'gro
 ma yin *PSV_{Tib}K*, *PS_K*; gang gyur pa *PSV_{Tib}V*; gang ma gyur *PS_V*; gang 'gyur te *PVA_{Tib}*, *MAV* † mthong
 pa'i lam du] . . . ba'i . . . *PSV_{Tib}K*, *PS_K*, *PVA_{Tib}*, *MAV*; snang ba'i lam du *PSV_{Tib}V*, *PS_V* ‡ gang gyur pa]
PSV_{Tib}, *PS*; gang gyur te *PVA_{Tib}*, *MAV* †† sgyu ma bzhin du shin tu gsog] sgyu ma bzhin du shin tu
 stong *PSV_{Tib}V*; de sgyu ma bzhin shin tu stong *PS_V*; sgyu ma lta bur shin tu gsog *PVA_{Tib}*, *MAV*; de ni
 sgyu ma lta bur gsog *PSV_{Tib}K*, *PS_K*

サーンキヤ章の参照資料

以上の議論は、チャバがサーンキヤ章の記述において *PPT* や *TSP* を参照したという可能性を否定するものではない。すでにサーンキヤ映像説に関して、*PhPGT* が *TSP* を参照して

ma yin ||** mthong ba'i lam du gang gyur pa || de ni sgyu ma lta bur gsog ||

* yon tan] D, P; you tan *PSV_{Tib}H* ** P omits *mthong . . . ma yin*.

なお、本詩節は *Pramāṇasamuccaya* ヴァスダララクシタ訳 (*PS_V*) ならびにカナカヴァルマン訳 (*PS_K*)
 にも掲載されている。*PS_V* (D ce 11b1–2): yon tan rnams kyi rang bzhin mchog | snang ba'i lam du 'ang gang ma
 gyur || snang ba'i lam du gang gyur pa || de sgyu ma bzhin shin tu stong ||; *PS_K* (P ce 11a7): yon tan rnams kyi rang
 bzhin mchog | mthong ba'i lam du 'gro ma yin || mthong ba'i lam du gang 'gyur pa || de ni sgyu ma lta bur gsog |

MAV ad *Madhyamakālamkāra* 94–97 (D sa 80a6; P sa 80a8–80b1; *MAV*, 310.1–6): yon tan rnams kyi rang bzhin
 mchog | mthong ba'i lam du 'gro ma yin* || mthong ba'i lam du gang 'gyur te** || sgyu ma lta bur shin tu*** gsog |†
 * 'gro ma yin] P, *MAV*; 'gro ba yin D ** te] P, *MAV*; de D *** lta bur shin tu] D, *MAV*; lta bu shun tu P
 † P omits |; || *MAV*,

PVA_{Tib} ad *Pramāṇavārttika* 4.12 (D the 134b7; P the 159a8–159b1): yon tan rnams kyi* rang bzhin mchog |
 mthong ba'i lam du 'gro ma yin || mthong ba'i lam du gang 'gyur te || sgyu** ma lta bur shin tu gsog |***

* kyi] D; kyiis P ** sgyu] P; sgyur D *** P omits |.

DhDhDG (D zhi 259a1–2; P₁ tsi 274a3–4; P₂ gi 23a3–4; *DhDhDG_{Dr}* 171): yon tan gsum gyi rang bzhin mchog ||
 mthong ba'i lam du 'gyur ma yin || mthong ba'i lam du gang gyur pa || sgyu ma bzhin du shin tu gsog |

また、本詩節はチャバの弟子ツァンナクパ・ツォンドゥーセンゲ (gTsang nag pa brTson 'grus seng ge、
 12世紀) 著 *Tshad ma rnam par nges pa'i ti ka legs bshad bsdu pa* (*bsDus pa*) および *rGyan gyi me tog* にも登場する
 が、冒頭部 “rang bzhin gyi” は “yon tan gsum” とされ *PhPGT* や *PSV* 等とも異なっている一方で、第四パーダ
 は *PhPGT* と一致するなどの特徴がみられる。

bsDus pa (58a3): yon tan gsum gyi rang bzhin mchog || mthong pa'i yul du 'gyur ma yin || mthong pa'i yul
 du gang gyur la || sgyu ma bzhin du shin tu gsog ||

rGyan gyi me tog (508.2–3): yon tan gsum gyi rang bzhin mchog | mthong ba'i lam du 'gyur ma yin ||
 mthong ba'i lam du gang gyur pa || sgyu ma bzhin du shin tu gsog |

なお、*GTD* に引用される詩節では第一パーダが “yon tan gsum gyi yon tan mchog” としていずれも “yon
 tan” とされている点の特徴的であり、*PhPGT* とは対比的な関係にあるものとみなされる。

GTD (*GTD_o* 23b7–24a1; *GTD_A* 32b3–4; *GTD_o* 51a1–2): yon tan gsum gyi yon tan mchog || mthong ba'i lam du
 'gyur ma yin || mthong ba'i lam du gang 'gyur ba || sgyu ma bzhin du shin tu gsog ||

いた可能性も指摘されているが¹⁵、前掲二詩節とは対照的に、*PPT* や *TSP* と大略同じテキスト本文を示す引用詩節が四点見受けられる。そのため、ここでも校異を示しつつ当該詩節を掲げる。最初の三詩節は純質・激質・翳質の特性を述べたものであり、*PPT* に引用される他、その他 *JSSN* や *DhDhDG* にも引用されている¹⁶。

引用詩節③–⑤ *PhPGT* (15b1–4)

rangs dang mgu dang kun dga' dang ||
 dga' zhing* zhi ba'i sems nyid dag ||
 res 'ga** yang ni snang 'gyur ba ||
 'di*** dag snying stobs yon tan 'dod† ||

* dga' zhing] bde dang *PPT*; bde zhing *JSSN* ** res 'ga'] lan 'ga' *PPT*; des 'ga' *JSSN* *** 'di] de *PPT*,
JSSN † 'dod] no *PPT*, *JSSN*

mi dga'* yongs su gdung ba** dang ||
 mya ngan 'dod dang 'jig[s] pa*** dag ||
 res 'ga'† snang pa'i gtan tshigs kyis‡ ||
 de ni†† rdul gyi‡‡ rtags su 'dod ||

¹⁵ 近藤 2017 参照。

¹⁶ *PPT* ad *Prajñāpradīpa* 1.1 (D wa 138b7–139a1; P wa 160a3–5) rangs dang mgu dang kun dga' dang || bde dang zhi ba'i sems nyid dag | lan 'ga' yang ni snang gyur pa || de dag snying stobs yon tan no || mi dga' ba dang yongs gdung* dang || mya ngan 'dod dang mi bzod dag | gang du snang ba'i gtan tshigs kyis || de dag rdul gyi rtags su 'dod || rmongs dang de bzhin gti mug dang || bag med gnyid dang g.yel ba dag | lan 'ga' yang ni snang gyur pa || de dag mun pa'i yon tan no ||

* gdung] P; gdungs D

See also *PPT* ad *Prajñāpradīpa* 1.1 (D wa 140a7–140b2; P wa 161b7–162a1): rangs dang mgu dang kun dga' dang || bde dang zhi ba'i sems nyid dag | lan 'ga' yang ni snang gyur pa || de dag snying stobs yon tan no || . . . mi dga' ba dang yongs gdung* dang || mya ngan 'dod dang mi bzod dag | gang du snang ba'i gtan tshigs kyis || de dag rdul gyi rtags su 'dod || . . . rmongs dang de bzhin gti mug dang || bag med gnyid dang g.yel ba dag | lan 'ga' yang ni** snang gyur pa || de dag mun pa'i yon tan no ||

* gdung] P; gdungs D ** ni] P; mi D

JSSN ad *Jñānasārasamuccaya* 12b (D tsha 38a3–5; P tsha 43b1–3; *JSSN*_{pp} 143.2–7): rangs dang mgu dang kun dga' dang || bde zhing zhi ba'i sems nyid dag | des dga' yang ni snang 'gyur ba || de dag snying stobs yon tan no || mi dga' yongs su gdung ba dang || mya ngan 'dod dang mi bzod dag | gang du snang ba'i gtan tshigs kyi || de dag rdul ni rtags su 'dod || rmongs dang de bzhin gti mug dang || bag med gnyid dang g.yel ba dag | lan 'ga' yang ni snang gyur pa || de dag mun pa'i yon tan 'dod ||

DhDhDG (D zhi 258b7–259a1; P₁ tsi 274a2–3, P₂ gi 23a1–3; *DhDhDG*_{DR} 168–70): rangs dang mgu dang kun dga' dang || bde dang zhi ba'i* sems nyid dag | res 'ga' yang ni snang gyur pa** || de dag snying stobs yon tan no || mi dga' ba dang yongs gdung*** dang || mya ngan 'dod dang mi bzod dag | gang du snang ba'i gtan tshigs kyis || de dag rdul gyi† rtags su 'dod || rmongs dang‡ de bzhin gti mug dang || bag med†† gnyid dang g.yel ba dag‡‡ | lan 'ga' yang ni snang gyur pa ||††† de dag mun pa'i yon tan no ||

* bde dang zhi ba'i] P₂, *DhDhDG*_{DR}; bde bzhi pa yi D, P₁ ** gyur pa] D, P₁, *DhDhDG*_{DR}; 'gyur ba P₂ *** yongs gdung] D, P₁, *DhDhDG*_{DR}; yongs gdungs P₂ † gyi] D, P₂, *DhDhDG*_{DR}; gyis P₁ ‡ dang] P₂; pa D, P₁, *DhDhDG*_{DR} †† bag med] P₁, P₂, *DhDhDG*_{DR}; bag mad D ‡‡ g.yel ba dag] P₁, *DhDhDG*_{DR}; g.yel ba dang P₂; gsal bdag D ††† lan 'ga' . . . gyur pa] *DhDhDG*_{DR}; len 'ga' . . . D; om. P₁

* mi dga' mi dga' ba PPT, JSSN ** yongs su gdung ba JSSN; yongs gdung PPT *** 'jig[s] pa mi
 bzod PPT, JSSN † res 'ga' gang du PPT, JSSN ‡ kyis gyis PPT; kyi JSSN †† ni dag PPT, JSSN
 ‡‡ gyi PPT; ni JSSN

rmongs dang de bzhin gti mug dang ||
 bag med gnyid dang g.yeng pa* dag ||
 res 'ga'*** yang ni snang 'gyur ba ||
 de dag mun pa'i yon tan 'dod*** [||]

* g.yeng pa] g.yel ba PPT, JSSN ** res 'ga'] lan 'ga' PPT, JSSN *** 'dod] JSSN; no PPT

本詩節のサンスクリット原典は回収されていないため厳密な訳語の正当性を論じることは困難であるが、PhPGTとPPTとの間で意味上大きな差異が見られることはない。ただし、激質の一特性としては“jig[s] pa”と“mi bzod”という相違もみられ、意味領域としては多少異なっている¹⁷。何よりもまず「グナ」を示す語として“yon tan”という通例の訳語を用いている点は、“rang bzhin”を用いていた前掲詩節とは顕著な差異を示しており、PPT等の先行文献を参照していたことが推察される。

また、因中有果説 (satkāryavāda/hetuphalasadvāda) に関わる次の詩節は仏教文献の中でもTSPにしか確認されておらず、しかもそのテキストもTSPとほぼ一致している¹⁸。この点は、チャバがTSPを参照していた可能性をより強固なものとする。

引用詩節⑥ PhPGT (16a3)

zho gang yin pa de 'o ma dang* ||
 'o ma gang yin de zho zhes ||
 drag po len gyis bstan pa ste ||
 de bzhin 'bigs byed gnas pa 'ang 'chad ||

* TSP omits dang.

また、TSPとの関係性において附言すれば、チャバは本章でタットヴァの展開次第を示

¹⁷ “jig[s] pa”が「恐怖」を意味するのに対し、“mi bzod”は通例「焦燥」「忍耐力の欠如」などを意味するため、両者の意味領域は多少異なっている。なお、純質の一特性として挙げられる“dga' zhing”に関してもPPT等の“bde”とは表現を異にしているが、いずれも「安楽」(sukha)の意味領域からは逸脱していない。各グナの特性に関しては、後掲脚注41参照。

なお、ここで“jig[s] pa”と修訂を施した根拠は、同じく三詩節を引用する‘Grel pa la ldebに由来する。同書は“jigs pa”とする点でPhPGTと共通しているが、その他の点は必ずしもPhPGTに近いわけではなく、PPTやJSSN、DhDhDGとも共通しないテキストを示している。

‘Grel pa la ldeb (59.1-2): dga' dang rangs dang kun dga' dang || bde zhing zhi ba'i sems nyid ni || res 'ga' yang ni snang 'gyur pa || 'di dag snying stobs rtags su 'dod || mi dga' yongs su gdung pa dang || mya ngan 'dod dang 'jigs pa ni || res 'ga' yang ni snang 'gyur pa || 'di dag rdul gyi rtags su 'dod || rmongs dang de bzhin gti mug dang || bag med gnyid dang g.yel ba ni || res 'ga' yang ni snang 'gyur pa || 'di dag mun pa'i rtags su 'dod ||

¹⁸ TSP_{Tib} ad TS 16 (D ze 152a3-4; P'e 184b4-5): zho gang yin pa de 'o ma || 'o ma gang yin de zho zhes || drag po len gyis bstan pa ste || de bzhin 'bigs byed gnas pa 'ang 'chad ||

す SK 22 を引用している (15b6-7)。その際、第三パーダの脱落という不備こそみられるものの、TSP と同じく「イーシュヴァラクリシュナが次のように [曰く]」(15b6: ji skad du dbang phyug nag pos, Skt. yathoktam íśvarakṛṣṇena) として引用を始めており、そのチベット語訳も完全に一致している¹⁹。

rang bzhin las chen de las nga rgyal te ||
de las tshogs ni rnam pa bcu drug go ||
[bcu drug po ni de dag rnams las kyang ||]*
lnga po rnams las 'byung ba chen po lnga ||

* bcu drug po . . . kyang] TSP; om. PhPGT

SK 22 は他にもブラジュニャーカラマティ (Prajñākaramati、10 世紀後半) 著 *Bodhicaryāvatārapañjikā* (BCAP) にも引用されるが、そのチベット語訳は PhPGT ないし TSP とは部分的に異なっているため²⁰、チャパが TSP を参照した可能性がさらに高まることとなる。

さらに、本章記述に際しては NBPS が参照された可能性も指摘されうる。NBPS にはサーンキヤの主張として事物間に見出される七種の関係 ('brel pa, *saṃbandha) について喩例とともに言及されているが²¹、チャパもほぼ同様の組み合わせを述べている (16a7-16b2)。

- | | |
|--|-----------------|
| 1. 所有者と所有物 (bdag dang bdag gi) の関係 | 〈例〉デーヴァダッタと馬 |
| 2. 素材と変異物 (rang bzhin dang 'gyur ba) の関係 | 〈例〉土と壺 |
| 3. 動力因とその結果 (rgyu dang rgyu can) の関係 | 〈例〉陶工と壺 |
| 4. 原因と結果 (rgyu dang 'bras bu) の関係 | 〈例〉種と芽 |
| 5. 父母のごとき (pha ma lta bu) 関係 | 〈例〉枝と樹 |
| 6. 共存 (lhan cig phyod pa) 関係 | 〈例〉チャクラヴァーカとその妻 |
| 7. 対立関係 (dgra zla'i 'brel pa) | 〈例〉鳥と梟 |

¹⁹ TSP_{Tib} ad TS 7 (D ze 147a5-6; P 'e 178a8-178b1): ji skad du dbang phyug nag pos | rang bzhin las chen de las nga rgyal te ||* de las tshogs ni rnam pa bcu drug go ||** bcu drug po ni de dag rnams las kyang ||*** lnga po rnams† las 'byung ba chen po lnga ||‡

* ||] D; | P ** ||] D; | P *** ||] D; | P † rnams] D; rnam P ‡ P omits ||.

²⁰ BCAP ad *Bodhicaryāvatāra* 9.128 (561.4-5). See BCAP_{Tib} (D la 269a6-7; P la 364a7): rang bzhin las ni chen po de las ni || ngar 'dzin de las tshogs ni bcu drug yin || bcu drug po yi nang nas lnga po rnams || de las kyang ni 'byung ba lnga rnams yin ||

²¹ 茂木 1989, 51n10 参照。NBPS (D we 95a7-95b2; P zhe 117a7-117b2): grangs can pa rnams ni dngos po rnams kyi 'brel pa rnam pa bdun brjod do ||* 'di lta ste | bdag dang bdag gir 'brel pa ni lha sbyin dang rta** lta bu'o || rang bzhin dang 'brel pa ni 'jim pa dang bum pa lta bu'o || rgyu dang rgyu can du 'brel pa ni rdza mkhan dang bum pa lta bu'o || rgyu dang 'bras bur 'brel pa ni sa bon dang myu gu lta bu'o || pha dang ma lta bur 'brel pa ni yal ga dang shing ljon pa lta bu'o || lhan cig spyod pa'i 'brel pa ni ngur pa dang khyo shug*** lta bu'o || dgra zla'i 'brel pa ni bya rog dang 'ug pa lta bu'o zhes zer ro || (サーンキヤ派の者たちは七種の関係を説いている。すなわち、(1) デーヴァダッタと馬のような所有者と所有物の関係、(2) 土と壺のような素材と [変異物] の関係、(3) 陶工と壺のような動力因とその結果の関係、(4) 種と芽のような原因と結果の関係、(5) 枝と樹のような父母のごとき関係、(6) チャクラヴァーカの雌雄のような共存関係、(7) 鳥と梟のような対立関係である。)

* ||] D; | P ** rta] P; mchod sbyin D *** khyo shug] D; khyo shugs P

時代的にチャバに先行する仏教文献として七種の関係に言及するものとしては、NBPSの他にもジネードラブッディ (Jinendrabuddhi, ca. 710–770) 著 *Pramāṇasamuccayaṭīkā* (PST) があるが、PST に言及される内容とは関係の名称も喩例も NBPS ならびに PhPGT とは異にするものが多い²²。とりわけ NBPS と PhPGT とが共通して列挙する「父母のごとき (pham lta bu) 関係」は、チャバ以前には NBPS にしか見受けられない特異な表現であるが、元を正せば「枝と樹」という喩例と意味上適合していない。PST はじめ七種の関係に言及する他の文献の記述や (後掲脚注 62 参照)、「枝と樹」という喩例を考慮すると、これは元来「要素とその集合の関係」(mātrāmātrikabhāva) であった可能性が想定される。その経緯こそ臆測にすぎないものの、“mātrā-” 部分を “mātr̥” (母) の派生形と考えてチベット語訳者が誤訳した可能性がある。その場合、チャバはその誤訳もあわせて引き継いだことになるため、NBPS を参照していたことはほぼ確実といえよう。

²² PST ad PSV 2.36c (94.7–95.7): *svasvāmibhāvena veti rājabhṛtyavat pradhānapuruṣavac ca. udāharaṇadvayaṃ lokaśāstraprasiddhivaśena. evam uttaratrāpi vijñeyam. svasvāmibhāvaḥ parasparāpekṣayā. svasya svāminam pratibhāvas* tadyogyatā. evaṃ svāmīno 'pi svam pratibhāvaḥ***. prakṛtīvikārabhāvena vā dadhikṣīravat pradhānamahadādivac ca. prakṛtīr avibhaktaṃ kāraṇam. vikāras tasyāḥ pāriṇāmiko dharmāḥ. kāryakāraṇabhāvena vā parasparopakāralakṣaṇena rathāṅgavat sattvādivac ca śabdādībhāvena pariṇatau. nimittanaimittikabhāvena vānyataropakāralakṣaṇena kulālaghaṭavat puruṣapradhānavṛttivac ca. mātrāmātrikabhāvena vāvayavāvayavibhāvalakṣaṇena śākhādivṛkṣavat śadbādīmahābhūtavac ca. saḥacaribhāvena vā cakravākavat sattvādivac ca. vadhyavadhakabhāvena vāhinakulavad aṅgāṅgisattvādivac ca. sattvādīnām hi yasyāṅgitvam, tenetarābhībhavāḥ. eṣa saptavidhaḥ sambandhaḥ. (「あるいはまた、所有者と所有物の関係によって」というのは、[例えば] 王と傭兵のよう、そして根本原因とプルシャのようなものである。両例示は、[それぞれ] 世間ならびに [サーンキヤ] 学において周知のものに由来している。以降 [の関係] においても同様に理解すべきである。(1) 所有者と所有物の関係 (svasvāmibhāva) は相互依存によって [関係している対象物を推理する]。[すなわち] 所有者に対する所有物の対置 [すなわち] それに対する適合性である。同様に、所有物に対する所有者の対置でもある。あるいはまた、(2) 素材と変異物の関係 (prakṛtīvikārabhāva) によって [関係している対象物を推理する]。[例えば] 凝乳と牛乳のよう、そして根本原因と大などのようなものである。素材は未分化の原因であり、変異物はそれ(素材)が変容した存在である。あるいはまた、(3) 原因と結果の関係 (kāryakāraṇabhāva) [すなわち] 相互補助を特質とするものによって [関係している対象物を推理する]。[例えば] 戦車の各部品のように、そして純質など [三グナ間] のように音声などの生成に際して変容する場合である。あるいはまた、(4) 動力因とその結果の関係 (nimittanaimittikabhāva) [すなわち] 別のものに対する補助を特質とするものによって [関係している対象物を推理する]。[例えば] 陶工と壺のよう、そしてプルシャと根本原因の活動のようなものである。あるいはまた、(5) 要素とその集合 (mātrāmātrikabhāva) [すなわち] 部分と〈全体〉の関係を特質とするものによって [関係している対象物を推理する]。[例えば] 枝などと樹のよう、そして音声などと大元素のようなものである。(6) 共存関係 (saḥacaribhāva) によって [関係している対象物を推理する]。[例えば] チャクラヴァーカのように、そして純質などのようなものである。あるいはまた、(7) 加害と被害の関係 (vadhyavadhakabhāva) によって [関係している対象物を推理する]。[例えば] 蛇とマンガースのよう、そして主要状態・副次状態にある純質などのようなものである。すなわち、純質など [いずれかのグナ] が主要状態にあることによって、残る [二グナ] が制圧されるのである。以上が七種の関係である。)

* pratibhāvas] em. (see Steinkellner 2017, 159); prati bhāvas PST ** pratibhāvaḥ] em. (see Steinkellner 2017, 159); prati bhāvaḥ PST

なお、PST チベット語訳 (PST_{tb}) における各関係の名称は、(1) nor dang bdag po'i dngos po、(2) rang bzhin dang rnam 'gyur gyi dngos po、(3) 'bras bu dang rgyu'i dngos po、(4) rgyu mtshan dang rgyu mtshan can gyi dngos po、(5) tsam po dang tsam po can gyi dngos po、(6) lhan cig spyod pa'i dngos po、(7) gnod bya gnod byed kyi dngos po であり (D ye 118a1–5; P re 134a1–134b1)、NBPS および PhPGT との名称の相違はおろか、(5) (7) は両文献には見受けられないという相違がある。

以上の議論をまとめると、チャバは本章の著述に際して PPT や TSP 等を参照した跡も十分見受けられるが、一方でそれらとは一致しない引用箇所も見受けられた。無論 PhPGT 伝承の過程で改変が起きたという可能性も想定されるが、その可能性を除外した場合、チャバは PPT や TSP 等現存資料以外にも参照文献が存在していたという新たな可能性が浮き彫りとなる。もっともこれら参照文献の翻訳がチャバ在世時より改変されているという可能性は考慮されねばならないが²³、“upastha”に相当する“nyer gnas”という表現を考慮すると、著述に当たりサンスクリット資料から新たに訳出したという可能性も想定されうであろう。

ウパロセル学説綱要書との関係性

チャバよりも二世紀ほど時代の下るウパロセルの学説綱要書 BSGT は、後世チベットにおける学説綱要書の典拠の一つと考えられている²⁴。BSGT の記述は先行する PhPGT を参照したことが指摘されているが²⁵、BSGT サーンキヤ章の分量は PhPGT の約五倍に上るため、少なくとも PhPGT 以外にも複数の資料を参照していたであろうことは想像に難くない。その主要な参照資料はシャーンタラクシタやカマラシーラの著作と考えられ²⁶、その点に関してはチャバと同様と考えられる。ここでは両学説綱要書の関係性を改めて検討する上でも、既述の校合も再掲しつつ先に検討した詩節等の引用状況に焦点を当てる。まず、前掲引用詩節①-⑥はすべて BSGT に引用されているが、そのいずれも PhPGT とは部分的にテキストを異にしている。

引用詩節①' BSGT (20b3)

de nyid* nyi shu lnga shes na** ||
 ral pa'am mgo zlum*** cod pan can† ||
 gnas ni gang dang gar gnas kyang‡ ||
 grol'gyur'di la the tshom med ||

* de nyid] PPT, TSP; de tsam PhPGT ** na] TSP; nas PhPGT; pas PPT *** mgo zlum] TSP; byi bo'am PhPGT, PPT † cod pan can] TSP; cod pan gyi PhPGT; gtsug phud kyi PPT ‡ gnas ni gang dang gar gnas kyang] TSP; cha lugs gang gis gnas kyang rung PhPGT; bsti gnas gang du dga' ba der PPT

引用詩節②' BSGT (16b5-6)

yon tan rnams kyi* rang bzhin mchog |
 mthong ba'i lam du** 'gro ma yin*** ||

²³ 木村 (1993, 287-286n12) は TSP に関して、チャンキヤ・ロールペードルジェ (lCang skya Rol pa'i rdo rje, 1717-1786) の引用するテキストが現行のサンスクリット原典ならびにチベット語訳とも異なっていることを指摘している。

²⁴ 御牧 1978, 98 参照。

²⁵ 仏教説に関して PhPGT が BSGT の主要典拠であった点については、西沢 2013, 77-78 参照。サーンキヤの映像説に関しては近藤 2017, 482-481 参照。

²⁶ 御牧 1980, 311; 1982, 183; 1987, 306、Mimaki 1982, 18, 19n45; 1983, 161 参照。特にサーンキヤ章に関しては茂木 1984, 169 参照。

mthong ba'i lam du† gang gyur de‡ ||
 sgyu ma bzhin du shin tu gsog†† |

* yon tan rnam kyil] *PSV_{Tib}, PS, PVA_{Tib}, MAV*; rang bzhin gyi *PhPGT* ** mthong ba'i lam du] *PhPGT*
 (... pa'i ...), *PSV_{Tib}K, PVA_{Tib}, MAV*; snang ba'i lam du *PSV_{Tib}V*; snang ba'i lam du 'ang *PS_v* *** 'gro ma
 yin] *PSV_{Tib}K, PS_k*; 'gyur ma yin *PhPGT*; gang gyur pa *PSV_{Tib}V*; gang ma gyur *PS_v*; gang 'gyur te *PVA_{Tib}, MAV*
 † mthong ba'i lam du] *PhPGT* (... pa'i ...), *PSV_{Tib}K, PS_k, PVA_{Tib}, MAV*; snang ba'i lam du *PSV_{Tib}V, PS_v*
 ‡ gang gyur de] gang gyur pa *PhPGT, PSV_{Tib}, PS*; gang gyur te *PVA_{Tib}, MAV* †† sgyu ma bzhin
 du shin tu gsog] *PhPGT*; sgyu ma bzhin du shin tu stong *PSV_{Tib}V*; de sgyu ma bzhin shin tu stong *PS_v*;
 sgyu ma lta bur shin tu gsog *PVA_{Tib}, MAV*; de ni sgyu ma lta bur gsog *PSV_{Tib}K, PS_k*

引用詩節③'–⑤' **BSGT (16b3–4)**

rangs dang mgu dang kun dga' dang ||
 bde dang* zhi ba'i sems nyid dag |
 lan 'ga'*** yang ni snang gyur pa*** ||
 de† dag snying stobs yon tan 'dod‡ ||

* bde dang] *PPT*; dga' zhing *PhPGT*; bde zhing *JSSN* ** lan 'ga'] *PPT*; res 'ga' *PhPGT*; des 'ga' *JSSN*
 *** snang gyur pa] snang 'gyur ba *PhPGT, PPT, JSSN* † de] *PPT, JSSN*; 'di *PhPGT* ‡ 'dod] *PhPGT*; no
PPT, JSSN

mi dga'* yongs su gdung ba** dang ||
 mya ngan 'dod dang mi bzod*** dag |
 gang du† snang ba'i gtan tshigs kyis ||
 de dag‡ rdul gyi†† rtags su 'dod ||

* mi dga'] *PhPGT*; mi dga' ba *PPT, JSSN* ** yongs su gdung ba] *PhPGT, JSSN*; yongs gdung *PPT*
 *** mi bzod] *PPT, JSSN*; 'jig pa *PhPGT* † gang du] *PPT, JSSN*; res 'ga' *PhPGT* ‡ dag] *PPT, JSSN*; ni
PhPGT †† gyi] *PhPGT, PPT*; ni *JSSN*

rmongs dang de bzhin gti mug dang ||
 bag med gnyid dang g.yel ba* dag |
 lan 'ga'*** yang ni snang gyur pa*** ||
 de dag mun pa'i yon tan no† ||

* g.yel ba] *PPT, JSSN*; g.yeng pa *PhPGT* ** lan 'ga'] *PPT, JSSN*; res 'ga' *PhPGT* *** snang gyur pa]
 snang 'gyur ba] *PhPGT, PPT, JSSN* † no] *PPT*; 'dod *PhPGT, JSSN*

引用詩節⑥' **BSGT (18b5)**

zho gang yin pa de 'o ma* ||
 'o ma gang yin de zho zhes ||
 drag po len gyis bshad pa ste ||
 de bzhin 'bigs byed gnas pa'ang 'chad ||

* 'o ma] *TSP*; 'o ma dang *PhPGT*

引用詩節②' に関しては部分的に *PhPGT* と一致しているが、①' および⑥' に関しては *TSP* と完全に一致し、③'-⑤' に関しては *PPT* のテキストに近い。また、*PhPGT* と同様に *SK 22* も引用されており、第三パーダの脱落もみられないものの、第二パーダは *PhPGT* と *TSP* と大きく異にしている²⁷。

さらに、*BSGT* には事物間の七種の関係にも触れられており、その内容は基本的に *PhPGT* と *NBPS* とともに共通しているが、既述の「父母のごとき関係」に代わって「部分と〈全体〉 (*yan lag dang yan lag can*) [の関係]」とされている²⁸。喩例は同じく枝と樹であり、関係

²⁷ *BSGT* (17b1-2): de skad du'ang dbang phyug nag pos | rang bzhin las chen de las nga rgyal yin* || de las bcu drug gi ni tshogs rnam so** || bcu drug po ni de dag rnam las kyang || lnga po rnam las 'byung ba chen po lnga ||

* yin] te *PhPGT, TSP* ** de las bcu drug gi ni tshogs rnam so] de las tshogs ni rnam pa bcu drug go
PhPGT, TSP

なお、この第二パーダのテキストは '*Grel pa la ldeb* (ただし“rnam so”を“rnam 'byung”とする) および *rGyan gyi me tog, GTD* にもみられる。とりわけ '*Grel pa la ldeb* は部分的に *PhPGT* との共通性を示しているが (前掲脚注 13, 17、後掲脚注 46, 48 参照)、この点は *BSGT* との共通性が見て取れ、テキストの伝承上 *PhPGT* と *BSGT* の中間に位置すると評することができよう。その一方で、時代的にチャバにより近いと目される *bsDus pa* における引用は、第二パーダは *PhPGT* ならびに *TSP* とほぼ一致したテキストを示しており、また *ZL* においても同様である。

'*Grel pa la ldeb* (59.4-5): dbang phyug nag po'i gzhung las | rang bzhin las chen de las nga rgyal te || de las bcu drug gi ni tshogs rnam 'byung || bcu drug po nyid de dag rnam la yang || de tsam lnga las 'byung pa rnam lnga 'byung | zhes so ||

rGyan gyi me tog (507.6): ... dbang phyug nag po'i rgyud las rang bzhin las chen de las nga rgyal yin || de las bcu drug gi ni tshogs rnam so || bcu drug po ni de dag rnam las kyang || lnga po rnam las 'byung ba chen po lnga | zhes 'byung ngo ||

GTD (*GTD*_o 23b6-7; *GTD*_A 32b1-3; *GTD*_o 50b4-5): don de dag dbang phyug nag po'i gzhung las | rang bzhin las chen de las nga rgyal yin || de las bcu drug gi ni tshogs rnam so || bcu drug po yang de dag rnam las kyang || dbang po rnam las 'byung ba chen po lnga || zhes so ||

See also *bsDus pa* (58a1-2): ji skad du dbang phyug nag po zhes bya ba'i gzhung las | rang bzhin las chen de las nga rgyal te || de las tshogs ni rnam pa bcu' drug 'byung || de ltar bcu' drug 'byung pa de la yang || de tsam lnga las 'byung pa rnam lnga 'byung || zhes bshad pa yin no ||; *ZL* (*ZL*_{BT} 124b2; *ZL*_K 227.7-10): de skad du yang dbang phyug nag pos | rang bzhin las chen de las nga rgyal te || de las tshogs ni rnam pa bcu drug 'byung || de ltar bcu drug byung ba de las kyang || de tsam lnga las 'byung ba rnam lnga 'byung || zhes so ||

²⁸ 茂木 1989, 51n10 参照。 *BSGT* (20a1-3): dngos po'i 'brel ba rnam pa bdun || grangs can pa dag nges par byed pa'i tshad ma ni mngon sum dang | rjes su dpag pa dang | lung tshad ma gsum khas len to || dngos po la mi 'khrul ba'i 'brel pa ni lhas byin dang rta lta bu nor dang bdag po dang | 'jim pa dang bum pa ltar rang bzhin dang 'gyur ba dang | rdza mkhan dang bum pa ltar rgyu dang rgyu can dang | sa bon dang myu gu ltar rgyu dang 'bras bu dang | sdong po dang yal ga ltar yan lag dang yan lag can dang | ngur pa khyo shug ltar lhan cig 'grogs pa dang | bya rog dang 'ug pa ltar dgra dang dgra zla'i 'brel pa dang bdun ni rigs pa'i thigs pa'i phyogs snga ma las so || (事物には七種の関係がある。サーンキヤ派の者たちは確定 (決定知) をもたらす認識手段として、知覚、推理、伝承 (*lung*) という三種の認識手段を承認している。事物に対して逸脱することのない関係は、(1) デーヴァダッタと馬のような所有物と所有者 (*nor dang bdag po*) [の関係]、(2) 土と壺のような素材と変異物 [の関係]、(3) 陶工と壺のような動力因とその結果 [の関係]、(4) 種と芽のような原因と結果 [の関係]、(5) 樹と枝のような部分と〈全体〉 (*yan lag dang yan lag can*) [の関係]、(6) チャクラヴァーカの雌雄のような共存 (*lhan cig 'grogs pa*) [関係]、(7) 鳥と梟のような敵との対立関係という七種は *Rigs pa'i thigs pa'i phyogs snga ma* に拠っている。)

の名称としては *PhPGT* および *NBPS* に比して適切な名称が挙げられているが²⁹、ウパロセルはその出典として *Rigs pa'i thigs pa'i phyogs snga ma* という文献に言及している。この文献はおそらく *NBPS* に相当するものと考えられるが、現行 *NBPS* チベット語訳とは関係の名称が一致していない。*Frauwallner* (1957, 98) は『デンカル』目録 (*lDan kar ma*, 824 成立) の記述から *NBPS* に異訳ないし改訂版があった可能性を指摘しているが、その場合、ウパロセルは現存 *NBPS* とは異なる訳書を参照していた可能性が考えられる³⁰。いずれにせよウパロセルは、*TSP* も含めカマラシーラの著作に精通していたことが窺い知れる。

以上、*PhPGT* と *BSGT* が共通して引用する詩節、および七種の間係を考慮する限り、ウパロセルが *PhPGT* を参照したとは考えがたい。無論サーンキヤの一般的教説に関しては共通した記述もみられるが、後述の訳注においても適宜指摘するように³¹、両者の記述は必ずしも一致するわけではない。*PhPGT* も参照資料の一つであった可能性は十分あるものの、両者の関係性については他の章も含めてより具体的な記述内容の比較が求められる。

²⁹ 七種の間係における「部分と〈全体〉の間係」は *PST* でも言及されているが、喩例は同じく枝と樹であり、「要素とその集合の間係」を換言する形で触れられている。前掲脚注 22 参照。

³⁰ *Rigs pa'i thigs pa'i phyogs snga ma* というこの書名は、『デンカル』目録 no. 700 所掲のものに一致する。同目録 no. 701 には同じカマラシーラの著作として *Rigs pa'i thigs pa'i phyogs snga ma bsdus pa* とあるが、*Frauwallner* (1957, 98) は『デンカル』目録 no. 700 と no. 701 は同本の異訳か改訂版であると推測しており、戸崎 (1960, 140) は現存する *NBPS* チベット語訳が no. 701 に相当すると考えている。実際、*NBPS* と *BSGT* との間係点としては既述の「父母のごとき関係一部分と〈全体〉の間係」に加え、「所有者と所有物の関係」(*bdag dang bdag gi NBPS*; *nor dang bdag po BSGT*) や「共存関係」(*lhan cig spyod pa NBPS*; *lhan cig 'grogs pa BSGT*) としてわずかながら名称を異にしている点も見受けられ、ウパロセルが現存 *NBPS* とは異なる著作、おそらく no. 700 相当の訳書を参照していたものと推察される。

³¹ 後掲脚注 47-49, 51 参照。

チャパ・チューキセンゲ『仏教説と外教説の弁別』
サーンキヤ章訳注

〈凡例〉

- ・ 底本は *bKa'gdams gsung 'bum* 第9巻 ([Chengdu]: Si khron Mi rigs dPe skrun khang, 2006) 7(1a)–72(33b) 所収 *bDe bar gshegs pa dang phyi rol pa'i gzhung rnam par 'byed pa* を用いた。
- ・ ウメ (dbu med) 体の隠字 (bskung/bskung yig) については、通行のウチェン (dbucan) 体を記した。
- ・ 字句の補記は [] (写本における訂正、補記も含む)、削除は { } によって示した。
- ・ サーンキヤ文献の典拠に関して、SK に遡及されうるものは SK を挙げることとし、SK 各注釈書の記述については基本的に言及していない。
- ・ チベット撰述文献に関する言及は主として、PhPGT との関係性が指摘されている BSGT、およびチャパ以降で比較的チャパに時代が近いと目されているツァンナクパ・ツォンドゥーセンゲ (gTsang nag pa brTson 'grus seng ge, 12世紀) 著 *Tshad ma rnam par nges pa'i ti ka legs bshad bsdu pa* (*bsDus pa*)、およびチュミクパ・センゲペル (Chu mig pa Seng ge dpal, 13世紀) 著 *Tshad ma rnam par nges pa'i 'grel pa la ldeb* (*'Grel pa la ldeb*)、チョンデンリクペーレルティ (bCom ldan rig pa'i ral gri, 1227–1305) 著 *Tshad ma rnam nges rgyan gyi me tog* (*rGyan gyi me tog*)、著者不明の *Tshad ma rnam 'grel gsal bar byed pa'i zin bris legs par bshad pa rin po che'i sning po* (*Rin po che'i sning po*)、さらにサキヤバンディタ・クンガーギェンツェン (Sa skya pañḍita Kun dga' rgyal mtshan, 1182–1251) の著作 (偽撰が指摘されている学説綱要書 *gZhunggs lugs legs par bshad pa* (ZL) も含む) に限定した。

A. 二十五タットヴァ (15a1–16a2)

A1. 概要 (15a1–4)

da ni grangs can pa'i lugs brjod par bya'o | grangs can pas gtso bo dang | chen po dang | nga rgyal dang | mig dang rna ba dang sna dang lce^[15a2] dang lus te blo'i dbang po lnga dang | ngag dang lag pa dang rkang pa dang rkub dang nyer gnas te las kyi dbang po lnga dang gnyis ka'i dbang po yid dang sgra dang dri dang ro dang reg dang kha dog ste de tsam lnga dang | nam mkha' dang sa^[15a3] dang chu dang rlung dang me ste 'byung pa lnga te | de dag longs spyod pa'i po shes rig gi skyes bu dang de tsam nyi shu rtsa lnga po shes na 'khor ba las grol bar 'dod de |

de tsam nyi shu [lnga] shes nas ||
ral pa 'am byi bo 'am cod^[15a4] pan gyi ||
cha lugs gang gis gnas kyang rung ||
grol 'gyur 'di la the ts[h]om med ||³²

八九

³² 本詩節は、サーンキヤ文献のみならず他学派文献にもしばしば引用される次の詩節に由来しており、一部の文献ではサーンキヤ学匠パンチャシカ (Pañcaśikha) に帰せられる (今西 1972, 211–12n14 参照)。

zhes 'byung pa lta bu'o ||

さて [ここで]、サーンキヤ派の見解が述べられねばならない。サーンキヤ派は、根本原因 (gtso bo, *pradhāna)、大 (chen po, *mahat)、自我意識 (nga rgyal, *ahaṃkāra)、視覚器官 (mig)・聴覚器官 (rna ba)・嗅覚器官 (sna)・味覚器官 (lce)・触覚器官 (lus) という五知覚器官 (blo'i dbang po, *buddhindriya)、発声器官 (ngag, *vāc)・取得器官 (lag pa, *pāṇi)・歩行器官 (rkang pa, *pāda)・排泄器官 (rkub, *pāyu)・生殖器官 (nyer gnas, *upastha) という五行爲器官 (las kyi dbang po, *karmendriya)、[知覚器官と行為器官] 両様の器官であるマナス (yid, *manas)³³、音声 (sgra, *śabda)・匂い (dri, *gandha)・味 (ro, *rasa)・感触 (reg, *sparśa)・色 (kha dog, *rūpa) という五タンマートラ (de tsam,

pañcaviṃśatitattvajñō yatra tatrāśrame* rataḥ** |

jaṭī muṇḍī śikhī vāpi*** mucyate nātra saṃśayaḥ ||†

二十五タットヴァを知れる者はいかなるアーシュラマに住していようと、編髮行者であれ剃髮行者であれ髻髮行者であれ解脱するのである。この点に関して疑惑はない。

* tatrāśrame | V₂ (ad SK 37), G, M, TSP_{MSJ} 13b6, ŚVS, NBhū, TBV, NAṬ, TRD, LV, SVR; kutrāśrame J, TYD, TSV, TSP_{BBS}, SSS, SŚP; yatrāśrame V₂ (ad SK 2), TSP_{MS}P 8a(74a)2, TSP_{GO5}, YST

** rataḥ | V₂, J, M, TSV, TSP, ŚVS, NBhū, TBV, NAṬ, TRD, YST; sthitaḥ TYD, SŚP, LV; vaset G, SSS; vasan SVR

*** jaṭī muṇḍī śikhī vāpi | V₂ (ad SK 2), G, J, M, TYD, TSV, TSP, SSS, ŚVS, NBhū, NAṬ, LV, SVR; jaṭī muṇḍī daṇḍī [vāpi] V₂ (ad SK 37 [jaṭī muṇḍī śikhī daṇḍī V_{2N}]); śikhī muṇḍī jaṭī vāpi TBV, TRD; jaṭī muṇḍī śikhī keśī SŚP

† 若知二十五随処随道住 編髮髻剃頭平等得解脱 KS

校合に用いた文献ならびにロケーションは、次の通りである。(a) 『金七十論』(KS) ad SK 2 (大正 no. 2137, 54:1245c7-8); SK 37 (1254b10); (b) Sāṃkhyavṛtti (V₂) ad SK 2 (V_{2S} 7.2-3; V_{2N} 7.14-15); ad SK 37 (V_{2S} 52.6-7; V_{2N} 64.8-9); (c) Gauḍapādābhāṣya (G) ad SK 1 (2.1-2); (d) Jayamaṅgalā (J) ad SK 1 (65.9-10); (e) Mātharavṛtti (M) ad SK 22 (28.9-10); (f) Tattvayāthārthyadīpana (TYD, 39.9-10); (g) Tattvasamāsasūtravṛtti (TSV, 78.13-14); (h) TSP ad TS 7 (TSP_{BBS} 1:21.20-21; TSP_{GO5} 1:17.3-4); (i) Sarvasiddhāntasaṃgraha (SSS) Sāṃkhyā 11; (j) Śāstravārttāsamuccaya (ŚVS) 230; (k) Nyāyabhūṣaṇa (NBhū, NBhū_v, 571.8-9; NBhū_{MS} 143a6); (l) Tattvabodhavidhāyini (TBV) ad Saṃmatitarkaprakaraṇa 1.3 (1:281.8-9); (m) Nyāyāvātārātippana (NAṬ) ad Nyāyāvātāra 1 (9.24-25); (n) Satyaśāsanaparīkṣā (SŚP, 31.3-4; see Granoff 1999, 584); (o) Tarkarahasyadīpikā (TRD) ad Śaḍḍarsānasamuccaya 33 (TRD_{MK} 141.11-12; TRD_{BI} 1:96.17-19); (p) Laghuvṛtti (LV) ad Śaḍḍarsānasamuccaya 35 (LV_{MK} 479.12-13, LV_{Ch} 32.10-11); (q) Syādvādaratnākara (SVR, 2:989.21-22); (r) Yājñavalkyasmṛtīkā (YST) ad Yājñavalkyasmṛti 3.109 (2:988.15; 前半のみ)

³³ マナスは知覚器官ならびに行為器官の両性質を兼ね備えているため、SK 27においても「両様」(ubhayathā) と表現されている。

saṃkalpakam atra manas tac cendriyam ubhayathā samākhyātam |

guṇaparīṇāmaviśeṣaṇ nānātvaṃ bāhyabhedāc ca || SK 27

これら (十一器官) の中で、マナスは意欲するものである。実にそれ (マナス) は器官であり [知覚器官と行為器官の] 両様であるといわれている。[このように結果が] 多様であるのは、[三] グナの特殊な変容に応じて、また外界物の差異に由来している。

See TJ ad MHK 6.1 (D dza 228a5-6; P dza 255a1-2; T_{JHe} 408.15-16, 410.1; T_{JN} 149.2-4): yid ni gnyi ga'i bdag nyid can te | sems dang mtshungs par ldan pa'i phyir* blo'i dbang po yin la | bya ba dang mtshungs par ldan pa'i phyir las kyi dbang po'o || (マナスは [知覚器官と行為器官の] 両者を本体としている。すなわち、知 (sems) と結びつくから知覚器官であって、行為と結びつくから行為器官である。) See also TJ ad MHK 3.135 (D dza 90a1-2; P dza 96b5): yid ni blo dang las kyi dbang po zhes bya ba'i gnyi ga'i bdag nyid do ||

* P inserts |.

See BSGT (17a4): gnyis ka'i dbang po ni yid do || ([知覚器官と行為器官] 両様の器官がマナスである。) なお、MABh 等における記述は後掲脚注 48 参照。

See also Mānavadharmasāstra (MDhŚ) 2.92:

ekādaśaṃ mano jñeyam svagūṇenobhayātmakam |

yasmin jite jītāv etau bhavataḥ pañcaku gaṇau ||

十一番目はマナスであり、それは固有の性質により (本性上) [知覚器官と行為器官の] 両者を本体としている。それが制御されると、五種から成る両群 (知覚器官と行為器官) も制御される。

*tanmātra)、虚空 (nam mkha', *ākāśa)・地 (sa, *pṛthivī)・水 (chu, *ap)・風 (rlung, *vāyu)・火 (me, *tejas) という五元素 ('byung pa, *bhūta)、これらの享受者として精神性 (shes rig, *caitanya) たるプルシャ (skyes bu, *puruṣa) ³⁴ という二十五タットヴァ (de tsam, *tattva) ³⁵ を知るならば、輪廻から解脱すると主張している。

二十 [五] タットヴァを知ることにより、いかなる格好 (cha lugs) をしていようと

³⁴ プルシャの本質を精神性と考えるサーンキヤ説は他学派の文献においても広く知られており、TJにおいてもプルシャが精神性 (shes pa yod pa, caitanya; see MVy_s 4548; MVy_r 4534) と等置されているが (ad MHK 3.35, D dza 90a2-3; P dza 96b6: skyes bu ni shes pa yod pa nyid ces bya ste |)、その他の代表的な記述としては TS 285 が挙げられる (服部 1966, 541 参照)。また、後掲脚注 73 引用 TJ ad MHK 6.1 も参照のこと。

caitanyaṃ anye manyante bhinnam buddhisvarūpaḥ |
ātmanāś ca nijaṃ rūpaṃ caitanyaṃ kalpayanti te || TS 285

他の者たちは精神性を統覚の本質とは異なったものであるとみなしている。また、彼らは精神性がアートマンの本質であると想定している。

TSP には「プルシャの本質は精神性である」(caitanyaṃ puruṣasya nijaṃ rūpaṃ) という有名な断片が引用されるが(後掲脚注 69 参照)、その他にも *Pātañjalayogaśāstra* (PYŚ) における “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” (ad Yogasūtra 1.9, PYŚ_A 14.2; PYŚ_B 14.2; PYŚ_M 16.3-4) などわずかに表現を異にしつつ、様々な文献で言及されている。そのうち、代表的な文献を列挙する。

Prajñāpradīpa (PP) ad *Mūlamadhyamakakārikā* 3.6a (D tsha 81b1; P tsha 98a3-4): ji ltar grangs can dag na re skyes bu'i ngo bo nyid ni shes pa yod pa nyid do zhes zer ba lta bu'o zhe na |

TSP ad TS 285-86 (TSP_{BBS} 1:142.15-17; TSP_{cos} 1:111.14-15): sāmkyāḥ. te hi buddhivyatiriktaṃ caitanyaṃ ātmano nijaṃ rūpaṃ kalpayanti; yataḥ “buddhiḥ pradhānasvabhāvā, caitanyaṃ tu puruṣasyaiva svarūpaṃ” iti teṣāṃ samayaḥ.

Nyāyabinduṭīkā (NBT) ad *Nyāyabindu* 3.60 (192.5-6): tathā cotpattimanto 'nityā vā sukhādayas tasmād acetanāḥ. caitanyaṃ tu puruṣasya svarūpaṃ.

BCAP ad *Bodhicaryāvatāra* 9.60 (5:454.6-7): buddheḥ svayam acitsvabhāvatvāt. caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ iti vacanāt.

Prakīrṇakaprakāśa (PPra) ad *Vākyapadīya* 3.6.17 (1:224.11-13): yathāhuḥ sāmkyāḥ “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” iti.

Laghīyastrayasvopajñavṛtti (LTSV) ad *Laghīyastraya* 40 (13.25-26): guṇānām vṛttaṃ calaṃ sattvarajastamasāṃ sukhajñānādikaṃ caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ acalam ity etad api tādr̥g eva.

Sarvajñāsiddhiprakaraṇa (SSPra, 125r2): atha “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” iti vacanāt tad eva nīścaya iti.

Siddhiviniścayaṭīkā (SVT) ad *Siddhiviniścaya* 10.10 (2:674.30-675.2): cic cetanā śaktiḥ svabhāvo yasya tasya **cicchakteḥ** “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” iti vacanāt.

TBV ad *Śaṃmatitarkaprakaraṇa* 1.3 (1:307.14-19): yad api pradhānavikārabuddhivyatiriktaṃ caitanyaṃ ātmano rūpaṃ kalpayanti “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” ity āgamāt puruṣaś ca śubhāśubhakarmaphalasya pradhānopanītasya bhoktā na tu kartā sakalajagatpariṇatirūpāyāḥ prakṛter eva kartṛtvābhyupagamāt . . . atra ca “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” ityādi vadatā caitanyaṃ nityaika rūpaṃ iti pratijñātaṃ tasya nityaika rūpāt puruṣād avyatiriktatvāt. See also TBV ad *Śaṃmatitarkaprakaraṇa* 2.1 (2:588.3-5).

Nyāyakumudacandra (NKC) ad *Laghīyastraya* 76 (2:814.1-2): atas tebhyāś caitanyaṃ apoddhṛtya puruṣa eva sthāpyate, tasmāt puruṣa eva caitanyasvarūpatvād draṣṭā. uktaṃ ca—“caitanyaṃ svarūpaṃ puruṣasya” iti.

Nyāyaviniścayavivaraṇa (NVinV) ad *Nyāyaviniścaya* 1.24cd-25ab (1:236.22-23): anyatve tu na tasya svataś cetanatvaṃ tasya puruṣadharmatvenānyatrāyogāt “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” iti vacanāt; ad *Nyāyaviniścaya* 3.13cd-14a' (2:273.26-27): cidrūpatve ca puruṣatvenānityatvānupapatteḥ “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” iti vacanāt.

Aṣṭasahasrī (AS) ad *Aṣṭasatī* 37 (3:104.1-2): na ca cetanā puṃso 'rthāntaram eva, tasya tallakṣaṇatvāt “caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ” iti vacanāt.

Sarvasiddhāntapraveśaka (SSP, 15.4): atha puruṣaḥ kimsvarūpaḥ. caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ.

Nyāyapraveśakavṛttipañjikā (NPVP, 80.9): pañcaviṃśatitamaḥ puruṣaḥ, tallakṣaṇaṃ ca caitanyaṃ puruṣasya svarūpaṃ iti.

も（いかなる衣を纏っていようと）³⁶、編髪行者（*ral pa, *jaṭin*）であれ剃髪行者（*byi bo, *muṇḍin*）であれ髻髪行者（*cod pan, *śikhin*）³⁷であれ解脱するのである。この点に関して疑惑はない。
 という典拠があるように。

A2. 根本原因（15a4-7）

gtso bo ni |

rang bzhin gyi rang bzhin mchog ||
 mthong pa'i lam du 'gyur ma ^[15a5] yin ||
 mthong pa'i lam du gang gyur pa ||
 sgyu ma bzhin du shin tu gsog ||³⁸

ces 'byung pas || snying stobs ni yang ba dang rab tu gsal ba'o || rdul ni g.yo ba'i rang bzhin can no || ^[15a6] mun pa ni lci ba dang g.yogs pa'i rang bzhin can te | bde ba dang sdug bsngal dang gti mug ces pa 'di yi rnam grangs yin no || 'di dag mnyam pa'i gnas skabs la gtso bo zhes ste bems po | thams cad la khyab pa ^[15a7] rtag pa cig pu mthong pa'i yul las 'das pa'o || de nyid gnas skabs rnam 'gyur thams cad gyi rang bzhin no ||

根本原因は、

[三] グナ（*rang bzhin, *guṇa*）³⁹が究極のあり方（*rang bzhin, *rūpa*）にある場合、それは知覚の射程に登らない（＝知覚されない）。[一方、三グナの平衡状態が崩れて]知覚の射程に達する場合、それは幻影（*sgyu ma, *māyā*）のごとく空虚である。

という典拠があるため、純質（*snying stobs, *sattva*）は軽快（*yang ba, *laghu*）にして照

³⁵ “de tsam”はチャバ自身がタンマートラの訳語としても用いているが、ここでは“de tsam nyi shu rtsa lnga po”とあるため、タットヴァを指すものであることが理解できる。

³⁶ See *PPT* ad *PP* 1.1 (D wa 140a1; P wa 161a6-7): gang gis skyes bu dang bcas pa de dag shes pa de ni cha lugs gang dang gang gis* gnas su zin kyang grol bar 'gyur te |

* gang dang gang gis] P; gang dag gis D

³⁷ 通例“cod pan”は“śikhā”の訳語とされ、“śikhin”を指すためには“cod pan can”とする必要がある。ここでは出典と目される詩節（前掲脚注 32 参照）、および“ral pa”ならびに“byi bo”との対比を考慮して“cod pan can”の意味で理解した。この箇所は奇しくも同じテキストが ZL にもみられる点を考慮して（前掲脚注 13 参照）、テキストに“can”の補記はしなかった。

³⁸ 本詩節の出典は次の詩節と目されるが、チャバが実際に参照した資料は不明である。

guṇānām paramaṃ rūpaṃ* na dṛṣṭipatham ṛcchati |
 yat tu dṛṣṭipatham prāptam** tan māyeva sutucchakam*** ||

* paramaṃ rūpaṃ] sumahadrūpaṃ PVA, AS ** dṛṣṭipatham prāptam] dṛṣṭipathaprāptam TUS, NBhū_{MS}, SVT *** māyeva sutucchakam] māyai(ye)va sutucchakam LTSV; māyāvastu tucchakam J

本詩節が登場するサンスクリット資料としては、PYŚ (ad *Yogasūtra* 4.13, PYŚ_A 187.14-15; PYŚ_B 188.12, 189.2)、PSV (ad *Pramāṇasamuccaya* 5.40, 51.6-7)、Nyāyāgamānūsārīṇi (NĀA, 1:63.25-26)、LTSV (ad *Laghiyastraya* 41, 14.9-10)、Tattvopaplavasīṃha (TUS, TUS_{SP} 64.3-4; TUS_F 294.14-17)、PVA (ad *Pramāṇavārttika* 4.12, 480.7)、AS (ad *Aṣṭaśāti* 17, 2:369.5)、J (ad SK 61, 113.11-12)、NBhū (NBhū, 192.14-15; NBhū_{MS} 44a19)、SVT (ad *Siddhiviniścaya* 1.20, 1:89.12-13; ad *Siddhiviniścaya* 4.9, 1:260.25-26) が挙げられる。

³⁹ 本詩節の出典と目される詩節（前脚注参照）、ならびに後出“rang bzhin gsum”（15b1）という表現を考慮すれば、“rang bzhin”が「グナ」の訳語として用いられていることが理解できる。

らし出すもの (rab tu gsal ba, *prakāśaka) である。激質 (rdul, *rajas) は活動的 (g.yo ba, *cala) という本性を有している。翳質 (mun pa, *tamas) は鈍重 (lci ba, *guru) と隠蔽 (g.yogs pa, *varaṅka) という本性を有している⁴⁰。楽 (bde ba, *sukha) と苦 (sdug bsngal, *duḥkha) と蒙昧 (gti mug, *moha) というのがこの [純質・激質・翳質各々の] 同義語である⁴¹。これら (三グナ) が平衡状態 (mnyam pa'i gnas skabs, *sāmyāvasthā) にあるとき

⁴⁰ 三グナの特性に関しては、次の SK 13 参照。また、次脚注の TSP も参照のこと。

sattvaṃ laghu prakāśakam iṣṭam upaṣṭambhakam calaṃ ca rajah |
guru varaṅkam eva tamaḥ pradīpavac cārthato vṛttiḥ || SK 13

純質は軽快であって照らし出すものに他ならないと認められており、激質は刺激するものであって活動的に他ならない [と認められており]、翳質は鈍重で蔽うものに他ならない [と認められている]。

しかし [三グナは] 灯明のように [同じ] 目的に向かって作用する [というのが妥当する]。

⁴¹ MABh にも三グナの特性に言及される中で、楽・苦・蒙昧を同義語とする記述が登場するが、文脈上は楽が激質の同義語、苦が純質の同義語であると読み取れる。続く MABh (後掲脚注 48 参照) や後述の TSP などとも考慮すれば、楽を純質の同義語、苦を激質の同義語とみなすべきである。

MABh ad Madhyamakāvātāra 6.121 (D 'a 293b5-7; P 'a 349a4-5; MABh_{LVP} 238.4-9): de la rdul dang mun pa dang snying stobs rnam* ni yon tan gsum mo || de la rdul ni g.yo ba dang 'jug pa'i bdag nyid can no || mun pa ni lci ba dang g.yogs pa'i** bdag nyid can no || snying stobs ni yang ba dang rab tu gsal ba'i bdag nyid can no || bde ba dang sdug bsngal ba dang gti mug ces bya ba ni 'di dag kho na'i rnam grangs so || (その点 (変異物中の行為主体) に関して、激質と翳質が純質が三グナである。それら (三グナ) の中で、激質は活動的で発動を本体としている。翳質は鈍重で隠蔽を本体としている。純質は軽快にして照明を本体としている。楽・苦・蒙昧というのが、同じこれら (純質・激質・翳質) の同義語である。) 小川 1976, 258 参照。

* rnam[s] P, MABh_{LVP}; gsum D ** g.yogs pa'i] D; g.yog pa'i P, MABh_{LVP}

See also TSP ad TS 14 (TSP_{BBS} 1:27.4-7; TSP_{GOS} 1:21.9-11): prasādalāghavābhiṣvaṅgoddharṣapṛitayaḥ sattvasya kāryam. sukham iti ca sattvam evocyate. tāpaśośabhedastambhodvegāpadvegā rajasaḥ kāryam. rajaś ca duḥkham. dainyāvāraṇasādanāpadhvaṃsabibhatsagauravāṇi* tamasah kāryam. tamaś ca mohasābdenocyate. (淨福・軽快・愛情・欣悦・喜悅は純質の結果である。また、楽というのは純質そのものであるといわれている。苦痛・涸渴・分斷・固定・恐怖・苦境による焦燥 (āpadvega) は激質の結果である。また、激質は苦である。落胆・覆障・疲弊 (sādana) ・隠蔽 (apadhvaṃsa) ・嫌悪・鈍重は翳質の結果である。また、翳質は蒙昧という語によって表示される。)

* -sādanāpadhvaṃsa-] em. (see NBh_v 565.8, NBh_{MS} 141b2; cf. -sādanāpadhvaṃsana- NĀA 1:12.20, 1:182.17, 1:278.12, 1:280.6, 1:298.3, 1:311.20; -sādanavadhvaṃsa- TBV 1:284.14; -āpadhvaṃsanāsādana- J 79.16); -sādanādhvaṃsa- TSP

なお、TSP に言及される三グナの様々な特性に関しては、PhPGT で後に引用される三詩節 (15b1-4) の他に、NKC (ad Laghiyastraya 7, 1:350.22-351.1), Prameyakalamamārtanḍa (PKM, ad Parikṣāṃukhasūtra 2.12, 288.24-27) 参照。

⁴² 三グナの平衡状態をプラクリティとみなす見解は、サーンキヤ文献としては 14-15 世紀頃の成立と目される Sāmkhyasūtra (SS) 1.61 [純質・激質・翳質の平衡状態がプラクリティである] (sattvarajastamasām sāmyāvasthā prakṛtiḥ) がその代表例であるが、サーンキヤ文献以外にも多数見受けられる。TSP (ad TS 7, TSP_{BBS} 1:21.2; TSP_{GOS} 1:16.15 [= TBV 1:280.26-27]) にも「純質・激質・翳質の平衡状態たる根本原因」(sattvarajastamasām sāmyāvasthālākṣaṇam pradhānam) とされる他、代表的な仏教文献としては TJ やチャンドラキールティ著 Catuḥśatakaṭikā (CŚT)、MABh、PPT、MAV、プラジュニャーヴァルマン (Prajñavarman, 8 世紀) 著 Viśeṣṭavaṭikā (VST)、JSSN、著者不明の仏教論理学綱要書 Tarkarāhasya (TR) が挙げられる。なお、シャーンティデーヴァ (Śāntideva, 7-8 世紀) 著 Bodhicaryāvatāra (BCA) については後述 BSGT 参照。

TJ ad MHK 6.1 (D dza 228a1; P dza 254b2; TJ_{He} 408.4; TJ_N 148.11-13): yang na 'di rnam kyī mtshan nyid la yon tan cha mnyam pa'i mtshan nyid ni mi gsal ba'o || (あるいはまた、これら (タットヴァ) の特質の中で [三] グナの平衡状態を特質とするものが未顕現 (mi gsal ba, *avyakta) である。) See also TJ ad MHK 3.135 (D dza 89b7; P dza 96b3): de la gtso bo ni rang bzhin te | snying stobs dang | rdul dang | mun pa cha mnyam pa mi gsal ba'o ||

CŚT ad Catuḥśataka 10.15 (214.13-14): sattvarajastamāṃsi trayo guṇāḥ. teṣāṃ sāmyāvasthā pradhānam prasavāsthā prakṛtiḥ. (純質・激質・翳質が三グナである。それらの平衡状態が根本原因であって、[変異物を] 産出する状態にあるものはプラクリティである。)

MABh ad Madhyamakāvātāra 6.121 (D 'a 293b7; P 'a 349a5-6; MABh_{LVP} 238.9-10): 'di dag cha mnyam pa'i gnas skabs ni gtso bo ste | (平衡状態にあるこれら (三グナ) が根本原因である。) 小川 1976, 258 参照。

PPT ad PP 1.1 (D wa 138b4; P wa 159b7-8): ... snying stobs dang rdul dang mun pa zhes bya ba yon tan gsum cha mnyam par gyur pa gtso bo zhes bya ba de yin par khas blangs nas | (純質・激質・翳質という三グナが平衡状態となることが根本原因というものと承認されているから...) See also PPT ad PP 1.1 (D wa 138b5-6; P wa 160a1); ad PP 1.1 (D wa 143b3, P wa 165b1-2); ad PP 8.13 (D zha 181a4; P zha 208a2-3); ad PP 16.1 (D zha

根本原因といわれ⁴²、非精神的 (bems po, *jaḍa) である⁴³。一切に遍満し、恒常にして唯一であり、視覚の対象領域を超え出たものであり⁴⁴、まさしくその状態こそ、あらゆる変異物 (rnam 'gyur, *vikāra) の本体である。

331a7-331b1; P zha 385b7-8); ad PP 18.3 (D za 71b7; P za 88a1); ad PP 18.3 (D za 62b7; P za 76b4-5); ad PP 18.3 (D za 72b2-3; P za 88b6-7); ad PP 18.3 (D za 74b1-2; P za 91a5).

MAV ad *Madhyamakālamkāra* 94-97 (D sa 81b3; P 82a1-2; MAV_i 320.21-22): ser skyas brjod pa snying stobs dang* rdul dang mun pa mnyam pa'i gnas skabs kyi mtshan nyid gtso bo dam pa'i rang bzhin du brjod pa yang... (カピラが述べる、純質・激質・翳質の平衡状態というのが最高のブラクリティであるという所説もまた…) 一郷 (1985, 190) による翻訳参照。

* D inserts ||; P inserts |.

VST ad *Viśeṣastava* 48 (D ka 31a3-4; P ka 35a2-3; VST_i 210.12-14): snying stobs dang | rdul dang |* mun pa'i yon tan cha mnyam pa'i gnas skabs yan lag dang | yan lag can du gyur pa'i gnas skabs ni gtso bo'o || (純質・激質・翳質という [三] グナの平衡状態、[すなわち] 部分と〈全体〉の関係にある状態が根本原因である。)

* P omits |.

JSSN ad *Jñānasārasamuccaya* 12b (D tsha 38a5; P tsha 43b3-4; JSSN_{po} 143.8-9): ... yon tan gsum khas blangs te | de dag cha mnyam pa mi gsal zhing | rtags med pa ni gtso bo* zhes bya la | ([サーンキヤ派は] …三グナを承認している。それらの平衡状態が未顕現であって、帰滅なきもの (rtags med pa, *ālīṅga) が根本原因といわれ、…)

* gtso bo| P, JSSN_{po}; gtso ba'o D

TR (TR_s 50.19; TR_v 33*9): sattvarajastamasāṃ sāmyāvasthā prakṛtiḥ pradhānam. (純質・激質・翳質の平衡状態がブラクリティ、すなわち根本原因である。)

See also *Tshad ma rigs pa'i gter* (Rigs gter, 46a6): grangs can ni rdul mun pa snying stobs gsum cha mnyam pa'i gtso bo zhes bya ba'i spyi de ... (サーンキヤ派は激質・翳質・純質という三 [グナ] の平衡状態が根本原因という普遍であり、…) Hugon (2008, 1:255; 2012, 44n2) による翻訳参照。

その他、仏教以外の代表的な他学派文献としてはシンハスーリ (Simhasūri, ca. 600?) 著 *NĀA* (1:39.26-27, 1:109.12, 1:265.12, 1:270.9, 1:312.23)、ウッディヨータカラ (Uddyotakara, 6世紀頃) 著 *Nyāyavārttika* (NV, ad *Nyāyasūtra* 4.1.21, NV_{th} 434.7-8; NV_v 2:946.12)、ジャヤンタ (Jayanta, ca. 840-900) 著 *Nyāyamañjarī* (NM, NM_M 2:388.4-5; NM_v 2:487.13-14; NM_i 2:58.24-25)、ヴァーデーラージャ (Vādirāja, fl. 1025) 著 *NVinV* (ad *Nyāyaviniścaya* 2.51, 2:80.2)、デーヴァパドラ (Devabhadra, ca. 1150) 著 *NAṬ* (ad *Nyāyāvātāra* 31, 96.33, 97.13)、マツリシェーナ (Mallīṣeṇa, 1292) 著 *Syādvādamañjarī* (SyM, ad *Anyayogavyacchedadvātrīṃśikā* 15, SyM_{BSP} 96.1-3; SyM_{MU} 104.14-15; SyM_i 136.4-5; SyM_{Bh} 164.8-165.1)、著者不明 (ジャイナ) の *Sarvasiddhāntapraśeṣaka* (SSP, 13.8-9)、ジャヤラタ (Jayaratha, r. 1213-1236) 著 *Tantrālokaviveka* (TĀV, ad *Tantrāloka* 8.254, 5:174.3; ad *Tantrāloka* 13.3, 8:3.13-14) が挙げられる。

また、BCA 9.128 (sattvaṃ rajas tamaś ceti guṇā aṣiṣamasthitāḥ | pradhānam iti kathyante viṣamair jagad ucyate ||) も同様の内容に言及しているが、ZL および BSGT はこれを引用しながら根本原因を定義している (ZL に関しては茂木 1980, 450 参照)。

ZL (ZL_{BT} 125a1-2; ZL_K 228.3-7): ... rdul mun pa snying stobs gsum cha mnyam par gnas pa'i tshe gtso bo zhes bya'o || de skad du yang spyod 'jug las | snying stobs rdul dang mun pa zhes || bya ba'i yon tan mnyam gnas ni || gtso bo zhes byar rab brjod do || mi mnyam 'gro ba yin par brjod || (BCA 9.128) (激質・翳質・純質という三 [グナ] が平衡状態にあるとき [それは] 根本原因であるという。[*Bodhicaryāvatāra* (sPyod 'jug) によっても次のようにいわれている。「純質・激質・翳質という [三] グナが平衡状態にある場合、それは「根本原因」と称される。平衡状態にない場合、世界 ('gro ba, *jagat) が存在すると認められている」(BCA 9.128) と。)

BSGT (16a6-16b2): snying stobs rdul dang mun pa yi || yon tan cha mnyam rang bzhin yin || rang bzhin rgyu'i gtso bo ni snying stobs dang rdul dang mun pa'i yon tan gsum cha mnyam pa yin no || de skad du yang spyod 'jug mkhan pos | snying stobs rdul dang mun pa zhes || bya ba'i yon tan mnyam gnas 'di || gtso bo zhes byar rab brjod de || mi mnyam 'gro ba yin par 'dod || (BCA 9.128) ces bshad do || (純質・激質・翳質という [三] グナの平衡状態がブラクリティである。「ブラクリティ」[すなわち] 原因としての根本原因は、純質・激質・翳質という三グナの平衡状態である。[*Bodhicaryāvatāra* (sPyod 'jug) の学僧 [シャーンティデーヴァ] によっても次のようにいわれている。「純質・激質・翳質という…」(BCA 9.128) と。)

⁴³ SK 11 には顕現物の特性として非精神的 (acetana) などの六点が列挙されるが、その六点は根本原因にも共通であるとされている。そのため、根本原因も共通して非精神的であることが理解できる。

triguṇam aviveki viśayaḥ sāmānyam acetanaṃ prasavadharmi |

vyaktam tathā pradhānam tadviparitas tathā ca pumān || SK 11

顕現物は (1) 三グナから成り、(2) [三グナから] 区別されず、(3) [プルシャが享受する] 対象であり、(4) [複数のプルシャに] 共通するものであり、(5) 非精神的にして、(6) 産出という属性を有するものである。根本原因もそれと同様である。男性原理 (プルシャ) はそれ (顕現物および根本原因) と反対でありかつそれと同様でもある。

A3. 大 (15a7–15b1)

rang bzhin las ni chen po ste | chen po zhes bya ba blo'i rnam grangs te me long ngos gnyis pa lta^[15b]
 bu nang gi skyes bus kyang rnam par 'jog la phyi rol gyi de tsam lnga'i rang bzhin bde ba dang
 sdug bsnal dang btang snyoms kyis kyang rnam par 'jog pa'o ||

プラクリティからは大が [生起する]。大というのは統覚 (blo, *buddhi) の同義語であつて⁴⁵、両面鏡 (me long ngos gnyis pa, *ubhayamukhadarpaṇa) のように内なるブルシャも定め置かれ (rnam par 'jog, *vyavasthāpayati)、外なる五タンマートラの本性である楽・苦・蒙昧 (btang snyoms) も定め置かれる⁴⁶。

⁴⁴ 根本原因の遍満性、恒常性、単一性については SK 10 から推知される。SK 10 には顕現物の特性として無常 (anitya)、非遍満 (avyāpin)、複数 (aneka) など九点が列挙されているが、根本原因 (未顕現 <avyakta)> はその反対であるとされるため、恒常にして遍満し、単一であることが導かれる。

hetumat anityam avyāpi sakriyam anekam āśritam līngam |
 sāvayavam paratantram vyaktam viparitam avyaktam || SK 10
 顕現物は (1) 原因を有し (hetumat)、(2) 無常 (anitya) にして、(3) 遍満するものでなく (avyāpin)、(4) 運動を有し (sakriya、輪廻するものであり)、(5) 複数 (aneka) であり、(6) 依拠し (āśrita)、(7) 帰滅するもの (līngam) であり、(8) 結合 (部分) を有し (sāvayava)、(9) 他に従属する (paratantra)。未顕現は [それと] 反対である。

なお、SK 10 は TSP (ad TS 7, TSP_{BSS} 1:22.14–15; TSP_{COS} 1:17.19–20) にも引用されているが、その内容として次のように解説されている。

TSP ad TS 7 (TSP_{BSS} 1:22.16–24, 23.3; TSP_{COS} 1:17.20–18.1): hetumat kāraṇavat, vyaktam eva. tathā hi–pradhānena hetumatī buddhiḥ, ahaṃkāro buddhyā hetumān, pañca tanmātrāṇy ekādāśendriyāṇy ahaṃkāreṇa hetumanti, bhūtāni tanmātraiḥ. na tv evam avyaktam tasya kutaścid apy anutpatteḥ. tathā vyaktam anityam utpattidharmakatvāt. na tv evam avyaktam, tasyānutpattimattvāt. yathā ca pradhānapuruṣau divi bhuvī cāntarikṣe ca sarvatra vyāpitayā vartete, na tathā vyaktaṃ vartate, kiṃ tu tad avyāpi . . . buddhyahaṃkāradibhedena cāneka-vidhaṃ vyaktam upalabhyate, nāvvyaktaṃ tasyaikasyaiva sato lokatrayakāraṇatvāt. (「原因を有する」とは原因を持つことであり、顕現物のみが [原因を有するの] である。すなわち、統覚は根本原因によって原因を有するのであり、自我意識は統覚によって原因を有するのであり、五タンマートラおよび十一器官は自我意識により原因を有するのであり、元素はタンマートラによって [原因を有するの] である。しかしながら、未顕現はそうではない。なぜなら、それ (未顕現) はいかなるものからも決して生起しないからである。同様に顕現物は無常である。なぜなら、[顕現物は] 生起を属性としているからである。しかしながら、未顕現はそうではない。なぜなら、それ (未顕現) は生起しないからである。そして、根本原因とブルシャとが天界、地界、中空といういづれにおいても遍満するものとして存在しているが、顕現物はそのように存在しているのではない。そうではなく、それ (顕現物) は遍満しないのである…そして、顕現物は統覚や自我意識などという区分をもって多種であると認められているが、未顕現は [多種ではない。なぜなら、唯一のものとして存在しているそれ (未顕現) が三世の原因だからである。]

See also TJ ad MHK 6.1 (D dza 227b1–2; P dza 254a1–2; T_{He} 404.12–13; T_N 147.10–12): rang bzhin ni yod de sems dang ldan pa ma yin pa'o || de yang ma skyes pa |* rtag pa |** byed pa pos longs spyad par bya ba gcig pu khyab pa*** yon tan gsum† la sogs pa dang ldan pa'o || (プラクリティは存在し、精神性を有するものではない。さらにまた、それ (プラクリティ) は生じないものであり、恒常にして、行為主体によって [ブルシャに] 享受され、唯一にして遍満しており、三グナから成るなど [の特質] を有している。)

* P omits pa |. ** P omits |. *** khyab pa] D, P, T_N; khab pa T_{He} † gsum] D, P, T_N; g_um T_{He}

また、根本原因が視覚領域を超えている点については直前の詩節にもみられたが、SK 8 には微細であるために認知されず、推理の対象であることが示されている。

saukṣmyāt tadanupalabdhir nābhāvāt kāryatas tadupalabdhiḥ |
 mahādādi tac ca kāryaṃ prakṛtivrūpaṃ sarūpaṃ ca || SK 8

それ (根本原因) が認知されないのは微細だからであつて、存在しないからではない。結果にもついでにそれ (根本原因) は認知される。そしてその結果物というのは大などであり、プラクリティと [ある面では] 性質を異にし、[ある面では] 性質を等しくしている。

⁴⁵ TJ ad MHK 3.135 (D dza 89b7; P dza 96b3): chen po ni blo'i rnam grangs so || (「大」というのは統覚の同義語である。)

MABh ad Madhyamakāvātāra 6.121 (D 'a 293b7–294a1; P 'a 349a6–7; MAB_h_{LV} 238.12): rang bzhin las ni* chen po ste chen po zhes bya ba ni blo'i rnam grangs so || (プラクリティからは大が [生起する]。「大」というのは統覚の同義語である。) 小川 1976, 258 参照。

* D omits ni.

A4. 三グナ的特性 (15b1-4)

rang bzhin gsum mi mnyam na rtags 'byung ste | ji skad du |
 rangs^[15b2] dang mgu dang kun dga' dang ||
 dga' zhing zhi ba'i sems nyid dag ||
 res 'ga' yang ni snang 'gyur ba ||
 'di dag snying stobs yon tan 'dod ||
 mi dga' yongs su gdung ba dang ||

⁴⁶ 統覚を両面鏡に喩える比喩は、一面では感官の対象（ここでは楽・苦・蒙昧として、音声などの対象が意図されている）に、もう一面ではプルシャに向けられていると解される。プルシャ自体は伝統的に享受 (bhoga) と解脱 (apavarga) とがその両目的 (puruṣārtha) とされてきているが（今西 1965, 611n3 所引の文献参照）、その一方でプルシャは元来恒常不変なるものとされている。そのため、プルシャを単に対象の享受者と解する場合にはプルシャの変化が容易に予想され、その恒常不変性を堅持するために両面鏡の比喩が用いられている。この比喩は BSGT にも登場し（茂木 1984, 598、近藤 2017, 482 参照）、発想の根源自体は TSP に淵源を有するものと目されるが（茂木 1984, 598、川崎・吉水 2007, 76n45、近藤 2017, 482-481 参照）、現存サーンキヤ文献には見出されない。インド撰述文献としてはチャバよりも後代のジャイナ文献 (SyM, TRD, LV) に見受けられるが（村上 1978, 396-405、近藤 2017, 485-482 参照）、それ以前の文献としてはジャヤーナンダ (Jayānanda, 11-12 世紀) 著 *Madhyamakāvātaraṭikā* (MAT, チベット語訳のみ現存) に見受けられる。チャバが MAT から「両面鏡」という用語を借用した可能性については、近藤 2017, 481 参照。

MAT ad MABh 6.121 (D ra 238a6-238b1; P ra 285b5-8): **skyes bu sems par byed de zhes bya ba ni mngon par zhen par byed pa'i sgra la sogs pa'i rang bzhin shes par byed pa'o** || 'di'i don ni yid kiyis byin gyis brlabs pa'i rna ba la sogs pas 'jug pas gang gi tshe gzugs la sogs pa la dmigs pa de'i tshe mngon par zhen pa'i rang bzhin can me long ngos gnyis pa dang 'dra ba'i blo 'jug pa yin la | gang la yul gyi grib ma 'char ba dang | skyes bu'i grib ma 'char ba'o || des na gzugs brnyan gnyis phrad pa ni gnas skabs na yul nyams su myong ba'i mtshan nyid can longs spyod par 'gyur ba'o || (**「プルシャが感受する」**) というのは、[統覚によって] 判断された音声などを本質として感受するということである。これは [次のような] 意味内容である —— マナスによって統御された (yid kiyis byin gyis brlabs pa, *manasādhiṣṭhita) 聴覚器官などの “*vr̥tti” (rna ba la sogs pas 'jug pa, *srotrādivṛtti) が色 (音声?) などを認知すると、判断を本質とする両面鏡のごとき統覚が活動 (変容) するが、そこ (統覚) には対象の影 (似姿) が映し出され、[同時に] プルシャの影 (似姿) が映し出される。したがって、[対象とプルシャという] 二つの映像が [統覚において] 邂逅する状態にあるとき、対象の経験という享受が起こるのである。)

また、本表現は *bsDus pa* にも登場する他、*rGyan gyi me tog*、*'Grel pa la ldeb*、著者不明の *Tshad ma rnam 'grel gal bar byed pa'i zin bris legs par bshad pa rin po che'i sning po* (*Rin po che'i sning po*) などにもみられる。

bsDus pa (57b7-8): de yang thog mar chen po 'am blo zhes bya ba shel gyi khang pa 'am me long ngo[s] gnyis pa'i bum pa lta bu bem pa po phyi nang gi gzugs brnyan 'char ba'i rten byed pa dang | (それ (変異物) も最初は大、すなわち統覚という水晶宮 (shel gyi khang pa) ないし両面鏡は壺のように非精神的であるが、内外の映像が立ち昇る基盤となるものであり…)

rGyan gyi me tog (72.1): gnyis pa rnam 'gyur ni nyi shu rtsa gsum las de las dang po chen po dang blo dang nang gi byed pa zhes kyang bya ba me long ngos gnyis pa lta bu 'byung ste de'i rnam pa ni 'di bum pa'o zhes zhen pa'i rnam pa can yin no || (第二の変異物は、その二十三 [タットヴァ] の中で最初のものである大、統覚や内官ともいわれる両面鏡のようなものが生起する。その様相としては「これが壺である」という判断の様相を呈する。)

'Grel pa la ldeb (58.9): phyi rol nas longs spyad bya de tsaṃ lnga'i gzugs brnyan 'char la | nang nas longs spyod byed shes rig skyes bu'i gzugs brnyan 'char bas na blo me long ngos gnyis pa dang 'dra ba'o | (外部からは享受対象である五タンマートラの映像が立ち昇り、内部からは享受者である精神性たるプルシャの映像が立ち昇ると、統覚は両面鏡に等しくなる。)

Rin po che'i sning po (45.4): de las rnam 'gyur 'bras bu'i gtso bo nyer gsum gyi dang po chen po'am blo shel dangs pa'i me long ngos gnyis pa lta bu dang | (それ (根本原因) からは変異物たる結果として二十三の主要素 (gtso bo) が [生起するが]、その最初である大ないし統覚は夾雑物なき水晶の両面鏡に等しいものであり…)

なお、両面鏡の比喩には触れないものの、チャバは後に対象の享受に言及し「五タンマートラの本性である苦楽も統覚に定め置かれ、内なるプルシャも定め置かれることによって両者が渾然となる」(16a6-7) として同じ内容を述べている。

mya ngan 'dod dang 'jig[s]_[15b3] pa dag ||
 res 'ga' snang pa'i gtan tshigs kyis ||
 de ni rdul gyi rtags su 'dod ||

rmongs dang de bzhin gti mug dang ||
 bag med gnyid dang g.yeng pa dag ||
 res 'ga' yang ni snang 'gyur ba ||
_[15b4] de dag mun pa'i yon tan 'dod [||]
 ce'o ||

三グナの平衡が崩れると、[グナの] 徴表 (rtags) が現れる。すなわち、
 喜悅 (rangs)、欣幸 (mgu)、歡喜 (kun dga')、悅樂 (dga' zhing)、寂靜なる心 (zhi
 ba'i sems nyid) が時に現れ、これらが純質の性質として認められる。
 嫌悪 (mi dga')、苦痛 (yongs su gdung ba, *paritāpa)、悲哀 (mya ngan)、欲望 ('dod)、
 恐怖 ('jigs pa) が時に現れるという論拠によって、これが激質の [存在する] 徴表で
 あると認められる。
 無知 (rmongs)、蒙昧 (gti mug)、不注意 (bag med)、睡眠 (gnyid)、散漫 (g.yeng
 pa) が時に現れ、これらが翳質の性質として認められる。
 といわれているように。

A5. 自我意識とその展開物 (15b4-7)

chen po las nga rgyal 'byung la | de 'ang gsum ste snying stob[s] shas che ba [rnam par 'gyur] {'byung}
 pa las gyur pa dang | rdul shas che ba zhen pa las gyur pa dang | mun pa {las}_[15b5] shas che ba ['byung
 pa] las gyur pa'o || nga rgyal dang po las sngar gyi dbang po bcu cig po 'byung ngo || gnyis pa las de
 tsam las kyang 'byung pa lnga 'byung ste sgra las nam mkha' dang dri las sa dang ro las chu dang reg
 pa las_[15b6] rlung dang kha dog las me 'byung ba'i phyir ro || ji skad du dbang phyug nag pos |
 rang bzhin las chen de las nga rgyal te ||
 de las tshogs ni rnam pa bcu drug go ||
 lnga po rnams las 'byung ba chen_[15b7] po lnga || SK 22abd
 zhes bshad do ||

八一

大からは自我意識が生起するが、それ (自我意識) は三種である。[すなわち] 純質の
 優勢なる (snying stobs shas che ba, *sāttvika) ヲアイカーリカ (rnam par 'gyur pa las gyur
 pa)、激質の優勢なる (rdul shas che ba, *rājasa) 欲望由来のもの (zhen pa las gyur pa)、翳
 質の優勢なる (mun pa shas che ba, *tāmasa) 元素由来のもの ('byung pa las gyur pa) であ
 る⁴⁷。第一の自我意識からは、まず十一器官が生起する。第二 [の自我意識] からは [五]

⁴⁷ PhPGT テキストは “snying stob[s] shas che ba 'byung pa las gyur pa dang | rdul shas che ba zhen pa las gyur pa dang | mun pa las shas che ba las gyur pa'o” とあるが、現状では解説しがたい。そのため、後述 PPT および次脚注引用 bsDus pa 等に見られる自我意識の三区分別を考慮して、“snying stob[s] shas che ba 'byung pa las gyur pa” を “snying stob[s] shas che ba rnam par gyur pa las gyur pa” とし、“mun pa las shas che ba las gyur pa” を “mun

タンマートラが[生起し]、それ(五タンマートラ)からも五元素が生起する⁴⁸。[すなわち]音声[タンマートラ]からは虚空[元素]が、匂い[タンマートラ]からは地[元素]が、味[タンマートラ]からは水[元素]が、感触[タンマートラ]からは風[元素]が、色[タンマートラ](kha dog, *rūpa)からは火[元素]が生起するからである⁴⁹。イーシュヴァラクリシュナ(dBang phyug nag po, *Īśvarakṣṇa)も次のように] ——

pa shas che ba 'byung pa las gyur pa”と修訂を施した。ただし、激質優勢の自我意識に関しては“zhen pa las gyur pa”とされており、この名称は他にみられないチャバ特有の表現である。通例三種の自我意識としては「ヴァイカーリカ」(vaikārika、「変異物に由来する」)、「タイジャサ」(tajasa)、「ブーターディ」(bhūtādi)と称されるものであり、それぞれ純質・激質・翳質の優勢なる自我意識に相当する(SK 25は「ヴァイカーリカ」ではなく「ヴァイクリタ」とするが、著者不明のSK注 Yuktidīpikā (YD, ad SK 24, 194.10-12; ad SK 25, 196.8-17)などは「ヴァイカーリカ」の名称を挙げる)。そのため、“zhen pa las gyur pa”は「タイジャサ」に相当する表現であると考えられる。

sāttvika ekādaśakaḥ pravartate vaikṛtād ahaṁkārat |
 bhūtādes tānmātraḥ sa tāmasas tajāsād ubhayam || SK 25

ヴァイクリタ自我意識からは、純質の優勢なる十一から成る[感官という創出物]が現出する。ブーターディからはタンマートラ所属の[創出物]が[現出し]、それは翳質が優勢である。タイジャサからは両者(=感官とタンマートラ)が[現出する]。

そして、次のPPTの記述では自我意識の三区分別として“rnam par 'gyur ba las gyur pa”、“rdul las gyur pa”、“byung ba las gyur pa”に言及され、それぞれ純質・激質・翳質の優勢なるものであるとされている(古坂1980, 178参照)。この“rnam par 'gyur ba las gyur pa”は「ヴァイカーリカ」に相当すると目され、そして“byung ba las gyur pa”は「ブーターディ」に相当するものと推察されるため、上記のように修訂を施した。

PPT ad PP 16.1 (D zha 331b1-2; P zha 385b8-386a2): nga rgyal de yang rnam pa gsum ste | rnam par 'gyur ba las gyur pa dang | rdul las gyur pa dang 'byung ba las gyur pa'o ||* de la rnam par 'gyur ba las gyur pa'i nga rgyal snying stobs shas che ba las ni dbang po bcu gcig skye'o || 'byung ba las gyur pa'i nga rgyal mun pa shas che ba las ni de tsam lnga skye'o || rdul las gyur pa'i nga rgyal g.yo ba shas che ba ni gnyi ga'i bdag nyid yin te | (その自我意識も三種である。すなわち、ヴァイカーリカ(rnam par 'gyur ba las gyur pa)、激質由来のもの(rdul las gyur pa)、元素由来のもの('byung ba las gyur pa)である。それらのうち、純質の優勢なるヴァイカーリカ自我意識からは、十一器官が生起する。翳質の優勢なる元素由来の自我意識からは、五タンマートラが生起する。活動的な激質由来の自我意識は、両者を本体としている。) See also PPT ad PP 1.1 (D wa 139a3-139b1; P wa 160a7-160b5); JSSN ad Jñānasārasamuccaya 12b (D tsha 38a5-38b1; P tsha 43b4-8; JSSN_{PD} 143.10-18).

* || P; | D

また、BSGTにもPPTとほぼ同様の表現を用いて同一内容の記述が見受けられる。

BSGT (17a3-5): de la gsum gyi dang po rnam 'gyur las gyur pa'i nga rgyal snying stobs shas che ba las dbang po bcu gcig skye ste | mig dang rna ba dang sna dang lce dang lus te blo'i dbang po lnga dang | ngag dang | rkang pa dang | lag pa dang | rkub dang | 'doms te las kyi dbang po lnga dang | gnyis ka'i dbang po ni yid do || gnyis pa 'byung ba las gyur pa'i nga rgyal mun pa shas che ba las de tsam lnga skye ste | sgra dang reg dang ro dang gzugs dang dri de tsam mo || gsum pa rdul las gyur pa'i nga rgyal g.yo ba shas che ba ni de gnyis ka'i bdag nyid do || (それ(自我意識)には三種あり、第一として純質の優勢なるヴァイカーリカ(rnam 'gyur las gyur pa)自我意識からは十一器官が生起する。[すなわち]視覚器官・聴覚器官・嗅覚器官・味覚器官・触覚器官という五知覚器官、発声器官・取得器官・歩行器官・排泄器官・生殖器官という五行爲器官、[知覚器官と行為器官の]両者の器官がマナスである。第二として翳質の優勢なる元素由来の自我意識からは五タンマートラが生起する。[すなわち]音声・感触・味・色・匂いタンマートラである。第三として活動的な激質由来の自我意識は、両者を本体としている。)

⁴⁸ SK 25では純質優勢の自我意識から十一器官が現れ、翳質優勢の自我意識からタンマートラが現れ、激質優勢の自我意識はその両者に関わるとされる(前脚注参照)。しかしながら、チャバは第二の自我意識、すなわち激質優勢の自我意識からタンマートラが現れるとしており、SKの教説とは見解を異にしているばかりか、PPTやBSGTとも相応しない。ただし、MABhにおいては激質優勢の自我意識が「ヴァイカーリカ」(rnam par 'gyur ba)と称されていると目され、それから五タンマートラが生起するとされているため、このPhPGTの記述と一致している。

MABh ad Madhyamakāvatāra 6.121 (D 'a 294a1-3; P 'a 349a7-349b2; MABh_{LVF} 238.13-239.2): chen po las ni nga rgyal lo || de ni rnam pa gsum ste | rnam par 'gyur ba dang | snying stobs can dang | mun pa can no || de la rnam par 'gyur ba'i nga rgyal las ni de tsam lnga ste | gzugs dang sgra dang dri dang ro dang reg pa dag go ||* de tsam dag las ni 'byung ba rnam te ||** sa dang chu dang me dang rlung dang nam mkha' zhes bya ba dag go ||*** snying stobs can gyi nga rgyal las ni las kyi dbang po lnga po ngag dang |† lag pa dang | rkang pa dang | rkub dang | 'doms† dang | blo'i dbang po lnga po mig dang | rna ba dang | sna dang | lce dang | pags pa†† dang | gnyi ga'i bdag nyid can gyi yid de de ltar na bcu gcig go ||# mun pa can gyi nga rgyal ni nga rgyal gnyi ga'i 'jug par byed pa'o || (大からは自我意

プラクリティから大が[生起する]。それ(大)から自我意識が[生起する]。それ(自我意識)から十六から成る一群が[生起する]。[その十六から成る一群の中の]五種から五大元素が[生起する]。(SK 22abd)

と述べている。

識が[生起する]。それ(自我意識)は三種である。すなわち、ヴァイカーリカ (rnam par 'gyur ba)、純質優勢のもの、翳質優勢のものである。それら(三種の自我意識)のうち、ヴァイカーリカ自我意識からは五タンマートラ、すなわち色・音声・匂い・味・感触が[生起する]。[五]タンマートラからは[五]元素、すなわち地・水・火・風・虚空といったものが[生起する]。[そして]純質優勢の自我意識からは五行爲器官[すなわち]発声器官・取得器官・歩行器官・排泄器官・生殖器官、五知覚器官[すなわち]視覚器官・聴覚器官・嗅覚器官・味覚器官・触覚器官、両者(知覚器官と行為器官)を本体とするマナス、以上のような十一[器官]が[生起する]。[そして]翳質優勢の自我意識は両自我意識を発動させるものである。)小川 1976, 258 参照。

*] P, MAB_{hLVP}; || D ** P and MAB_{hLVP} omit |. ***] P, MAB_{hLVP}; || D † D omits |. † 'doms' P, MAB_{hLVP}; mdoms D †† pags pa] D, P; bags pa MAB_{hLVP} ††] P, MAB_{hLVP}; || D

また、これと同趣旨の記述は、同じくチャンドラキールティの手になる CŚT にも見受けられる。

CŚT ad Catuḥśataka 10.15 (214.17-21, 216.1-3): mahato 'haṃkāraḥ. sa ca trividhaḥ. sāttviko rājasas tāmasa iti. tatra sāttvikād ahaṃkārat pañcabuddhīndriyāni śrotraṃ tvak caḥsū rasanam ghrānam iti. pañcakarmendriyāni vāk-pāṇipādapāyūpasthākhyāni*. ubhayātmakam ca mana ity ekādaśa pravartante. rājasād ahaṃkārat pañcatanmātrāni śabdasparsārūparasaṅgandhāḥ. tanmātrebhyo bhūtāny ākāśavāyutejalapṛthivyākhyāni. tāmasas tv ahaṃkāra ubhayor ahaṃkārayoh pravartaka ity evam... See also CŚT_{TR} (D ya 165b5-166a1; P ya 186a1-5).

* vāk-pāṇipādapāyū-] em.; vāk pāṇi pāda pāyū- CŚT

そして、チャバは後に「自我意識の中で第三のものは、最初の二つである両[自我意識]を本性としている(16a4)と述べているが、これは翳質優勢の自我意識がその他の両自我意識を本性とすることを指しており、この点においても MABh との対応が看取される。なお、ZL (ZL_{BT} 125a4-125b1; ZL_K 228.14-229.6)にも三種の自我意識について言及されているが、行為器官に対する簡潔な解説、および翳質優勢の自我意識がその他両自我意識を補助する (grogs byed) とする以外は、MABh とほぼ同様の内容が見受けられる。なお、その他チベット撰述文献にも同様の記述が見受けられるが、各自我意識の機能配分は必ずしも一致していない。とりわけ bsDus pa には三種の自我意識に触れられこそするものの、五タンマートラを生み出す元素由来の自我意識、および十一器官を生み出す激質優勢の自我意識の二種にしか触れられていない。

bsDus pa (57b8-58a1): de las nga rgyal gsum las 'byung pa las gyur pa'i nga rgyal las sgra dang reg pa dang gzugs dang ro dang dri ste de tsam lnga dang | de las kyang rim pa nam mkha' dang rlung dang me dang chu dang sa ste 'byung pa lnga 'byung la | rdul las gyur pa'i nga rgyal las kha dang rkang lag sbubs dang mtshan ma ste las kyi dbang po lnga dang | rna ba dang lus dang mig dang lce dang sna ste blo'i dbang po lnga dang | gnyis' ga'i dbang po yid dang bcu [g]cig 'byung pa yin te || (それ(大)からは三種の自我意識が[生起し]、その中で元素に由来する自我意識からは音声・感触・色・味・匂いという五タンマートラ [が生起し]、それ(五タンマートラ)からも順次、虚空・風・火・水・地という五元素が生起し、激質優勢の自我意識からは発声器官 (kha)・取得器官ならびに歩行器官 (rkang lag)・閉所 (=排泄器官、sbubs)・特徴 (=生殖器官、mtshan ma) という五行爲器官、聴覚器官・触覚器官・視覚器官・味覚器官・嗅覚器官という五知覚器官、および[行為器官と知覚器官] 両様の器官であるマナスという十一 [器官] が生起するのである。)

'Grel pa la ldeb (59.2-4): nga rgyal la gsum ste | snying stobs shas che ba rnam 'gyur las dang | mun pa shas che ba 'byung pa las dang | gyo bas shas che ba rdul las gyur pa'i nga rgyal lo || dang po las dbang po bcu gcig skye ste | nang blo'i dbang po lnga | phyi las kyi dbang po lnga | las blo gnyis ka'i bdag nyid yid kyi dbang po'o || dang po ni mig la sogs pa'o || gnyis pa ni ngag dang lag pa rkang pa 'doms bshang lam mo || gnyis pa las sgra de tsam la sogs pa lnga'o || nga rgyal gsum pa ni dang po gnyis kyi 'bras bu skyed pa'i grogs byed pa tsam yin gyi 'bras bu logs pa med de | bram ze gcig la chung ma bram ze mo gcig dang dmangs rigs mo gcig gnyis yod pa las | dang po la bu bcu gcig gnyis pa la bu lnga bcas pa lta bu'o || (自我意識には三種ある。すなわち、純質優勢のヴァイカーリカ、翳質優勢の元素由来のもの、活動的な激質由来の自我意識である。第一 [のヴァイカーリカ] からは十一器官が生起する。すなわち、内的なる五知覚器官、外的なる五行爲器官、行為 [器官] および知覚 [器官] の両様を本体とするマナスという器官である。第一 [の五知覚器官] は視覚器官などである。第二 [の五行爲器官] は発声器官・取得器官・歩行器官・生殖器官・排泄器官 (bshang lam) である。第二 [の元素由来の自我意識] からは音声タンマートラなど五種が[生起する]。第三の[激質由来の]自我意識は最初の両 [自我意識] の結果を生み出す補助をなすにすぎず、別個の結果 [を生み出すもの] ではない。[例えば] 一人の婆羅門に妻として女性の婆羅門と女性のシュードラという両者がいることによって、第一の者(女性の婆羅門)に十一人の息子、第二の者(女性のシュードラ)に五人の息子を孕ませるようなものである。)なお、この婆羅門の喩例と同様のものは PPT に見受けられる (ad PP 1.1, D wa 139a7-139b1; P wa 160b3-5)。

rGyan gyi me tog (507.8-508.2): de las gsum las dang po rdul las gyur pa'i nga rgyal dbang po bcu gcig skye

A6. 帰滅次第 (15b7–16a2)

'jig par snang pa na 'ang 'byung ba lnga de tsaṃ lnga la thim de tsaṃ lnga dbang po bcu gcig ste tshogs bcu drug po nga rgyal la thim de chen po la thim ste {chen po la thim pa} de gtso^[16a] bo la thim ste nye bar zhu nas mi gsal bar gyur pa la mi rtag pa'i tha snyad byed pa ste | mi gsal rang bzhin yin pas rtag cing rgyu la mi ltos la gsal ba res 'ga' ba yin^[16a2] pas sngar bshad pa'i rgyu la ltos pa mi rtag pa'o ||

[これら二十五タットヴァは]消滅するように見えるとしても[実際には消滅していない。すなわち]、五元素が五タンマートラへと帰滅し (thim, *liyate)、五タンマートラおよび十一器官という十六から成る一群は自我意識へと帰滅し、それ (自我意識) は大へと帰滅し⁵⁰、それ (大) は根本原因へと帰滅するのである⁵¹。かくして [上位タットヴァへの]

ste rna ba dang [pa]gs pa dang | mig dang sna dang lce'i dbang po ste blo'i dbang po lnga dang | lag pa dang rkang pa dang rkub dang 'doms dang kha'i dbang po ste las kyi dbang po lnga dang gnyis ka'i dbang po yid do || 'byung ba las gyur pa'i nga rgyal las de tsaṃ lnga ste sgra dang dri dang ro dang gzugs dang reg bya'i de tsaṃ mo || de tsaṃ lnga las 'byung pa lnga rim pa ltar skye ste nam mkha' dang sa dang chu dang me dang rlung ngo || rnam par 'gyur ba las gyur pa'i nga rgyal ni nga rgyal snga ma gnyis kyi{s} 'bras bu skyed pa'i grogs byed kyi 'bras bu gud pa mi skyed do || (それ (自我意識) には三種あり、そのうち第一のものは激質由来の自我意識であって十一器官を生み出す、すなわち聴覚器官・触覚器官・視覚器官・嗅覚器官・味覚器官という五知覚器官、取得器官・歩行器官・排泄器官・生殖器官・発声器官 (kha) という五行爲器官、[知覚器官と行為器官] 両者の器官としてのマナスである。元素由来の自我意識からは五タンマートラ、すなわち音声・匂い・味・色・感触という五タンマートラが [生起し]、五タンマートラからは五元素が順次生起する、すなわち虚空・地・水・火・感触である。ヴァイカーリカ自我意識は先の両 [自我意識] を生み出す補助をなすのであって、伏蔵していた結果を生み出すのではない。)

Rin po che'i sning po (45.4-5): de las 'byung ba dang rnam 'gyur dang sdug bsngal las gyur pa'i nga rgyal mun pa dang snying stobs dang g.yo ba nas che ba gsum 'byung zhing | de'i dang po las gzugs sgra dri ro reg bya ste de tsaṃ lnga dang | de dag las kyang rim pa ltar me mkha' sa chu rlung ste 'byung ba lnga skye la | gnyis pa las mig rna ba sna lce lus te blo'i dbang po lnga | ngag rkang lag gsang gnas te las kyi dbang po lnga | gnyis ka'i dbang po yid te bcu gcig go | (それ (大) からは元素・変異物・苦に由来する自我意識、[順次] 翳質・純質・激質の優勢なる三種が生起し、その第一 [の翳質の優勢なる元素由来の自我意識] からは色・音声・匂い・味・感触という五タンマートラ、それらからも順次、火・虚空・地・水・風という五元素が生起し、第二 [の純質の優勢なる変異物由来の自我意識] からは視覚器官・聴覚器官・嗅覚器官・味覚器官・触覚器官という五知覚器官、発声器官・歩行器官・取得器官・秘所 (= 排泄器官・生殖器官、gsang gnas) という五行爲器官、[知覚器官と行為器官] 両様の器官であるマナスという十一種が [生起する]。)

⁴⁹ 五タンマートラと五元素の関係性について、ここでは一対一対応のものとして理解されている。SK 注釈書の解釈は必ずしも一定しておらず、チャパと同様に一対一対応で理解するものもあれば、一元素の発生に複数のタンマートラが介在すると考えるものもある (近藤 2018 参照)。なお、TSP には一対一対応関係として描かれており、続いて SK 22 を引用するという文脈まで一致している。

TSP ad TS 7 (TSP_{BSS} 1:21.9-11; TSP_{GOS} 1:16.22-23): śabdād ākāśam, sparsād vāyuh, rūpāt tejah, rasād āpah, gandhāt pṛthivīti. yathoktam iśvarakṣṇena—
prakṛter mahāms ...

(音声から虚空が、感触から風が、色から火が、味から水が、匂いから地が [生起する] というように。次のようにイーシュヴァラクリシュナによっても述べられている——

ブラクリティから大が…)

なお、BSGT にも TSP、PhPGT と同様の記述がみられるが、火元素と水元素の記述が入れ替わっている。

BSGT (17a6-17b1): de tsaṃ lnga las 'byung ba lnga skye ste | sgra de tsaṃ las nam mkha' dang | reg de tsaṃ las rlung dang | ro de tsaṃ las chu dang | gzugs de tsaṃ las me dang | dri de tsaṃ las sa skye'o || de skad du'ang dbang phyug nag pos |

rang bzhin las chen ...

(五タンマートラから五元素が生起する。すなわち、音声タンマートラから虚空が、感触タンマートラから風が、味タンマートラから水が、色タンマートラから火が、匂いタンマートラから地が [生起する]。イーシュヴァラクリシュナも次のように [述べている] ——

ブラクリティから大が…)

⁵⁰ PhPGT テキストには "de chen po la thim ste chen po la thim pa" とあるが、内容が重複しているため、後半の "chen po la thim pa" を除外して解釈した。

帰滅 (nye bar zhu) によって未顕現のものとなり、「無常」と称されるのである。未顕現は〔根本〕プラクリティであるために恒常であり、かつ原因に依拠することはないが、その一方で顕現物 (gsal ba, *vyakta) は一時的なもの (res 'ga' ba) であるから、上述の〔各〕原因に依拠するものとして無常なのである⁵²。

B. 因中有果説 (16a2-4)

bal nag po dang snam bu nag po rgyu 'bras yin yang nag po'i rang bzhin tu cig pa ltar gsal ba dang
mi gsal ba rgyu dang 'bras bu yin yang rang bzhin_[16a3] cig pas rang las rang skye ba yin te |
zho gang yin pa de 'o ma dang ||
'o ma gang yin de zho zhes ||
drag po len gyis bstan pa ste ||
de bzhin 'bigs byed gnas pa 'ang 'chad ||⁵³
zhes_[16a4] 'byung pa lta bu'o |

黒い糸と黒い布は〔各々〕原因と結果ではあるが、黒という本性としては同一であるのと同様に、顕現物と未顕現は〔各々〕原因と結果ではあるが、その本性は同一であるためにそれ自体で自ら生起するのである⁵⁴。

凝乳こそ牛乳であり、牛乳が凝乳であると述べるルドリラによってこそ、〔自らが〕ヴィ

⁵¹ See TSP ad TS 7 (TSP_{BBS} 1:23.5-7; TSP_{GOS} 1:18.2-4): pralayakāle bhūtāni tanmātreṣu liyante tanmātrāṇḍriyāṇi cāhaṃkāre, ahaṃkāro buddhau, buddhiś ca pradhāne. na tv evam avyaktaṃ kvacid api layaṃ gacchati tasyā-vidyamānakāraṇatvāt. (還滅に際して元素はタンマートラへと帰滅し、タンマートラと感官は自我意識へと〔帰滅し〕、自我意識は統覚へと〔帰滅し〕、統覚は根本原因へと〔帰滅する〕。しかし、未顕現はそのようにいかなるものへとも帰滅することはない。なぜなら、それ(未顕現)には原因が存在していないからである。) Cf. TSP_{TIB} (D ze 148b1-2; P 'a 180a1-2): 'jig pa'i dus na 'byung ba rnam ni de tsaṃ la thim mo || de tsaṃ ni dbang po lga la'o* || dbang po ni nga rgyal la'o || nga rgyal ni blo la'o || blo ni gtso bo la thim ste | mi gsal ba ni de ltar gang la yang thim ba ma yin te | de la rgyu med pa'i phyir ro ||

* lga la'o P; lga'o D

なお、BSGT からはタンマートラが感官に帰滅する旨が読み取れ、TSP や PhPGT にみられる帰滅次第とは異なっている。

BSGT (19a2-3): 'jig pa ni gnas skabs nye bar zha ba tsaṃ ste | 'di ltar 'jig pa'i dus na 'byung ba rnam ni de tsaṃ la thim mo || de tsaṃ ni dbang po dang | dbang po ni nga rgyal dang | nga rgyal ni blo dang | blo ni gtso bo la thim pa'i tshul gyis 'jig go || gtso bo ni gang la yang thim pa med de rgyu med pa'i phyir ro || (消滅とは単なる隠滅状態にすぎない。すなわち、消滅に際しては〔五〕元素は〔五〕タンマートラに帰滅する。〔五〕タンマートラは〔十一〕器官〔に帰滅し〕、〔十一〕器官は自我意識〔に帰滅し〕、自我意識は統覚〔に帰滅し〕、統覚は根本原因に帰滅するという要領で消滅する。根本原因はいかなるものへとも帰滅することはない。それ(根本原因)は原因を有していないからである。)

⁵² 前掲脚注 44 引 SK 10 参照。

⁵³ TSP ad TS 16 (TSP_{BBS} 1:29.11-12; TSP_{GOS} 1:22.26-27):
yad eva dadhi tat kṣīraṃ yat kṣīraṃ tad dadhiti ca |
vadatā rudrilenaiḥ khyāpitā vindhyavāsītā || iti.

本詩節は他に TBV (ad Saṃmatitarkaprakaraṇa 1.3, 1:296.21-22) および Nyāyāvātārāvarttikavṛtti (NAVV, ad Nyāyāvātāra 4.56, 114.6-7) に引用されているが (TBV における引用に関しては Mejer 1999, 109 参照)、いずれも後半句を “vadatā vindhyavāsītvaṃ khyāpitā vindhyavāsīnā” としている。本詩節の出典につき、Bhattacharyya (1926, lxii) はヴァスバンドウ (Vasubandhu) 著と伝えられるサーンキヤ論叢書 Paramārthasaptati からの引用と考えており、Schayer (1931-1932, 93) や Liebenthal (1934, 22, 96n65) もこの見解に従っている。これはおそらく、ヴァスバンドウの師であるブッダミトラ (仏陀蜜多羅、*Buddhamitra) がサーンキヤ学匠ヴィンディヤヴァーシ (頻闍訶婆娑、*Vindhyavāsin) に敗北し、師の恥辱を雪ぐために『七十真実論』を著したという『婆藪槃豆法師伝』の伝承 (大正 no. 2149, 50:189c19-190a28、中村元 1996, 523-27 参照) 等に由来するものと推測されるが、これを Paramārthasaptati からの引用と考えるべき論拠は存在しない (Chakravarti 1951, 147 参照)。

ンディヤヴァーシン ('Bigs byed gnas pa, *Vindhyavāsin) であることが明かされている⁵⁵。
 という典拠があるように。

C. プルシャによる対象享受 (16a4-7)

nga rgyal la gsum pa ni nga rgyal snga ma gnyis po gnyis ga'i rang bzhin no || de la long spyod pa
 ni gtso bo'i [kh]{}ug ma gnas pa bdag gis shes shing rig pa yod pa'i skyes bu ste gang^[16a5] zag re
 re la skyes bu re re tha dad par gnas la de ni rtag pa skye 'jig med pa mthong pa'i yul ma yin pa
 kho na'o || bde ba la sogs pa gsum mi gsal ba ni gtso bo yin la gsal ba ni de tsaṃ lnga ste yid^[16a6] du
 'ong pa rnams bde ba dang yid du mi 'ong pa rnams sdug bsngal dang bar ma rnams btang snyoms
 yin no || blo 'ang gtso bo'i rang bzhin yin pas blo'i ngo bor gyur pa'i bde sdug rtag par yod pa yin
 no || de tsaṃ lnga'i^[16a7] ngo bo'i bde sdug gis kyang blo la rnam par 'jog la nang gi skyes bus kyang

⁵⁴ サーンキヤの代表的教説たる因中有果説によると、結果は原因の発生以前に原因内に可能態として潜在しているという。そのため、原因と結果との間には本質的な相違が想定されず、その例としてここでは黒い糸と黒い布に言及されている。原因としての糸の状態において潜在的に布という結果が存在しており、因果の等質性を示すために色の連続性が説かれている。本段落の直前には顕現物がその原因へと帰滅する次第について述べられていたが、文脈上、因果関係にあるタツヴァ、究極的には顕現物と未顕現が本質を等しくしていることを説いている。なお、TSPにも同じ例を用いて同一の内容が説かれている。

TSP ad TS 7 (TSP_{BBS} 1:21.24-22.2; TSP_{GO5} 1:17.6-10): traigunyādirūpeṇa prakṛyātmabhūtā eveti. tathā hi-loke yadātmakam kāraṇam bhavati, tadātmakam eva kāryam upalabhyate, yathā kṛṣṇais tantubhir ārabdhāḥ paṭāḥ kṛṣṇo bhavati, śuklais tu śuklāḥ. evaṃ pradhānam api triguṇātmakam. tathā buddhyahamkāraṇātmārendriyabhūtātmakam vyaktam api triguṇam upalabhyate, tasmāt tadrūpam. ([個々の結果物は] 三グナから成るなどというあり方で、プラクリティを本体としているものに他ならない。すなわち、世間においては原因がXを本体としている場合、結果はそのXを本体とするものに他ならないと認められている。あたかも黒い糸によって生成された布は黒いが、白い[糸]によって[生成された布は] 白いように、根本原因も三グナを本体としている。同様に、統覚・自我意識・タンマートラ・器官・元素そのものである顕現物も三グナから成るものとして認められている。したがって、[顕現物は] それ(根本原因)をあり方としているのである。)

See BSGT (18a3-4): ji skad bshad pa'i 'bras bu'i khyad par gtso bo las byung ba rnams sangs rgyas pa la sogs pa 'dod pa bzhin du rgyu las tha dad pa yod pa ma yin gyi 'on kyang rgyu'i ngo bo nyid yin te | dper na snal ma nag po las byas pa'i snam bu ni nag po dang | dkar po las byas pa ni dkar po yin pa bzhin no || (上述の結果の特性として、[結果は原因たる] 根本原因から生じているが、仏教徒などが主張しているのとは異なって、原因とは異なるものとして存在しているのではなく、それどころか原因そのものに他ならない。例えば、黒い糸から生じた布は黒く、白[糸]から[生じた布]は白いのと同様である。)

なお、TSPには「因中無果を論ずる良識ある仏教徒」(asatkāryavādinām sudhiyām bauddhānām, TSP ad TS 16, TSP_{BBS} 1:32.5-6; TSP_{GO5} 1:24.27)、「因中無果を論ずる仏教徒」(bauddhasyāsatkāryavādināḥ, TSP ad TS 29, TSP_{BBS} 1:32.23; TSP_{GO5} 1:31.8)とあるように、仏教徒が因中無果に立脚することが明言されている。

また、「自ら生起する」という概念に関しては、周知のように、因中有果に立脚するサーンキヤの展開説を念頭に置いたものとして *Mūlamadhyamakakārikā* 1.1でも扱われている (PPの翻訳としては能仁 1992, 56-58、チャンドラキールティ注 *Prasannapadā* に対する解説としては丹治 1988, 130-31n124 参照)。なお、パーヴィヴェーカは *MHK* 3.139 (tatra tāvat svato janma saṃvṛtyāpi na yujyate | sātmakatvād yathā dadhnaḥ svato janma na vidyate ||) でも後続詩節と同じ凝乳の例を用いつつ、「自らの生起」を批判の俎上に載せているが、その注釈 *TJ* においても「サーンキヤの者たちは自ら生起すると説く」(D dza 91a7-91b1; P dza 98a5: grangs can dag ni bdag las skye bar smras pa) と明言している。他にも、サキヤバンディタは *mKhas pa rnams 'jug pa'i sgo* において、サーンキヤ派の異名として「自ら生起する[と説く]者」(Jackson 1987, 1:274.13-14: rang skye ba) という名称を挙げている (Jackson 1987, 2:344 による翻訳、および van der Kuip 1985, 82 参照)。

⁵⁵ 本詩節においては因中有果の実例として牛乳の状態変化の例が用いられているが、いずれも本質を等しくするという理論的要請上、両者の同質性が説かれている。同内容の“yad eva kṣīram tad eva dadhi”という表現が *V*₂ (*V*₂₅ 27.16; *V*_{2n} 33.6: yad etat kṣīram [ta]d evā(va) dadhiḥ(dhi)) や *Sāmkhyasaptatīrtti* (*V*₁, 30.5-6)、*M* (21.3-4) といった *SK* 注に散見され (いずれも *SK* 16 に対する注)、同派内でごく一般的な実例とされてきたことがわかる (今西 1972, 215n68 参照)。ヴィンディヤヴァーシンはイーシュヴァラクリシュナ以前に遡るサーンキヤ論師の一人であるが、「ルドリラ」との関係性は不明である。「ルドリラ」について *Bhattacharyya* (1926, lxii) や *Chakravarti* (1951, 147) はヴィンディヤヴァーシンを指す固有名と考え、*Wezler* (1992, 292n13) も “*Rudrila* (*Vindhyavāsin*)” と表現している。その一方で *木村* (2014, 118) は「[物の区別も知らず、故に、因果の理さえも弁えない] 恐ろしき者」と解しており、本詩節が擲揄の類であることを考慮すれば、そのような解釈も可能であろう。

rnam par 'jog pas gnyis 'dres pa na bde ba la sogs pa shes pas rnam pa can du myong par 'gyur te yul longs spyod pa yin no zhe'o ||

自我意識の中で第三のものは、最初の二つである両〔自我意識〕を本性としている⁵⁶。その場合、享受 (long spyod pa, *bhoga) とは根本原因の袋 (khug ma) の中にあるものをアートマンが知って⁵⁷、個々人別々に宿る精神的なる (rig pa yod pa) プルシャという人

⁵⁶ 因中有果の記述の直後に再び自我意識の記述に回帰しており、続く享受の文脈を考慮してもこの一文は文脈にそぐわないが、単に記述の順序が入れ替わっている可能性がある。文脈上、第三の自我意識は翳質優勢の自我意識であり、その他の両自我意識を本性とするという。前掲脚注 48 でも指摘したように、MABh にも翳質優勢の自我意識がその他両自我意識を発動させるとされており、チャバの自我意識論は MABh を参照した可能性が指摘できる。

⁵⁷ テクスト上は“gtso bo'i lug ma”とあるが、「根本原因の袋」(gtso bo'i khug ma) という表現の用例が多数みられることから“gtso bo'i khug ma”と修訂を施した。“gtso bo'i khug ma”という表現は MAT 等にもみられ、BSGT はじめチベット撰述の学説綱要書にも頻繁に登場する。MAT では、MABh に引用される『宝雲經』(小川 1976, 329 参照) の「不滅」(D 'a 314b1-2; P 'a 372b7; MABh_{IVP} 306.13: 'gag pa ('gags pa P, MABh_{IVP}) med pa) という文言に対する注釈の中に登場する。また、ダルモッタラ (Dharmottara, ca. 740-800) に帰される Tshul gsum pa'i rtags shes kyang brjod pa la mi mkhas pa'i byis pa la bstan par bya ba'i phyir tshul gsum pa'i rtags ston par byed pa'i mtshan nyid gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa'i skabs su bab nas bshad pa (Tshul gsum pa) には、存在物の認識の可否は顕現 (mngon par gsal ba, *abhivyakti) や能力に依拠すると説くサーンキヤに対抗して、他の状態を獲得することを認識/非認識の契機とみなす別のサーンキヤが登場するが、その見解中にも「根本原因の袋」という表現が登場する。

MAT ad MABh 6.181-82 (D ra 290b5; P ra 348b4): 'gag pa med pa zhes bya ba ni grangs can pas gtso bo'i khug ma'i nang du thim par 'gyur bar 'dod pa bzhin du ni ma yin no || (「不滅」というのは、根本原因の袋の中に〔変異物が〕帰滅するとサーンキヤ派が認めているのとは異なった〔意味〕である。)

Tshul gsum pa (D tshe 125b3-5): mngon par gsal bar smra ba'i grangs can kha cig dngos po thams cad ni nus pa'i rang bzhin du rnam par gnas pas mngon par gsal bar bya ba yin no zhe na | gzhan gnas skabs gzhan du smra ba ni dngos po thams cad ni bdag nyid thams cad kyis gtso bo'i khug ma na rnam par gnas pas mi mthong ba yin la | rkyen gyi dbang gis ni khug ma nas phyung ba bzhin du mthong bar 'gyur ro || des na gsal ba ldog pa dang nus pa rnam par gnas pa ni ma yin gyi | 'on kyang gnas skabs gzhan thob pa 'ba' zhig tu zad do zhe'o || (顕現(mngon par gsal ba, *abhivyakti) を説く一部のサーンキヤが「一切の存在物は能力 (nus pa, *śakti) を本性とするものとして定立することにより開顕されるのである」というならば、他の状態〔獲得〕(状態の変異) を説く他の者は、「一切の存在物が全面的に根本原因の袋の中に定立することで見えなくなるが、補助因 (rkyen, *pratyaya) の力によって〔根本原因の〕袋から出離するかのごとく見えるようになるのである。したがって、〔存在物が見えなくなったり見えるようになったりする要因は〕顕現状態からの離脱 (gsal ba ldog pa, *vyaktyapagama; see YD ad SK 10, 128.19-129.4, 132.23-133.1; ad SK 15, 151.25-26) や能力の定立ではなく、他の状態を獲得することのみで済むのである」という。) See also Tshul gsum pa (D tshe 125b7).

さらにまた、本表現は ZL にも同様の文脈において見受けられる (茂木 1980, 451 参照)。

ZL (ZL_{BT} 125b4; ZL_K 229.15-16): de ltar rang bzhin gyi gtso bo'i khug ma nas yul sgra la sogs pa'i* rnam 'gyur rnam bton nas skyes bus longs spyod de | (かくしてプラクリティの根本原因の袋から、音声などの対象 [すなわち] 変異物を立ち昇らせ、プルシャは [それを] 享受する。) なお、同じ“gtso bo'i khug ma”という表現は、ZL の他の箇所にも二箇所登場する (ZL_{BT} 124b4, 5; ZL_K 227.16, 19)。

* la sogs pa'i] ZL_K; la sogs ZL_{BT}

本表現は根本原因が変異物を内包する様を「袋」と喩えているものと考えられるが、管見の限りかかる表現は現存サーンキヤ文献には見出されない。類似の発想としては、根本原因の別称としての「衆持」(KS ad SK 22, 1250c1) ないし「多者を内包するもの」(bahudhānaka, V₂ ad SK 22 [V₂₅ 34.17; V_{2N} 42.2]; see also G ad SK 22 [24.12]; M ad SK 22 [27.1] <G も M も “bahudhātaka” とあるが、G を “bahudhānaka” と読む Watson, Goodall, and Sarma (2013, 237n144) に従っていずれも “bahudhānaka” と読むべきと考えられる) にも現れている (NĀA 1:109.18, 265.8-9, 3:838.11-12 参照)。翻って PhPGT では、根本原因に内包されている対象 (苦楽ないし五タマートラ) をプルシャが享受するという文脈において言及されている。ウメ書体の場合 “kha” と “la” とは混同されやすいため、伝承上の過程で入れ替わった可能性がある。なお、BSGT はじめ以下の文献にも同表現が登場するが、そこではプルシャないしその精神性が根本原因に内包されるものとされており、文脈をやや異にしている。

BSGT (16a4-5): shes rig ni gtso bo'i khug ma na gnas pa rtag pa dang gcig pu dang sems pa can dang rang dbang can dang za ba po yin pa dang byed pa po ma yin pa ste | ([プルシャの] 精神性は根本原因の袋の中にあるが、恒常、唯一にして精神的、独立自存 (rang dbang can, *svatantra)、享受者、非行為主体である。)

rGyan gyi me tog (508.3): bdag ni sems pa can gyi skyes bu ste rtag pa dang gcig pu dang khyab pa dang

格主体 (gang zag, *pudgala) 各々に「これは恒常である」「[これは] 生起する」「[これは] 不滅である」「[これは] 視覚の対象ではない」「という認識が起こること」に他ならない。楽など (bde ba la sogs pa)⁵⁸ の三 [グナ] が未顕現のものは根本原因であって、顕現したものは五タンマートラである⁵⁹。すなわち、意に沿うもの (yid du 'ong pa) が楽であり、

byed pa po ma yin la za ba po yin pa dang rtag tu rang bzhin rgyu'i gtso bo'i khug ma na gnas pas lkog du gyur pa yin no || (アートマンは精神的なるプルシャであり、恒常にして唯一であり、遍満し非行為が主体であって享受者であり、常に原因たるプラクリティという根本原因の袋の中にあるために感覚が及ばないのである。)

Rin po che'i sning po (45.5-6): rig pa ni bdag dang skyes bu'i ming can gtso bo'i khug ma na gnas pa ste | (知はアートマンや「プルシャ」という名称を有するものであり、根本原因の袋の中にある。)

ただし、この箇所をテキスト通り“lug ma”と読むべき可能性もいくばくか残されている。“lug ma”は「雌山羊」(ajā) と解釈することも可能であり、ヴァーチャスパティ・ミシュラ (Vācaspati Mīśra, 10 世紀) による SK 注 *Tattvakaumudī* (TK) の劈頭を飾る帰敬句には雌山羊が根本原因の比喩として登場している (TK, 1.4-5; TK, 68.1-2)。

ajām ekām lohitaśuklakṣṇāṃ bahviḥ prajāḥ sṛjamānām* namāmah |
 ajā ye tām juṣamānām bhajante jahaty enām bhuktabhogām numas tām ||

多くの子孫を生み出す一頭の赤・白・黒の雌山羊に我々は敬礼する。

喜んでこれ (雌山羊) と交わり、楽しんでそれ (雌山羊) を捨てる雄山羊を我々は讃歎する。

* sṛjamānām] TK; sṛjamānāḥ TK.

ここでは「雄山羊」(aja) と「雌山羊」(ajā) がいずれも同時に「生まれないもの」を意味しており、男性名詞プルシャと女性名詞プラクリティの比喩として登場している。雌山羊の色「赤白黒」はそれぞれ激質・純質・翳質を表しており、プラクリティの構成要素を成しているが (Strauß 1925, 73, Chakravarti 1951, 12、中村了昭 1982, 47、金倉 1984, 23nn2-3 参照)、本詩節は元来 *Svetāsvatāropanīśa* (ŚU) 4.5 に典拠を有している (“aja/ajā” の掛詞についても ŚU 1.9 にすでに登場しており、その点については Oberlies 1995, 87n113, 88n116、Gotō 2000, 277、後藤 2017, 305-304 参照)。ŚU 4.5 後半句の解釈については、Gotō 2000, 276、後藤 2017, 307-306 参照。

ajām ekām lohitaśuklakṣṇāṃ bahviḥ prajāḥ sṛjamānām sarūpāḥ |
 ajo hy eko juṣamāno 'nuṣete jahāty enām bhuktabhogām ajo 'nyah || ŚU 4.5

なお、ŚU 4.5 は様々な文献に引用されるが、中でも DANC における引用 (1:266.6-7) に対して NĀA では “lohitaśuklakṣṇa” が「苦・楽・蒙昧を本体とする激質・純質・翳質から成る」(duḥkhasukhamohātma-rajāhsattvatamomayī) と解され (1:266.28-29)、“bahviḥ prajāḥ” も「大・自我意識・タンマートラなどの次第を経たブラフマー神から草束に至るまで」(mahadahamkāratanmātrādikrameṇa brahmādistambāntāḥ) とし てサーンキヤの術語をもって解されている (1:266.29, 267.5)。同詩節に対するサーンキヤの解釈は、シャンカラ (Śaṅkara, 8 世紀後半) による *Brahmasūtra* 注 (BSŚBh) にも「根本原因論者」(pradhānavādin) の反論として登場している (ad *Brahmasūtra* 1.4.8, 386.2-9, 387.1-3)。そして、同詩節は *Taittirīyāranyaka* (TĀ) 10.10 にも引用されているが (2:798.4-5、“... bahviḥ prajāḥ janayanti sarūpām / ...”)、サーヤナ (Sāyaṇa, 14 世紀) による注釈 (TĀBh) においても “ajā” が “mūlaprakṛtirūpā”、“lohitaśuklakṣṇa” が激質・純質・翳質を指すとされている (Pandeya 1981, 1-2 参照)。TĀBh ad TĀ 10.10 (2:798.7-20): na jāyata ity ajā mūlaprakṛtirūpā māyā. la hy anādes tasyā janma sambhavati. sā ca māyāikā itarasya sarvasya jagatas tatkāryatvāt. yadāsau tejo'bannāni trīṇi bhūtāny utpādyā tadrūpavātiṣṭhate tadānīm lohitaśuklakṣṇavarūpānir upetā bhavati. tathā ca cchandogā āmananti—“yad agne rohitam rūpam tejas tadrūpam yac chuklam tad apām yat kṣṇam tadannasya” iti. annaśabdenātra pṛthivy upalakṣyate. rajāhsattvatamogunā vā lohitādisabdair upalakṣyante. guṇatrayātmikā māyety uktam bhavati ... sarūpām bahuvidhām prajāḥ janayati. na jāyata ity ajo jīvaḥ, tasyāpi māyāvad anādītvād utpattir nāsti ... bhogair yuktā māyā bhuktabhogā tām māyām ... 。

なお、同じヴァーチャスパティの手になる *Tattvavaiśārādī* (TV) ad *Yogasūtra* 2.18 (TV_A 81.24-25; TV_B 83.26-27, 84.5)、ad *Yogasūtra* 2.22 (TV_A 91.9-10; TV_B 93.8-9) には ŚU 4.5 原形が引用されている。

⁵⁸ PhPGT テキストでは “bde ba lags pa” とあり、同じ表現が直後にもう一度登場するが、意味上は「楽など」として具体的には三グナを指していると考えられる。そのため、“lags pa” は “la sogs pa” の隠字と解釈した。なお、PhPGT には “la sogs pa” という通行の表現も用いられている (例えば 13b4)。

⁵⁹ 三グナの未顕現状態・顕現状態がそれぞれ根本原因・タンマートラと等置されているが、根本原因を三グナの平衡状態とする考え方は既述の通りである (前掲脚注 42 参照)。タンマートラを三グナの顕現状態とする考え方は、SK 38 では「特殊態」(viśeṣa) たる元素と対比的にタンマートラが「非特殊態」(aviśeṣa) と称されているように、むしろ三グナが発現していない状態と捉えられている。PhPGT の文脈上、このタンマートラは楽など三グナに収斂される感官の対象として位置づけられていると考えられるが、*Carakasamhitā* や *Buddhacarita*、*Mahābhārata* の一部等にみられる初期サーンキヤ思想においては「タンマートラ」という表現が用いられることはなく、単に音声・感触・色・味・匂いとしてタンマートラの内訳が列挙される他、元素の特性 (guṇa) や感官の対象 (viśaya, artha) として登場する (*Carakasamhitā* に関しては平等 1928, 59-60、三澤 2010, 111 参照、*Buddhacarita* に関しては平等 1928, esp. 54-56 参照、*Mahābhārata* Mokṣadharmā 篇に関しては Strauß 1913, 265; 1925, 129-30、Frauwallner 1927, 4、Edgerton 1965, 323n1 参照)。

意に沿わないもの (yid du mi 'ong pa) が苦であり、[両者の] 中間が蒙昧である。統覚もまた根本原因を本性とするため、統覚の本体として苦楽が常に存在しているのである⁶⁰。五タンマートラの本性である苦楽も統覚に定め置かれ、内なるプルシャも定め置かれることによって両者が渾然となると、楽などが知により形象を伴って感受されるようになるというのが、対象の享受であるという⁶¹。

また、初期サーンキヤ思想においては音声など五種ないし“viṣaya”が元素から展開するとされることも多く、展開次第の終局を占めることが知られている（本多 1980, 294-96 参照）。初期サーンキヤ思想における三グナ説の実相は定かではないものの、最終展開物として感官の対象ともされる以上、音声など五種は三グナが発現した状態とみなすことも可能であろう。チャバが依拠した資料は不明であるが、音声などとして登場していた対象を「タンマートラ」の語に集約させたものと推測される。

⁶⁰ 楽・苦・蒙昧に対して、「意に沿う」「意に沿わない」「中間」という解釈を与えるサーンキヤ文献は見出されない。ただし、TK には享受者 (bhoktr) としてのプルシャ存在論証 (SK 17) の文脈において、楽が「好ましいもの」(anukūla)、苦が「好ましくないもの」(pratikūla) と解されている。そして、統覚などが楽・苦を本体としている（すなわち、三グナを本体としている）が故に楽・苦を感受しえないとされている。

TK ad SK 17 (TK₁ 37.21-38.3; TK₅ 120.34-36, 122.1-5): bhoktr̥bhāvena sukhaduḥkhe bhogye* upalakṣayati. bhogye hi sukhaduḥkhe anukūlapratikūlavedanīye pratyātmam anubhūyete. tenānāyor anukūlanīyena pratikūlanīyena ca kenacid apy** anyena bhavitavyam. na cānukūlanīyāḥ pratikūlanīyā vā buddhyādayaḥ. teṣāṃ sukhaduḥkhādyātmakatvena*** svātmani vṛttivirodhāt. tasmād yo 'sukhādyātmā so† 'nukūlanīyāḥ pratikūlanīyo vā sa cātmeti‡. (享受者の存在によって、享受対象である楽・苦を間接的に指示している。というのも、享受対象である楽・苦は、好ましいもの (anukūla)・好ましくないもの (pratikūla) として感受されるものであり、各個人に経験されるからである。したがって、その両者 (楽・苦) を好ましいものとして感受しうる、また好ましくないものとして感受しうる何らかの別のものが存在するはずである。そして、統覚などは [楽を] 好ましいものとして感受しえず、[苦を] 好ましくないものとして感受しえない。なぜなら、それら (統覚など) は楽・苦などを本体としているため、それ自体に対して作用するという矛盾があるからである。したがって、楽などを本体としないものが [楽を] 好ましいものとして感受しうる、または [苦を] 好ましくないものとして感受しうるのであり、それがアートマンである。)

* sukhaduḥkhe bhogye] TK₅; bhogye sukhaduḥkhe TK₁ ** TK₅ omits apy. *** sukhaduḥkhādyātmakatvena] TK₁; sukhādyātmakatvena TK₅ † TK₅ omits so. ‡ cātmeti] TK₁; ātmeti TK₅

See ZL (ZL_{BT} 125a3-4; ZL_K 228.13-14): de nas skyes bu de yul la yid du 'ong ba dang mi 'ong ba la sogs pa sems par byed pa ni | (その後、プルシャがその意に沿う対象と意に沿わない対象などを感受するというのは…)

⁶¹ 前掲脚注 46 で述べた、両面鏡の比喻による対象の享受と同内容の記述が再説されている。すなわち、鏡面に相当する統覚に音声などの対象が映り、同時にプルシャも映ることで両者が見かけ上無区別となること、プルシャによる対象の享受であると考えられている。対象享受を両元の無区別と関連付ける記述は、Yogasūtra (YS) や PYŚ も見て取れる（村上 1978, 724-75、樫尾 1988, 27-28 参照）。

YS 3.35: sattvapuruṣāyor atyantasaṃkirṇayoḥ pratyayāviśeṣo bhogaḥ parārthā svārthasamyamāt puruṣajñānam. (サットヴァ (統覚) とプルシャとは決して混淆しあうことはないが、両者が観念の上で無区別となることが享受である。[サットヴァは] 他のためにあるからである。自己のために統制することにより、プルシャに対する知がある。)

PYŚ ad YS 2.6 (PYŚ₁ 64.3-4; PYŚ₅ 66.4-6): bhoktr̥bhogyaśaktyor atyantavibhaktayor atyantasaṃkirṇayor avibhāgaprāptāv iva satyāṃ bhogaḥ kalpate. (享受者としての能力と被享受者としての能力との間には絶対的な区別があり、絶対的に混淆しないものであるが、その両者があたかも無区別のようになる場合、[プルシャに] 享受が起こる (妥当する)。

PYŚ ad YS 2.18 (PYŚ₁ 83.6-7; PYŚ₅ 85.8-9): tatresthāniṣṭagunasvarūpādvadhāraṇam avibhāgāpannam bhogo bhoktuḥ svarūpādvadhāraṇam apavarga iti. (その [享受と解脱の] うち、享受とは、望ましい性質および望ましくない性質の本質を確定することであり、[プルシャと三グナとが] 無区別 [であるかのよう] になることである。解脱とは、享受者の本質を確定することである。)

また、ダルマキールティ (Dharmakīrti、7世紀頃) は Pramānaviśāyaya (PVin) 1.25ab (26.1-5) においてプルシャと統覚の無区別状態について言及しているが、ダルモッタラはその注釈 Pramānaviśāyayatikā (PVinṭ) としてプルシャの映像が統覚に映り、両者が無区別となることによって享受が実現されるとしている。PVin 1.25ab チベット語訳の当該箇所については、戸崎 (1990, 77-78) による和訳参照。

PVinṭ ad PVin 1.25ab (D dze 114b5-7; P dze 132a5-8): sems pa* dang zhes bya ba ni 'di nyid ston par byed pa'o || sems pa ni skyes bu'o || zhen pa ni blo ste | 'di ltar dmigs par bya ba'i yul snang ba na blo dang skyes bu'i rang bzhin dmigs par gyur pa de'i tshes blo'i bdag nyid la skyes bu'i grib ma babs pa'i phyir de dag ni rnam par dbye ba dmigs par gyur te | gang gi phyir skyes bu ni gzugs brnyan 'jog par byed pa yin la | gzugs brnyan dang ldan pa'i blo yang longs spyod pa po dang 'dra ba'i phyir ro || longs spyod pa po ni de nyid yin te 'di lta ste gzugs brnyan gtod

D. 認識手段 (16a7-16b2)

D1. 七種の関係 (16a7-16b2)

dngos po'i [16b] 'brel pa la bdun te | lha byin dang rta ltar bdag dang bdag gir 'brel pa dang | 'jim pa dang bum pa ltar rang bzhin dang 'gyur ba dang | rdza mkhan dang bum pa ltar rgyu dang rgyu can dang | sa bon dang myu gu ltar rgyu [16b2] dang 'bras bu dang | yal ga dang shing ltar pha ma lta bu dang | ngur pa shug{ } ltar lhan cig spyod pa dang | bya rog dang 'ug pa ltar dgra zla'i 'brel pa'o ||

事物の関係には七種ある⁶²。すなわち、(1) デーヴァダッタと馬のような所有者と所有

par byed pa'o || de'i phyr longspyod pa'i bdag nyid kyis de gnyis 'dres pas na rnam par dbye ba med pa yin no ||
 (「精神」というのは、同一性を説示しているのである。「精神」(sems pa, cetanā)とはブルシヤのことである。「判断」(zhen pa, adhyavasāya)とは統覚のことである。すなわち、認識可能な対象が顕現する場合、統覚とブルシヤの本性が認識基盤となり、そのとき統覚本体にブルシヤの影が宿る (grib ma babs pa, *chāyāpatti) ために、その両者は区別がある(ない?)ものとして認識されるようになる。なぜなら、ブルシヤは [自らの] 映像 (gzugs brnyan, *pratibimba) を [統覚に] 映し、映像を有する (映像が映り込んだ) 統覚も享受者と類似するからである。享受者というのはそういったこと、すなわち映像を投影することである。したがって、享受の本質によってその両者が渾然となることによって、区別がなくなるのである。)

* sems pa] D; sems P

⁶² 七種の関係はしばしばサーンキヤの推理を論ずる文脈において登場する概念であり、特にヴァールシヤガニヤ (Vārṣaganya) に帰される *Ṣaṣṭitantra* (散佚) の所説と考えられている。PSV においては各関係の名称についての言及はないものの、*Ṣaṣṭitantra* における推理の定義とともに七種の関係の存在が伝えられている (Steinkellner 2017, 161-62 参照)。七種の関係については Chakravarti 1951, 190, Frauwallner 1958, 123, Schuster 1972, 346, 村上 1978, 589-90, 茂木 1985; 1989, 48-49, 51-52n10, 桂 1986, 23-24; 1998, 41-42, Franco 1987, 545-48n379 参照。NBPS および PST における記述は前掲脚注 21-22, BSGT における記述は前掲脚注 28 参照。

PSV_v ad *Pramāṇasamuccya* 2.36c (D ce 36a1-2; P ce 37b4-5): grangs can pa rnam ni re zhiḡ 'brel ba mngon sum pa gcig las lhag par grub pa ni rjes su dpag pa'o zhes zer ro || de la 'brel ba ni rnam pa bdun te | de rnam nas* gang yang rung ba'i mngon sum pa gcig gis lhag pa'i don mngon sum pa ma yin pa nges par grub pa'i gtan tshigs de ni rjes su dpag pa'o || (サーンキヤ派の者たちは、関係しあっている一方の知覚にもとづいてもう一方を確証することが推理であると述べている。その場合、関係は七種である。それら(七種の関係)にもとづいて、何であれ一方を知覚することによって、知覚されていないもう一方を確定する論法が推理である。)

* D omits nas.

See *V₂* ad SK 5 (*V₂₅* 10.14-15; *V_{2N}* 12.7-8): liṅgaliṅgisambandhas tu svasvāmiprakṭivikārikākāryaka(kā)raṇa-mārātrikā(mātrāmātrika?)*pratidvandvi**sahacara***nimittanaimittikaprabhāvair iti.

* -mārātrikā(mātrāmātrika?)-] *V₂₅*; -pātrapātrika- *V_{2N}* ** -pratidvandvi-] *V_{2N}*; -pratipatti(pratidvandvi?)- *V₂₅* *** -sahacara-] *V₂₅*; -sahacarita- *V_{2N}*

See *J* ad SK 5 (71.4-10): sambandhās ca sapta—tatra svasvāmibhāvasambandho yathā rājapurūṣayoḥ. kadācit puruṣeṇa rājā rājñā vē puruṣaḥ. evaṃ prakṭivikārasambandho yathā yavasaktvoḥ. kāryakāraṇasambandho yathā dhenuvatsayoḥ. pātrapātrikasambandho (mātrāmātrika-?) yathā parivrṭtrivṣṭabdhayoḥ. sāhacaryasambandho yathā cakravākayoḥ. pratidvandvisambandho yathā śiṭoṣṇayoḥ. tatraikasya bhāve 'nyābhāvāḥ pratiyate. nimittanaimittikasambandho yathā bhojyabhōjakayor iti.

See *Nyāyavārttikāṭparyāyikā (NVT_T)* ad *Nyāyasūtra* 1.1.5 (NVT_T 135.5-6; NVT_T 1:138.24-25):

mātrānimittasamyogivirodhisahacāribhiḥ |

svasvāmivadyaghātādyaiḥ sām̐khyānām saptadhānumā ||

See *NĀA* (2:684.8-10): “svasvāmīyādbhāvena sambandhāt” iti vacanāt svasvāmibhāvena vā prakṭivikārahāvena vā kāryakāraṇabhāvena vā nimittanaimittikabhāvena vā mātrāmātrikabhāvena vā [sahacāribhāvena vā] vadyaghātākabhāvena vā kaścid arthaḥ kasyacid indriyasya pratyakṣo bhavātīti tebhyo 'tiriktasyāvacanād eṭeṣām eva vacanād iti.

See *NKC* ad *Laghyastraya* 15 (2:462.1-10): yad api sām̐khyair abhihitam—mātrāmātrikakāryavirodhisahacārisvasvāmivadyaghātādyaiḥ saptadhānumitīḥ. tatra mātrāmātrikānumānam; yathā cakṣuṣo vijñānānumānam. kāryāt kāraṇānumānam; yathā vidyuddarśanāt kāraṇavijñānam. prakṭivirodhidarśanāt tadvirodhyantarānumānam; yathā na varṣisyati balāhakaḥ pratyānikapavanayogitvāt. sahaacānumānam; yathā cakravākayor anyataradarśanād dvitīyajñānam. svadarśanāt svāmīno 'numānam; yathā chatraviṣeṣadarśanāt rājño 'numānam. vadyaghātānumānam; yathā sarpanakuladarśanāt* “ghātito 'nena sarpaḥ” iti jñānam. ādigrahaṇāt samyogyānumānam; yathā samudāyavartini parivrājake “kaḥ parivrājakaḥ” iti saṃśaye tridaṇḍadarśanāt “parivrājako 'yam” iti jñānam iti.

* sarpa-] em.; saharpa- NKC

物 (bdag dang bdag gi) の関係、(2) 土と壺のような素材とその変異物 (rang bzhin dang 'gyur ba) [の関係]、(3) 陶工と壺のような動力因とその結果 (rgyu dang rgyu can) [の関係]、(4) 種と芽のような原因と結果 (rgyu dang 'bras bu) [の関係]、(5) 枝と樹のような父母のごとき (pha ma lta bu) [関係]、(6) チャクラヴァーカ (ngur pa, *cakravāka) と [その] 妻 (shug)⁶³ のような共存 (lhan cig spyod pa) [関係]⁶⁴、(7) 鳥と梟のような対立関係 (dgra zla'i 'brel pa) である⁶⁵。

D2. 三種の認識手段 (16b2)

tshad ma sgra las byung pa dang gsum yin no zhe'o ||

認識手段は [知覚と推理に加え] ことばに由来するもの (sgra las byung pa, *śabda) とで三種あるという⁶⁶。

E. イーシュヴァラを奉ずるサーンキヤ説 (16b3-4)

[16b3] grangs can kha cig ni gtso bo 'ba' zhis gis mi skyed de de sems dpa' med pa'i phyir ro || skyes bus kyang mi skyed de rnam 'gyur ma skyes pa na blo la rnam pa ma shar bas yul longs mi spyod pa'i phyir ro || des na [16b4] gser dang ghar ba lta bu gtso bo dang dbang phyug gnyis kyis rnam 'gyur skyed de zhe'o ||

一部のサーンキヤによると、根本原因は単独で [変異物を] 生み出すものではないという。それ (根本原因) は生物ではない (非精神的である) からである。プルシャもまた、[変異物を] 生み出すものではない。変異物が生起していない限り、統覚に [対象の] 形象が昇ることはないために [プルシャによって] 対象が享受されないからである。したがって、ヒラニヤガルバ (gSer dang ghar ba, *Hiraṇyagarbha) のように⁶⁷、根本原因とイーシュヴァラ (dbang phyug, *īśvara) の両者によって変異物が生み出されるという⁶⁸。

⁶³ テキスト上は“shugs”とあるが、対応する NBPS (前掲脚注 21) および BSGT (前掲脚注 28) における“khyo shug”を考慮して“shug”と修訂を施した。あるいはむしろ、“khyo”も補って「雌雄」と解すべき可能性も十分に指摘できる。

⁶⁴ チャクラヴァーカはツクシガモの一種 (アカツクシガモ) と考えられており (Dave 1985, 450 参照)、夫婦愛の象徴としてヴェーダや仏典、カーヴィヤ類に登場する。原 1974, 307n47、Dave 1985, 450-53、Karttunen 2000, 204 を参照のこと。

⁶⁵ 鳥と梟はそれぞれ「梟の敵」(kauśikāri)、「鳥の敵」(kākāri) という別称を有しているように、天敵の関係にあるとされている (Dave 1985, 176 参照)。なお、Mahābhārata (MBh) Saṃskṛtaparvan 1.34-40 にも鳥と梟の対立関係が登場する。本用例については、吉水清孝博士 (東洋文庫) の教示を得た。ここに記して謝意を表す。

⁶⁶ 知覚については各派とも認識手段と認めているため論じられず、直前で推理に関わる七種の関係について述べられていたため、サーンキヤが認める認識手段として残る証言 (śabda) についてのみ言及されているものと推測される。サーンキヤの認める三種の認識手段については、SK 4 に列挙されている。

dṛṣṭam anumānam āptavacanam ca sarvaprāmāṇasiddhatvāt |
trividham pramāṇam iṣṭam prameyasiddhiḥ pramāṇād dhi || SK 4

知覚、推理、信頼できる言明は、あらゆる認識手段が [それによって] 成立する (そこに含まれている) から、認識手段は三種であると認められる。認識対象の成立は認識手段にもとづくからである。

See BSGT (20a1-2): grangs can pa dag nges par byed pa'i tshad ma ni mngon sum dang | rjes su dpag pa dang | lung tshad ma gsum khas len to || (サーンキヤ派の者たちは確定 (決定知) をもたらす認識手段として、知覚、推理、伝承 (lung) という三種の認識手段を承認している。)

F. アートマン論の総括とサーンキヤ説 (16b4–17a1)

de ltar bdag tu smra ba rnams la rtag par 'dod pa bye brag pa dang rigs pa can dang grangs can pa dang gsang pa [ba]o || rtag pa dang ni mi ^[16b5] rtag pa gnyis gar 'dod pa gcer bu pa dang spyod pa ba'o || gnyis ga ma yin par 'dod pa gnas ma bu ba'o || bdag bems por 'dod pa bye brag pa dang rigs pa can no || rig par 'dod pa la thams cad khyab pa ^[16b6] {ma yin pa} dang blo las tha dad pa {ma yin pa} dang du mar 'dod pa grangs can pa'o || kun la khyab pa dang blo'i ngo bo cig tu 'dod pa ni

⁶⁷ ここで比喩として示される“gser dang ghar ba”の詳細については不明である。上掲訳では暫定的に“gser”を“hiranya”、“ghar ba”を“garbha”の音写と解し、ヒラニヤガルバを意味するものと理解した。ヒラニヤガルバは *Rgveda* 10.121 に登場する宇宙の創造主としてよく知られているが、しばしばサーンキヤ・ヨーガの伝統とも関連付けられる。カピラをヒラニヤガルバと同一視する記述も時にみられるが (Wezler 1970, 260–61, Larson and Bhattacharya 1987, 108 参照)、ヨーガの祖として語られる姿がより一般的である。その代表例としては、*MBh* 12.337.60 の記述がよく知られている (Jacobsen 2008, 20 参照)。

sāmḥkhyasya vaktā kapilāḥ paramarṣiḥ sa ucyate |
hiranyagarbho yogasya vettā nānyaḥ purāṇaḥ || *MBh* 12.337.60

サーンキヤの創唱者は、かの最高の聖仙カピラであると言われる。太古のヒラニヤガルバがヨーガを知る者である。他の者ではない。(茂木 2019, 270)

その他、ヨーガとヒラニヤガルバとの関係性については高木 1991, 42–46 参照 (*Hiranyagarbhayogosastra* に関しては張本 1991 参照)。次脚注でも論じるように、本段落はイーシュヴァラを奉ずるサーンキヤ (Seśvarasāmḥkhyā) の教説を述べたものと考えられるが、かかる一派がパタンジャリの名のもとで語られるヨーガと同一視される点 (村上 1980, 139, Bronkhorst 1981, 316, Hattori 1999, 609 参照)、さらにヒラニヤガルバがパタンジャリとも並び称される点 (高木 1991, 42 参照) を考え合わせると、ここでヒラニヤガルバが登場することも首肯される。しかしながら、“gser dang ghar ba”としてヒラニヤガルバを並列複合語 (dvandva) で語義分析するような記述は管見の限り見出しえず、この問題はさらなる精査を要する。

⁶⁸ 本記述はイーシュヴァラを奉ずるサーンキヤに言及しているものと考えられるが、ここでは統覚に形象が昇らないことで対象が享受されず、それ故に根本原因とイーシュヴァラが変異物を生み出すとされている。しかしながら、その内容も論理展開も明瞭さに欠けている。*TS(P)* 第 3 章「両元の考察」(Ubhayaparikṣā) はイーシュヴァラを奉ずるサーンキヤを扱った章であるが、同章の記述によると、非精神的なる根本原因が単独で統覚以下の変異物を生み出すことはなく、その一方でプルシャも統覚による判断を介して初めて知者たりうる。そのため、プルシャと根本原因とが結びつく、すなわち変異物が生み出されるより以前にはプルシャが知者であることはない。したがって、プルシャが統御者であること (SK 17 参照) はありえず、統御者たるイーシュヴァラが変異物の発生をなすものであるとされている (村上 1980, 142, Bronkhorst 1981, 315–17, Hattori 1999, 612–16 参照)。この記述を参考にすれば、現象世界の誕生以前にプルシャが対象を享受することは不可能であるという前提から、統御者としてのイーシュヴァラが存在が導き出されるという旨が本文の内容であると考えられる。

TSP ad TS 94 (TSP_{BBS} 1:74.13–19; TSP_{GOS} 1:58.16–22): tatra kecit sāmḥkyā āhuḥ—“na pradhānād eva kevalād amī kāryabhedāḥ pravartante, tasyācetanatvāt. na hy acetano 'dhiṣṭhāyakam antareṇa svakāryam ārabhamāno dṛṣṭaḥ. na ca puruṣo 'dhiṣṭhāyako yuktaḥ; tasya tadānīm ajñatvāt. tathā hi—buddhyadhyavasitam evārthaṃ puruṣaś cetayate, buddhisamsargāc ca pūrvam asāv ajña eva, na jātu kiṃcid arthaṃ vijānāti. na cāvijñātam arthaṃ śaktaḥ kaścit kartum iti nāsau kartā. tasmād īśvara eva pradhānāpekṣaḥ kāryabhedānām kartā, na kevalaḥ. na hi devadattādīḥ kevalaḥ putraṃ janayati, nāpi kevalaḥ kulālo ghaṭaṃ karoti” iti. (この点〔世界原因〕に関して、一部のサーンキヤは〔次のように〕述べる——「根本原因のみから単独でこれら個々の結果が現出するわけではない。それ〔根本原因〕は非精神的だからである。すなわち、非精神的なるものが統御者なくして自らの結果を生成するということは経験的に知られていない。また、プルシャが統御者であるというのは理に適わない。それ〔プルシャ〕はその時点では知者ではないからである。すなわち、統覚によって判断された対象をプルシャは感受する。そして、それ〔プルシャ〕は統覚と関係を結ぶより以前には全くもって知者ではなく、いかなる対象も決して認識することはない。さらに、いまだ認識されていない対象を生み出すことは何者であれ決して不可能であるから、その者が〔世界の〕作者〔創造者〕であるということはない。したがって、イーシュヴァラこそが根本原因に依拠しつつ個々の結果を生み出すのであって、〔根本原因〕単独で〔生み出すの〕ではない。例えば、デーヴァダッタなどが単独で〔生子〕産むわけでもなく、陶工が単独で壺を作り出すわけでもないように」と)。

なお、*BSGT* にもパタンジャリ (Chur lhung, *Patanjali) 仙の名を挙げつつイーシュヴァラを奉ずるサーンキヤに言及されているが (茂木 1984, 598 参照)、TSP ad TS 7 (TSP_{BBS} 1:21.4; TSP_{GOS} 1:16.16–17) を引用しつつ単に世界生成をイーシュヴァラと根本原因の両者に帰しているにすぎず (18b5–19a1)、*PhPGT* ほど立ち入った説明は見受けられない。また、ZL にはサーンキヤの一派としつつも、イーシュヴァラが全世界を作り出すとされており (ZL_{BT} 126a4–5; ZL_K 230.15–16)、*PhPGT* や *BSGT* とは一線を画している。サーンキヤ論師としてのパタンジャリに関しては、先行研究を含め Gopal (2000, 263–75) によってまとめられている。

gsang pa ba dang dpyod pa ba{ cer bu pa}'o || de gsum gyis bdag shes rig don gyi rnam_[16b7] pa can du 'dod pa grangs can pas don gyi rnam pa can du 'dod pa yin no || grangs can pa dag bdag khas len pas chos thams cad bdag med par yang mi smra la | gtso bo dang skyes bu rtag par 'dod pas 'dus byas kyidngos po thams cad_[17a] rtag par yang mi rtag pas chos 'di pa las phyi rol du gyur pa yin no ||

かくして、諸々のアートマン論の中で [アートマンが] 恒常であると主張する者はヴァイシェーシカ派 (Bye brag pa)、ニヤーヤ派 (Rigs pa can)、サーンキヤ派、ウパニシャツ

⁶⁹ チャバはヴィシヌ派を嚆矢として各派の教説を順次述べてきているが、サーンキヤ派に後続するローカーヤ派はアートマンの存在を認めないため、ここで各派のアートマン論の総括を行っている。その記述は TS(P) 第7章「アートマンの考察」(Ātmaparīkṣā) を参照したものと目され、同章にはニヤーヤ・ヴァイシェーシカ派、ミーマーンサー派、サーンキヤ派、ディガンバラ派、ウパニシャツ論者、犢子部という六派のアートマン論が紹介、批判されているが(内藤 1985a, 2 参照)、その六派は PhPGT に登場する学派に一致している。なお、「gsang pa [ba]」の修訂に関しては直後の表記、および後掲 TSP に登場する“aupaniṣadikāḥ” (ad TS 328, TSP_{BSS} 1:156.13; TSP_{GS} 1:123.1) のチベット語訳“gsang ba pa rnam” (D ze 219b6; P 'e 269a2) にもとづいている。

また、各派におけるアートマンの恒常性に関して、ヴァイシェーシカ・ニヤーヤ派については後掲脚注 73 引用 TS(P) 等参照。サーンキヤ派、およびウパニシャツ論者についてはそれぞれ次の TSP 参照。TS(P) におけるアートマン論としてサーンキヤ派に関しては内藤 (1984)、ウパニシャツ論者に関しては中村元 (1950, 378-89) および内藤 (2003) による訳注を参照した。

TSP ad TS 287 (TSP_{BSS} 1:142.22-24; TSP_{GS} 1:111.24-25): “caitanyaṃ puruṣasya nijaṃ rūpaṃ” iti bruvatā caitanyaṃ nityaika rūpaṃ iti pratijñātāṃ bhavati; nityaika rūpāt puruṣāt tasyāvyatiriktatvāt. (「プルシャの本質は精神性である」と説く者 (サーンキヤ派) によっては、精神性が恒常にして単一のあり方を有するものであると主張されたことになる。なぜなら、それ (精神性) は恒常というあり方を有するプルシャと異ならないからである。)

TSP ad TS 328 (TSP_{BSS} 1:156.13-14; TSP_{GS} 1:123.1-2): apare 'dvaitadarśanaṃ valambināś caupaniṣadikāḥ kṣity-ādipariṇāmarūpanityaika jñānasvabhāvam ātmānaṃ kalpayanti. (ウパニシャツ論者というさらに別の者たちは、不二説 (advaitadarśana) に依拠しつつ、アートマンを地などの変容物のあり方をとる、恒常にして単一の知を本性とするものであると想定している。)

⁷⁰ アートマンを恒常かつ無常であるとするジャイナ説の直接の記述は TS(P) には見受けられない。TS(P) 313-15 には恒常なる実体 (dravya) と無常なる様態 (pariyāya) の区別/無区別を主張するジャイナ教の多面主義説 (anekāntavāda) が登場するが、それによると実体と様態は空間 (deśa)・時間 (kāla)・本性 (svabhāva) に関しては無区別である一方、数 (saṃkhyā)・名称 (saṃjñā)・特質 (lakṣaṇa)・結果 (kārya) に関しては区別があるという (田丸 1978, 671 参照)。実体と様態のこの関係性は、アートマンという実体と苦楽という様態の間にも適用されるため、実質的にはアートマンが恒常かつ無常を意味することになる。当該箇所 (同箇所) の翻訳研究としては田丸 1980, 18-19 参照。また、MHK 3.125-128ab および同箇所の TJ は、ジャイナ教の両様説 (ubhayavāda) に対する批判に割かれているが、同箇所 TJ は「ジャイナ教徒はあらゆる存在が [相反する] 両様の本体を有すると認めている」(TJ ad MHK 3.125 (D dza 87a5; P dza 93b4): gcer bu pa dag ni dngos po thams cad gnyi ga'i bdag nyid yin par 'dod de |) という記述で始められ、次のように、アートマンの恒常と無常を同時に認める両様説の記述をもって締めくくられている。TJ 該当箇所は野沢 (1971, 93-91) による翻訳参照。また、野沢 1955, 482-83 も参照のこと。

TJ ad MHK 3.128ab (D dza 88a1-2; P dza 94b1-2): bdag yod pa yang yin la bdag med pa yang yin pa dang | rtag pa yang yin la mi rtag pa yang yin pa dang | dngos po yang yin la dngos po med pa yang yin no* zhes bya ba la sogs pa | gnyi gar smra** ba thams cad la || dgag pa'i tshul yang de nyid do || zhes bya bar sbyar ro || (アートマンは存在し、かつ存在せず、恒常でも無常でもあり、實在 (dngos po) でも非實在でもあるなどという「一切の両様説の否定に関してもこのような論法が [妥当する]」(MHK 3.128ab: sarveṣūbhayavādeṣu pratīsedhe 'py ayam nayah) と結び付けられる。)

* P inserts ||. ** smra] D; smras P

そして、ミーマーンサー派のアートマン論として、TS(P) における議論はクマーリラ (Kumārila, ca. 600) の所説に限定されることが服部 (1966, 518-19) および内藤 (1986) によって指摘されているが、クマーリラはアートマンを恒常なるものと考えている (宇野 1996 参照)。この点はミーマーンサー派のアートマン論を伝える TS 224 「恒常にして精神性を本性とするアートマン」(nityacaitanyasvabhāvasyātmanah)、TS 242 (= Ślokavārttika (ŚV) Śabdādhikaraṇa, v. 404) 「統覚 (知) もプルシャ (アートマン) も精神性を本性としているが故に恒常にして単一であると認められる」(buddhīnaṃ api caitanyasvabhāvāt puruṣasya ca | nityatvam ekatā ceṣṭā) などの表現からも窺い知れる。しかしながら、クマーリラは同一のアートマンが

ト論者 (gSang pa ba, *Aupaniṣadika) である⁶⁹。[アートマンが] 恒常かつ無常という両様であると主張する者は、ジャイナ教徒 (gCer bu pa, *Nirgrantha) とミーマーンサー派 (sPyod pa ba) である⁷⁰。[恒常・無常の] いずれでもないと主張する者は、犢子部 (gNas ma ba) である⁷¹。アートマンが非精神的であると主張する者は、ヴァイシェーシカ派とニヤヤー派である⁷²。[アートマンが] 精神的であると主張する者の中では、到る所に遍満し、

行為主体にも享受主体にもなるとして、恒常なるアートマンに変化を認めているが、単なる変容が「無常」と表示されるのであれば、アートマンを「無常」と表現することも可能であるとし (ŚV Ātmavāda, v. 22、内藤 1987, 42、宇野 1996, 98 参照)、またアートマンに認識が生起して認識主体へと変化してもその恒常性とは抵触しない旨を述べている (ŚV Pratyakṣasūtra, v. 53ab、宇野 1996, 99 参照)。さらにクマールラは、ŚV Ātmavāda, v. 28 において「ゆえに、[絶対的に存続したり、絶対的に滅したりするという] 二つ [の見解] を捨てて、アートマンは [ある点では] 滅し、[ある点では] 存続することを本質とする、と承認されるべきである。とぐるなど [の状態] におけるへびのように」(宇野 1996, 100) と述べており、まさしく PhPGT に評される「恒常かつ無常」に相当する。TS(P) に伝えられるこのミーマーンサー説に関しては内藤 (1987) により、その論駁に関しては内藤 (1988) により翻訳研究が発表されている。

⁷¹ TSP にはブドガラ (pudgala) が五蘊と同一とも別異とも言表されえない (不可説法藏) とする犢子部説が登場する。それによると、五蘊と別異であるとするアートマンの恒常性が否定され、五蘊と同一であるとするブドガラが無常になるとされ、結果的にアートマンが恒常でも無常でもないことが説かれている。

TSP ad TS 337 (TSP_{BBS} 1:159.24–26, 160.7–15; TSP_{GOs} 1:125.26–126.9): atha pudgalasyāvācyaṭve kā punar yuktir ity āha—skandhebhya ityādi. yadi skandhebhyo 'nyaḥ pudgalaḥ syāt, tadānīm tairthikaparikalpitātmadr̥ṣṭir bhavet, tataś ca śāśvatātmaprasaṅgaḥ. na ca śāśvatasyātmanaḥ kartṛtvabhokṛtvādi yuktam; akāśavat tasya sarvadā nirviśiṣṭatvāt. pratiśiddhaś ca bhagavatā śāśvata ātmā. “nirātmānaḥ sarve dharmāḥ” iti ca vacanam vyāhanyeta. ananyas tarhi bhavatv ity ced āha—nānanya ityādi. yadi hi skandhā eva rūpādayaḥ pudgalaḥ* syāt, tadā bahubhyaḥ skandhebhyo 'nanyatvāt tatsvarūpavad anekatā prāpnoti pudgalasya, ekaś cesyate. yathoktam—“ekaḥ pudgalo lokā utpādyamāna utpadyate** yadvat tathāgataḥ***” iti. ādiśabdenānityatvādirigrahaḥ. evaṃ ca saty uccheditvaṃ skandhavad pudgalasyāpi syāt. tataś ca kṛtakarmavipranāśaprasaṅgaḥ. pratiśiddhaś ca bhagavatocchedavāda ity ato 'sty avācyaḥ pudgala ity siddham. (またもし [論敵が] 「ブドガラが言表不可能であることに対して一体いかなる合理性があるのか」と問うならば、[犢子部は] 答える——「[ブドガラは五] 蘊と [別異ではない。外教説となることが帰結してしまうから]」(TS 337ab) 云々と。仮にブドガラが [五] 蘊と別異であるとするなら、今や外教徒が想定するアートマン説となってしまうはずである。したがって、アートマンが恒常であることが帰結してしまう。しかしながら、恒常なるアートマンが行為主体や享受者であるなどということとは理に合わない。なぜなら、それ (恒常なるアートマン) は虚空のように、常に限定を受けないからである。しかも、世尊はアートマンが恒常であることを否定した。また、「あらゆる存在は無我である」という言明と撞着してしまう。それならば [ブドガラは五蘊と] 別異であるとするればよいと [論敵が] というならば、[犢子部は] 答える——「[ブドガラは五蘊と] 別異でないということもない。[ブドガラが複数であることが帰結してしまうから。したがって、ブドガラは五蘊と同一であるとも別異であるとも言表されえないというの正しい]」(TS 337cd) 云々と。すなわち、仮にブドガラが色などの [五] 蘊に他ならないとするなら、複数である [五] 蘊と別異でない以上、ブドガラはそれ (五蘊) そのものと同様に複数であることが帰結してしまう。しかしながら、[ブドガラは] 単一であると認められる。[Ānguttaranikāya などにも] 「世界が生起するときに単一のブドガラが生起する。如来のように」(内藤 1985b, 41n18 参照) といわれているように。「など」という語が用いられていることによって、[ブドガラは] 無常であることなども含意されている。そうであるならば、[五] 蘊と同様にブドガラも断滅してしまうはずである。したがって、すでに実行された行為も断滅することが帰結してしまう。しかも世尊は断滅論を否定している。したがって、ブドガラは [五蘊と同一であるとも別異であるとも] 言表されえないということが確立した。) 内藤 (1985b, 25–26) による翻訳参照。

* pudgalaḥ] TSP_{GOs}; pudgala TSP_{BBS} ** utpadyate] TSP_{BBS}; u(tpa)dyate TSP_{GOs} *** tathāgataḥ] TSP_{BBS}; tathāgataḥ TSP_{GOs}

⁷² アートマンの非精神性に関してはヴァイシェーシカ文献およびニヤヤー文献の中で必ずしも見解が一致しているわけではないが (服部 1966, 538n4、内藤 1985a, 20n41 参照)、両派のアートマン論に批判を加える TS 171 および TS(P) 172cd にはその旨が明示されている。なお、翻訳に際しては内藤 (1985a) による訳注を参照した。

anye punar ihātmānam icchādīnām samāśrayam |
svato cidrūpam icchanti nityam sarvagatam tathā || TS 171

一方、他の者たちはここで、アートマンを欲望などの拠り所であり、それ自体では精神的なあり方を有しておらず、恒常にして遍在すると認めている。

TSP ad TS 172cd (TSP_{BBS} 1:102.11–14; TSP_{GOs} lacuna): atha yadi cidrūpo na bhavati, tat katham acetayamānaḥ kartā ujjyata ity āha—cetanāyogād ityādi. cetanāyogād asau cetayata iti kṛtvā cetanaḥ, na punaḥ; acidrūpatvāt.

統覚と別異であり、複数であると主張するのがサーンキヤ派である⁷³。遍満し、統覚（知）そのものであると主張するのがウパニシャッド論者とミーマーンサー派（dPyod pa ba）である⁷⁴。これら三点（遍満性、統覚との別異性、複数性）によって精神的なるアートマンが対象の形象を伴うと主張するのがサーンキヤ派であって、[統覚が] 対象の形象を伴うと彼らは主張している⁷⁵。サーンキヤ派はアートマンを承認しているが故に諸法無我も唱えておらず、根本原因とプルシャが恒常であると主張しつつも一切の有為の存在物が恒常

yathā varṇayanti kāpilāḥ—“caitanyaṃ puruṣasya svaṃ rūpam” iti. (またもし [アートマンが] 精神というあり方を有しないものであるならば、感受していない行為主体というのがいかにして理に適用というのか、と [問う論敵に対してニヤーヤ派およびヴァイシェーシカ派が] 答える — 「[アートマンは] 精神性と結びつくから [精神的であるが、それ自体として精神的であるのではない]」 (TS 172cd) 云々と。精神性と結びつくことによって「彼は感受する」とみなされるために [アートマンは] 精神的であるが、カピラの徒輩 (kāpila、サーンキヤ派) が「プルシャの本質は精神性である」と論じているのとは異なり、[それ自体としては精神的では] ない。なぜなら、[アートマンは] 精神的なあり方を有しないからである。)

See also TJ ad MHK 7.1 (D dza 242b1-2; P dza 272b3-5; MHK_{He} 536.3-7): de la bye brag pas rang gi grub pa'i mtha' nyid 'di ltar mang du 'god par byed de | gzhan dag la brten nas goms pa las thar pa ni gcig nyid yin pas bdag cag gi* skyes bu ni byed pa med pa ma yin te | ci zhig yin zhe na | byed pa po dang |** za ba po yin te | gang gi phyir rtogs pa la sogs pa yon tan las gzhan pa'i bdag ni yod de | de ni ma skyes pa |*** rtog pa |† byed pa po |‡ za ba po |†† khyab pa |## bya ba med pa'o || (その点に関してヴァイシェーシカ派は、まさしく自説を次のように多様に定めている。他に依拠して修習することから解脱は唯一である。そのため、我々の考えるプルシャははたらかないのではなく、そうではなく行為主体にして享受者である。なぜなら、知 (rtogs pa) などの属性とは異なるアートマンが存在し、それは生起したのではなく、恒常にして、行為主体、享受者、遍満し、当為を離れている。) 村上 (1976, 164; 1978, 627) による翻訳参照。

* gi] D, MHK_{He}; gis P ** P omits |. *** P omits |. † P omits |. ‡ P omits |. †† P omits |. ††† P omits |.

See also PP ad Mūlamadhyamakārikā 18.1cd (D tsha 179b2-3; P tsha 223a7-8): bye brag pa dag ni bdag las dang | dbang po dang | blo las gzhan pa bde ba la sogs pa'i gzhir gyur pa dang | byed pa po dang | sems pa med pa dang | rtog pa dang | thams cad du song ba yin par brjod la* | (ヴァイシェーシカ派はアートマンが身体や感官、知 (統覚) と別異であり、楽などの基体、行為主体、非精神的であり、恒常にして遍在していると述べており、…) 村上 (1976, 154; 1978, 616)、梶山 (1978, 292) による翻訳参照。

* la] P; pa D

⁷³ チャバはサーンキヤ派のアートマン論として、①精神性、②遍満性、③統覚との別異性、④複数性という四点の特性に言及している。ここはテキスト上 “thams cad khyab pa ma yin pa dang blo las tha dad pa ma yin pa” として遍満ならびに統覚との別異の後にそれぞれ “ma yin pa” とあるが、アートマンの非遍満、および統覚との同一性という所説はサーンキヤ説として一般的ではない。特に両元の峻別を金科玉条とする同派において、統覚との別異性は教理的な前提事項である。そのため、“ma yin pa” はいずれも削除して解すべきものと考えられる。なお、①に関しては前掲脚注 34 参照。②に関しては SK では明示されないものの、概ね SK 諸注の間に見受けられる (村上 1974, 72-84; 1978, 475-86 参照)。③に関しては根本原因 (統覚) との差異に言及される SK 37 参照。④に関しては SK 18 参照。

sarvaṃ praty upabhogam yasmāt puruṣasya sādhyati buddhiḥ |

saiva ca viśiṇaṣṭi punaḥ pradhānapuruṣāntaram sūkṣmam || SK 37

すべてに関して統覚はプルシャに享受を成就させるからである。またそれ (統覚) のみが根本原因とプルシャとの微細なる相違を区別するからである。

janmamarāṇakaraṇānām pratīnyamād ayugapatpravr̥tṭes ca |

puruṣabahutvaṃ siddham traiguṇyaviparyāc caiva || SK 18

誕生・死・器官が個々定まっているから、そして [根本原因が] 同時に活動することはないから、さらに三グナなどと反対であるから、プルシャが多数であることが成立する。

さらに、TJ や PP、TS(P)、BCAP においても、サーンキヤのアートマン論としてこれら四点が認められている。TJ ad MHK 6.1 (D dza 229b3-4; P dza 256b6-7; TJ_{He} 416.4-6; TJ_N 152.7-10): de* ni bdag ste shes pa yod pa las tha dad du ma gyur pa | rtag pa |** ma byas pa | za ba po |*** gtso bo |† khyab pa |‡ byed pa med pa | (これ (プルシャ) はアートマンであって、精神性と区別されず、生じないものであり、恒常にして、作られず、享受者、最上、遍満するものであり、はたらかをもたない。)

* de] P, TJ_{He}, TJ_N; de dag D ** P omits |. *** | TJ_N; † D, P, TJ_{He} † P and TJ_N omit |. ‡ P omits |.

TJ ad MHK 6.19 (D dza 233a4-5; P dza 261a6-7; TJ_{He} 450.3-5): . . . rang bzhin ni gcig cig yin la | skyes bu ni mang po yin pas des na 'dir skyes bu gcig las grol du zin kyang thams cad du grol ba ma yin te | skyes bu mang pos thun mong du bcings pa yin pa'i phyir ro || (プラクリティは唯一であるが、プルシャは多数である。したがって、あるプルシャから解脱した場合であっても全面的に解脱するのではない。なぜなら、多数のプルシャによって共通に束縛されているからである。)

PP ad *Mūlamadhyamakārikā* 18.1cd (D tsha 179b3; P tsha 223a8-223b1): grangs can dag ni bdag* 'bras bu dang rgyu las gzhan pa byed pa po ma yin pa dang | za ba po dang |** dag pa dang | thams cad du song ba dang | mi 'gyur ba dang | sems pa yod pa yin par brjod cing... (サーンキヤ派はアートマンが結果とも原因とも別異であり、行為主体ではなく、享受者であり、清浄にして遍在し、変異せず、精神的であると述べており) 梶山 (1978, 292-93) による翻訳参照。See also PPT ad PP 18.3 (D za 63b6-7; P za 77b7-8).

* P inserts dang. ** P omits |.

caitanyaṃ anye manyante bhinnam buddhisvarūpaṭaḥ |
 ātmanā ca nijaṃ rūpaṃ caitanyaṃ kalpayanti te || TS 285

他の者たちは、精神性を統覚そのものとは別異であるとみなしている。そして彼らは、精神性がアートマンの本質であると想定している。

BCAP ad BCA 9.60 (5:454.5-7): kāpilās tu nityaṃ vyāpakaṃ nirguṇaṃ svayam eva caitanyaṭmakam ātmānam icchanti. na tu buddhisambandhāt. buddheḥ svayam acitsvabhāvatvāt. (一方、カピラの徒輩はアートマンを恒常にして遍満し、[三] グナを離れ、まさしく自ら精神性を本体とするものと認めている。しかしながら、[アートマンは] 統覚と関係することによってそうではなくなる。なぜなら、統覚はそれ自体精神を本性とするものではないからである。)

⁷⁴ TSP 第7章に伝えられるウパニシャッド論者説においては、アートマンが恒常で単一の知 (jñāna) を本性とするものとみなされている (前掲脚注 69 引用 TSP ad TS 328 参照)。ただし、遍満性については明確に言及されておらず、恒常・単一である以上、アートマンの遍満性は前提視されていたと推測される。

ただし、ヴェーダーンタ学説を伝える MHK 第8章の第57詩節および第88詩節には、アートマンの遍在が前提とされている (中村元 1976, 537, 539, Qvarnström 1989, 82-83, 92-93 参照、ブラフマンの遍在については MHK 8.16 参照)。

dravyaṃ yadi bhaved ātmā dravyatvāt sarvago na saḥ |
 ghaṭavan nāpi nityaḥ syāt tena pūrṇaṃ kuto jagat || MHK 8.57

仮にアートマンが実体であるとするなら、実体であるが故にそれは遍在するものではない。さらにもた、[アートマンは] 壺と同様に恒常ではないことになる。それ (遍在せず恒常ではないアートマン) によって、世界はいかにして満たされるというのか。

eko 'sāv ekarūpatvād bhāvabhede 'py abhedataḥ |
 sarvagaḥ sarvadharmatvān nityaś cāpy avināśataḥ || MHK 8.88

個々の存在物にも区別がないが故に、単一のあり方を有しているからそれ (「アートマン」とも称される不生の境地) は唯一である。一切法であるから遍在し、また、消滅しないから恒常である。

また、TJ にも「一切はブルシャに統御されて存在している、あるいはむしろ三界すべてにこれ (ブルシャ) は遍満している」(ad MHK 8.4 (D dza 252a3-4; P dza 284a4; MHK_{He} 612.9-10): ... thams cad skyes bus byin gyis brlabs nas gnas pa'am (D, P; ba'am MHK_{He}) | khams gsum thams cad la 'dis khyab pa yin te |), 「ブルシャが一切に遍満して唯一であり、それから神や人など、種々の諸世界の身体が生起するのであれば」(ad MHK 8.9 (D dza 253a4; P dza 285a7-8; MHK_{He} 620.18, 622.1): gang skyes bu ni thams cad du khyab pa (P insertts ||) gcig nyid yin la | (P omits |) de las lha dang mi la sogs pa 'gro ba rnam pa sna tshogs kyi lus rnams 'byung bar 'gyur ba yin na |), 「アートマンが一切に遍満しているとするなら」(ad MHK 8.13 (D dza 253b5; P dza 286a1-2; MHK_{He} 628.4): ... bdag thams cad du khyab pa yin na ...), 「そのブルシャもまた一切に遍満して広がる」(ad MHK 8.16 (D dza 254b7; P dza 287a8; MHK_{He} 636.13): skyes bu de yang kun la khyab cing rgyas || (<= ŚU 3.9; 中村元 1950, 321n49 参照)), 「一切の身体に遍満しているから、それ (アートマン) は万物の唯一なる本体である」(ad MHK 8.48 (D dza 262b1; P dza 296a4; MHK_{He} 710.5): ... lus thams cad la khyab pa yin pa'i phyir de ni thams cad kyi bdag gcig pu zhig (P omits zhig) yin no ...), 「またもしパラージャ樹のように [アートマンが] 唯一であるために一切に遍満しているのならば」(ad MHK 8.54 (D dza 263b2; P dza 297a6-7; MHK_{He} 720.14): gal te yang shing pa la sha bzhin du gcig nyid kiyis thams cad la khyab pa yin te |), 「[君の説ではアートマンという] 恒常にして遍満し、唯一なるもの以外に他に同種類の実在がないため」(ad MHK 8.60 (D dza 264a7; P dza 298a7; MHK_{He} 730.14): rtag pa kun la khyab pa gcig pu las rigs mthun pa'i dngos po'i don gzhan med pas |), 「恒常にして一切に遍満するアートマンという実在が万物の拠り所である点は虚空に等しいと語る者に対しては」(ad MHK 8.66 (D dza 266a1; P dza 300a3; MHK_{He} 744.14-15): ... dngos po rtag pa thams cad la khyab pa'i bdag dngos po thams cad kyi rten du gyur pa nam mkha' (namkha' P) dang 'dra ba yin no zhes smras pa de la |), 「君は [[アートマンが] 唯一にして遍満し、恒常である] 云々と述べたが、そのことは正しくない」(ad MHK 8.71 (D dza 267a4; P dza 301b1-2; MHK_{He} 756.6-7): ... khyod kiyis 'di skad du | (P; || D, MHK_{He}) gcig pu kun khyab rtag pa ste | (P; || D, MHK_{He}) zhes bya ba la sogs pa smras pa de yang mi bden te || (D, MHK_{He}; | P)), 「アートマン [があり]、そのアートマンが」恒常にして遍満し、唯一であることと反対である無我、無常、非遍満、複数という本性は矛盾しているから」(ad MHK 8.85 (D dza 268a7-268b1; P dza 303a2; MHK_{He} 768.9-10): ... bdag dang | (P omits |) rtag pa dang | kun la khyab pa dang | gcig pu las bzlog pa bdag med (P, MHK_{He}; mad D) pa mi rtag pa kun la ma khyab pa du ma'i ngo bo nyid 'gal ba yin pa'i phyir ...) などとしてアートマン (ブルシャ) の遍満について言及されている (TJ 第8章の翻訳研究としては中村元 1950, 238-332 参照)。なお、統覚との同一性に関しては TJ ad MHK 8.74 「統覚とアートマンの間には差異がないからである」(blo dang bdag la tha dad pa yod pa ma yin pa'i phyir ro, D dza 267b5; P dza 302a5; MHK_{He} 762.5-6) 参照。

また、MAV においても「ウパニシャッド論者に追従する者」(gsang ba pa'i rjes su 'brang ba)の説く最高アートマンとして、認識 (rnam par shes pa, *vijñāna) そのものとみなされている。

MAV ad *Madhyamakālamkāra* 94-97 (D sa 80b1; P sa 80b3; MAV₁ 310.14-16): gsang ba pa'i rjes su 'brang ba dag ni bdag dam pa ni gcig pu kho na rnam par shes pa tsaṃ gyi rang bzhin yin te | nam mkha* chen po dang 'dra zhes brjod de | (ウパニシャッド論者に追従する者たちは、最高アートマンが唯一にして純粹なる認識そのものであり、大空に等しいと述べている。) 一郷 (1985, 187) による翻訳参照。

* nam mkha'] D, MAV; nam mkha'i P

さらに、BCAP におけるウパニシャッド論者 (Upaniṣadvādin) のアートマン論においてもアートマンが唯一にして遍満し、恒常なる知とみなされた上で、TS 328-29 が引用されている (中村元 1950, 399 参照)。ウパニシャッド論者説に関しても BCA(P) が TS(P) に依拠していることを考慮すれば (中村元 1950, 398-99 参照)、明言されていないアートマンの遍満性についても TS(P) に含意されていたと推察される。

BCAP ad BCA 9.60 (5:455.7-8): upaniṣadvādinā tu samastaprāṇisaptānāntargatam ekam eva vyāpi nityam ca jñānam icchanti. (一方、ウパニシャッド論者は「アートマンを」生きとし生けるものの連続体に内在し、唯一にして遍満し、恒常なる知であると認めている。)

また、ミーマーンサー派のアートマン論として、アートマンの精神性に関しては TS 224 (前掲脚注 70 引用) 参照。統覚 (知) との同一性、および遍満するアートマンに関しては、次の TS(P) を参照のこと。

vyāvṛtṭyanugamātmānam ātmānam apare punaḥ |
caitanyarūpam icchanti caitanyaṃ buddhilakṣaṇam || TS 222

一方、さらに別の者たちは、アートマンを区別 (vyāvṛtṭi) と随伴 (anugama) を本体とするものであり、精神性というあり方を有すると認めている。[その] 精神性とは知の特質である。

TSP ad TS 222 (TSP_{BBS} 1:121.14-18; TSP_{GS} 1:94.21-24): sukhādirūpeṇa vyāvṛtṭam sattvādirūpeṇanugatam ātmānam cidrūpam apare jaiminiyā varṇayanti. tac ca caitanyaṃ buddhivyatirekeṇāyat, yathā sāmṅhyair iṣyate, kiṃ tarhi buddhir eveti darśayati—**caitanyaṃ buddhilakṣaṇam** iti. buddhilakṣaṇam buddheḥ svarūpam ity arthaḥ. buddhivyatirekeṇāparasya cidrūpatvāpratīter iti bhāvaḥ. (アートマンには楽などのあり方からすれば [苦などのあり方から] 区別があり、存在性などのあり方からすれば随伴があり、精神的なあり方を有するものと「さらに別の者たち」[すなわち] ジャイミニの徒輩 (ミーマーンサー派、jaiminiya) は論じている。そして、その精神性はサーンキヤ派の者たちが認めるのとは異なって、知 (統覚) と異なる別のものではない。そうではなく、統覚に他ならないことを示している——「**精神性とは知の特質である**」と。「知の特質」とは知の本質という意味であり、知と異なる別のものが精神的なあり方を有するとは認められないから、ということが意趣されている。) 内藤 (1987, 46) による翻訳参照。

TSP ad TS 244-45 (TSP_{BBS} 1:127.23-25; TSP_{GS} 1:99.18-20): yady api pumāṃso vyāpināḥ, tathāpy adṛṣṭavaśād deha eva vartamānās caḥsurādīkaraṇopanitān viṣayān grhṇanti, nānyatra. yat tv etan nityaṃ caitanyaṃ, asāv asmākaṃ dhīr buddhiḥ, na tu sāmṅhyavat tadvyatirekiṇi buddhiḥ. (確かにアートマン (pums) は遍満しているが、まさしく身体内に存している [アートマン] が不可見力 (adṛṣṭa) を通じて視覚器官などの器官によってもたらされた対象を把握するのであって、他のところに [存しているアートマンが把握するの] ではない。しかも、この恒常なる精神性が我々の考える知 [すなわち] 統覚であって、サーンキヤ派のように統覚がそれ (アートマン) と異なっている [と考える] のではない。) 内藤 (1989, 21) による翻訳参照。

なお、クマーリラは ŚV Ātmavāda, v. 20 において、アートマンを遍在 (vibhu) とみなすミーマーンサー説に対する反論を示しており、v. 73 においては輪廻主体の継続性を担保するためにアートマンの遍在 (sarvagata) が想定されている。

tava nityavibhutvābhyām ātmāno niṣkriyā yadi |
sukhaduḥkhāvikāryasya* kiḍṛśī kartṛbhoktṛtā || ŚV Ātmavāda, v. 20

もしあなた [方、ミーマーンサー] にとってアートマンは、常住であり遍在するものだから、行為を有しないならば、快樂や苦しみ [との結び付き] によって変化し得ない [アートマンが] どうして行為が主体や享受主体たり得ようか。(宇野 1996, 97)

* -kāryasya] em. (宇野 1996, 107n5 参照); -kāryās ca ŚV

jñānaśaktisvabhāvo 'to nityaḥ sarvagataḥ pumān |
dehāntarakṣamaḥ kalpyaḥ so 'gacchann eva yokṣyate || ŚV Ātmavāda, v. 73

故に、認識能力を本質とし、常住で、遍在するものであり、別の身体 [を獲得] することが出来るアートマンが想定されるべきである。[それゆえ] それ [アートマン] は全く移動することなしに [別の身体と] 結び付くであろう。(宇野 1997, 18)

なお、テクストは “dpyod pa ba cer bu pa'o” とあるが、“cer bu pa” を “gcer bu pa” と読み「ジャイナ教徒」と解し、さらに “dang” を補えばジャイナ教徒も列挙されていることになろう。しかしながら、ジャイナ説では一般に遍在するアートマンが認められていないため、“dpyod pa ba'o” と読み “cer bu pa” を削除した。アートマンの遍在に対して批判を加えるジャイナ文献としては、例えば SyM (ad Anya-yogavyavacchedadvātriṃśikā 9, SyM_{BSP} 49.22-50.3, 51.1-9; SyM_{ML} 52.13-18, 53.17-23; SyM_J 68.11-15, 70.1-6; SyM_{Bh} 95.5-8, 97.7-11) 参照。

⁷⁵ 「対象の形象を伴う」という表現が二度登場するが、後半の主体が不明である。上掲訳ではアートマンとの対比が想定されていると考え、暫定的に「統覚が」と補って解した。サーンキヤ派の一般的な認識づ

であるとも理解していないため、このダルマ（仏教説）からは排除されるのである。

G. サーンキヤ説批判（17a1-4）

skye med nam mkha'i pad ma ltar ||
dngos po 'thad pa ma yin no ||
'dra dang don rnams yongs gcad dang ||
[17a2] med pa'i skyes bu 'jin byed min || 1

cig na yon tan gsum du 'gal ||
gsum phyir gtso bo gcig pu min ||
yon tan gsum yang gsum gsum phyir ||
re rer 'thad pa ma yin no || 2

gsal [17a3] dang mi gsal 'gal ba'i chos ||
rang bzhin cig tu 'thad ma yin ||
cig na gnyis ga grub pa'i phyir ||
'bras bu skye ba don med 'gyur || 3

ma grub na ni byed po med ||
gang zhig gang gi skyed [17a4] byed yin ||
snga na med pa'i gtso bo ni ||
ther zug nyid du ji ltar brjod || 4

zhes bya ba ni grangs can pa'i lugs dgag pa mdor bsdu pa'o ||

空華のように、生起することのない事物 [が存在すること] はありえない⁷⁶。プルシャは[統覚に映像が映ることで統覚と]類似してはいるが、[統覚と異なり]対象を画定(判

ロセスによると、対象と接触した感官がその対象と同じ形へと変容し、最終的にはその感官を受け取った統覚も感官と同じ形、すなわち対象と同じ形へと変容するとされる (Kondo 2010, 1135-36 参照)。その意味においては、統覚が対象の形象を伴うと解することも可能である。ここではアートマンも対象の形象を伴うとされているが、厳密を期するならばこれは不正確な表現である。プルシャによる対象享受は、上述の映像説を用いつつ、対象の形へと変容した統覚にプルシャの映像が映ると想定することで説明される。その限りにおいてアートマンが対象の形象を伴うと表現すること自体は可能であるが、それはあくまで比喩的なレベルにすぎないことに注意が必要である。YD (ad SK 17, 171.15-16) に引用される次の詩節はプルシャが宝珠 (mani) に喩えられ、まさしく映像説を前提とした発想に依拠しながら、プルシャが対象の姿をとることを説明しようとしている。

arthākāra ivābhāti yathā buddhis tathā pumān |
ābhāsamāno buddhyāto boddhā mañivad ucyaṭe ||

対象の姿のように統覚が顕現するあり方に従って、男性原理（プルシャ）は統覚として顕現するから、宝珠のように覚る者 (boddhṛ) であるといわれる。

本詩節に関しては Kellner (2016, 146) が注意深く扱っているように、“iva” を考慮に入れて比喩的にプルシャが対象の形象を伴うものと理解すべきである。なお、いわゆる有形象 (sākāra) 知識論と無形象 (nirākāra) 知識論の対立構図の中で、サーンキヤ派を前者に組み込もうとする向きもみられるが (Kajiyama 1965, 429、梶山 1983, 7、Drefyus 2007, 100 参照)、Kellner (2016) は PST に伝えられる *śaṣṭitantra* の知覚論の検討を通じ、従来の見解に対して再考を促している。

⁷⁶ チャパは生起することのない存在を否定しているが、文脈上特にプルシャが意図されている。ただし、同じく生起することのない存在として根本原因の存在も同時に否定されていると考えられる。TSP にも因

断) することなく、[対象を] 把捉する ('jin) ⁷⁷ こともない。(1)

[根本原因が] 唯一であるなら三グナというのは矛盾している。[グナが] 三種であるから、根本原因は唯一のものではない ⁷⁸。三グナもまたそれぞれ三種であるから、その各々としてもありえない。(2)

顕現と未顕現というのは属性が矛盾しているから、[顕現物を内包する未顕現] プラクリティ(根本原因)が唯一であることはありえない。[根本原因が] 唯一であるというなら、[顕現と未顕現の] 両者が成り立つから、結果の生起が無用なものとなる ⁷⁹。(3)

中有果説に対する批判を加えつつ、空華を例としながら同様の点に言及される。

TSP ad TS 28 (TSP_{BS} 1:39.3-5; TSP_{GS} 1:30.16-18): yataḥ kāraṇasaktipratīnyamāt kiṃcid evāsat kriyate yasyotpādakam kāraṇam asti, yasya tu viyadabjāder nāsti kāraṇam tan na kriyate ity anekānta eva. (なぜなら、原因の能力は個別に限定されているから、それを生起させる原因が存在する一部のものだけは非存在であっても生み出されるが、空華など [生起させる] 原因が存在しないものが生み出されることはないというように不確定に他ならないからである。)

また、MHK 3.140 およびその注釈にも、同様の点が論じられている。

notpannāḥ svātmato bhāvā bhāvatvāt tad yathā pumān |
nāpi cātmāsty ajātānām ajātatvāt khapuṣpavat || MHK 3.140

存在物はそれ自体から生起するのではない。存在物であるから。男性原理(プルシャ)のように。さらにまた、生起したのではないものに本体は存在しない。生起したのではないから。空華のように。

TJ ad MHK 3.140 (D dza 91b5-6; P dza 98b2-4): skyes bu ni de dag gi gzhung las ma skyes par 'dod pas | de bzhin zhes bya ba ni ma skyes pa tsam zhiḡ khas blangs nas dngos po rnam kyī skye ba dgag pa'i dper bya'o || ... bdag ni ngo bo nyid yin na de ni skyes bu la sogs pa bdag las ma skyes pas bdag** la med de*** ma skyes pa'i phyr nam mkha'i me tog bzhin no || (彼らの典籍によると、プルシャは生起したものではないと認められているから、「それ(プルシャ)のように」というのは、生起したものであることのみを承認することによって存在物の生起を否定する喩例である…「本体」は本性である以上、プルシャなど、それ自体から生起したのではないものにはそれが存在しないのである。生起したのではないから。空華のように。)

* las] D; la P ** skyes pas bdag] D; skyes pa dag P *** P inserts |.

See also TJ ad MHK 3.143cd (D dza 92b6-7; P dza 99b4-5): gtso bo dang skyes bu la sogs pa rang nyid ma skyes pa'i* phyr snga phyi'i** khyad par med par ni rgyu ma yin pas | ci yang ma yin zhiḡ gang gi rgyur yang mi 'gyur bas*** ji ltar gzhān gyī rgyur 'gyur | (根本原因やプルシャなどはそれ自体では生起しないものであるから、前後の差異がないという点で原因ではないから、何物でもなくいかなるもの原因ともならない。したがって、いかにして他のもの原因となろうか。)

* ma skyes pa'i] P; ma skyas pa'i D ** P omits snga phyi'i. *** P inserts |.

⁷⁷ テキスト上 “jin” とあるが、正書法の相違により “dzin” と同義と考えて「[対象を] 把捉する」という意味で解した。映像を介してプルシャが統覚と類似する点に関しては、前掲 PvinT (前掲脚注 61 引用) 参照。

⁷⁸ 根本原因が唯一であるにもかかわらず、その構成要素として三種のグナが想定されていることに対する批判である。同様の批判は TS(P) 41 にもみられるが、そこでは因中有果説によって要請される因果の等質性を批判の軸足に据えている。すなわち、因中有果説のもとでは原則的に因果間の区別が想定されないにもかかわらず、原因としての根本原因が唯一にして恒常、その結果たる顕現物が複数にして無常であることは矛盾であり、因果の異質性が示されている。

siddhe 'pi triguṇe vyakte na pradhānam prasidhyati |
ekaṃ tatkāraṇam nityam naikajātyanvitaṃ hi tat || TS 41

顕現物が三グナから成ることが成立したとしても、その原因である唯一にして恒常なる根本原因も成立するということはない。なぜなら、それ(顕現物)は単一の本質的特徴(jāti)を伴っていないからである。

TSP ad TS 41 (TSP_{BS} 1:47.19-23; TSP_{GS} 1:37.18-22): triguṇātmakam ekaṃ nityam vyāpi ca tasya kāraṇam sādḡhayitum iṣṭam. na caivaṃbhūtena kāraṇena kvacid dhetoḡ pratibandhaḡ siddhaḡ. nāpi yad-ātmakam kāryam upalabhyate, kāraṇenāvāśyam tadātmanā bhavitavyam kāryakāraṇayor bhedāt. tathā hi—hetu-mattvānityatvāvāpītādibhir dharmaiḡ samanvite vyaktākhyam kāryam iṣyate bhavadbhiḡ, na ca tatkāraṇasya tādrūpyam iṣṭam. tasmād anaikāntiko hetuḡ. ([あなた方サーンキヤ派は] それ(顕現物)の原因が三グナを本体とし、唯一にして恒常、遍満するものであることを論証しようと望んでいる。しかしながら、いかなる場合にも論拠とかかる原因との間に必然関係が成り立つことはない。また、結果がXを本体とすると認められる場合、原因も必然的にそのXを本体とするものとはならないはずである。なぜなら、原因と結果との間には差異があるからである。すなわち、原因を有すること、無常であること、遍満するものたることなどの諸属性(前掲脚注 44 引用 SK 10 参照)を具えている場合、それが顕現物と称される結果であるとあなた方は認めているが、しかしながら、その原因も [結果と] 同じ性質を有するとは認められない。し

[顕現と未顕現の両者が] 成り立たなければ、行為主体は存在しない⁸⁰。あるものがあるものを生み出す場合、以前に存在しなかったもの（＝以前に存在しなかったものを生み出す）根本原因が永遠であるといかにして評すことができようか。（4）
というのは、サーンキヤ派の体系に対する否定を簡潔にまとめたものである。

結語（17a4-5）

bde bar gshegs pa dang phyi rol pa'i gzhung rnam par dbye^[17a5] ba las grangs can pa'i grub pa'i mtha' brtag ste [r]tog ge'i tshul bzhi pa'o ||

『仏教説と外教説の弁別』（善逝と外教徒の諸学説の弁別）より、サーンキヤ派の定説の考察、すなわち第四タルカが [終了した]。

〈略号ならびに使用テキスト〉

- AS *Aṣṭasahasrī* by Vidyānanda. *Śrīmadbhāgavadvidyānaṃdācārya viracita Aṣṭasahasrī: Syād-vādaciṃtāmaṇi—bhāṣā ṭīkā sahita. Ṭīkākartrī, Jñānamatī Mātājī. 2. saṃskaraṇa. 3 vols. Vīra jñānodaya granthamālā, puṣpa naṃ. 1, 98, 100. Hastināpura: Digambara Jaina Triloka Śodha Saṃsthāna, vīra° ni° saṃ° 2515–2516.*
- BCA *Bodhicaryāvatāra* by Śāntideva. In *BCAP*.
- BCAP *Bodhicaryāvatārapañjikā* by Prajñākaramatī. *Prajñākaramatī's Commentary to the Bodhicaryāvatāra of Ḥāntideva: An Introductory Treatise on the Duties of a Buddhist*. Edited with indices by Louis de la Valée Poussin. 7 fascs. Bibliotheca Indica, a Collection of Oriental Works, n.s., nos. 983, 1031, 1090, 1126, 1139, 1305, 1399. Calcutta: Asiatic Society, 1901–1914.
- BCAP_{Tib} Tibetan translation of the *Bodhicaryāvatārapañjikā*, *Byang chub kyi spyod pa la 'jug pa'i dka' 'grel*. D no. 3872; P no. 5273.
- BSGT *Blo gsal grub mtha' (Grub pa'i mtha' rnam par bshad pa'i mdzod)* by dBus pa blo gsal Byang chub ye shes. “Édition fac-similé du *Blo gsal grub mtha'* (Xylographe conservé à la bibliothèque de l'École Française d'Extrême-Orient, Collection A. Migot, n° T. 0554).” In *Blo gsal grub mtha': Chapitres IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édités et chapitre XII (Mādhyamika) édité et traduit*. Par Katsumi Mimaki. Kyoto: Zinbun Kagaku Kenkyusyo, Université de Kyoto, 1982.
- BSŚBh *Brahmasūtrabhāṣya* by Śāṅkara. *The Brahmasūtra Śāṅkara bhāṣya with the Commentaries Bhāmatī, Kalpataru and Parimala*. Edited with notes etc. by Anantakriṣṇa S'āstrī. Re-edited by Bhārgava Śāstrī. 2nd ed. Bombay: The Nirṇaya Sāgar Press, 1938.
- CŚT *Catuḥśatakaṭikā* by Candrakīrti. In *Sanskrit Fragments and Tibetan Translation of Candrakīrti's Bodhisattvayogācāracatuḥśatakaṭikā*. Edited by Kōshin Suzuki. Tokyo: The Sankibo Press, 1994.
- CŚT_{Tib} Tibetan translation of the *Catuḥśatakaṭikā*, *Byang chub sems dpa'i rnal 'byor spyod pa bzhi brgya pa'i rgya cher 'grel pa*. D no. 3865; P no. 5266.

たがって、[あなた方が立脚する] 論拠は不確定である。）

⁷⁹ 直前の詩節で指摘された原因と結果の数的不整合が持ち出され、未顕現（根本原因）と顕現物（根本原因の変異物）の間に改めて適用されている。すなわち、根本原因の唯一性を堅持する場合、多数の結果を生み出すことができないとする論法である。同様の記述は、仏教学匠ハリバドラ（Haribhadra, ca. 800）も *Abhisamayālamkāralokā* においてサーンキヤの名称を挙げつつ一因多果説批判を行っているが、その記述に関しては天野 1966, esp. 338 参照。

⁸⁰ サーンキヤの二元論的世界観においては行為主体をプラクリティないしその変異物（三グナ）に帰し（*guṇakartṛtva*, SK 20）、プルンヤは主体的な行為を離れた存在（*akartṛbhāva*, SK 19）とされる。そのため、顕現物と未顕現の存在が否定された以上、行為主体が存在しないことになるという帰結が導かれている。

- D
lDan kar ma sDe dge edition of the Tibetan Tripiṭaka.
dKar chag lDan kar ma. Die Lhan kar ma: Ein früher Katalog der ins Tibetische übersetzten buddhistischen Texte. Kritische Neuausgabe mit Einleitung und Materialien von Adelheid Herrmann-Pfandt. Österreichische Akademie der Wissenschaften, philosophisch-historische Klasse Denkschriften, Band 367; Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Nr. 59. Vienna: Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 2008.
- DANC
DhDhDG *Dvādaśāraṇayacakra* by Mallavādin. In *NĀA. Dharmadhātudarśanaḡīti* (Tib. *Chos kyi dbyings lta ba 'i glu*) by *Atiśa *Dīpaṃkaraśrījñāna. D no. 2314; P nos. 3153 (P₁), 5388 (P₂).
- DhDhDG_{DR} *Five Treatises of Ācārya Dīpaṃkaraśrījñāna.* Restored, translated and edited by Lobsang Dorjee Rabling. Supervisor, Ram Shankar Tripathi. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 41. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 1999.
- bsDus pa *Tshad ma rnam par nges pa 'i ṭi ka legs bshad bsdus pa* by gTsang nag pa brTson 'grus seng ge. *Chishikiron kecchaku kōchū Zenshaku yōshū* 知識論決状広註善釈要集. Ōtani Daigaku shozō Seizō zōgai bunken sōsho 大谷大学所蔵西蔵蔵外文献叢書. Kyoto: Rinsen Shoten, 1989.
- G *Gauḍapādabhāṣya. The Sāṃkhya-kārikā: Īśvara Kṛṣṇa's Memorable Verses on Sāṃkhya Philosophy with the Commentary of Gauḍapādācārya.* Critically edited with introduction, translation and notes by Har Dutt Sharma. Poona Oriental Series, no. 9. Poona: Oriental Book Agency, 1933.
- 'Grel pa la ldeb *Tshad ma rnam par nges pa 'i 'grel pa la ldeb* by Chu mig pa Seng ge dpal. In vol. 87 of *bKa' gdams gsung 'bum*, 11–308. [Chengdu]: Si khron Mi rigs dPe skrun khang, 2009.
- GTCM *Grub mtha' chen mo* by Bya 'Chad (Mchad) kha ba Ye shes rdo rje. In vol. 11 of *bKa' gdams gsung 'bum*, 225 (1a)–252 (14b). [Chengdu]: Si khron Mi rigs dPe skrun khang, 2006.
- GTD *Theg pa mtha' dag gi don gsal bar byed pa grub pa 'i mtha' rin po che 'i mdzod* by Klong chen Rab 'byams pa. In vol. 7 of *mdzod bdun* (A 'dzom par ma), 1b–206b. [A 'dzom chos sgar]: [dKar mdzes Bod rigs rang skyong khul, dPal yul rdzong, A 'dzom chos sgar], [1999?].
- GTD_A In vol. 2 of *Klong chen rab 'byams gsung 'bum: Mdzod bdun*, 1b–148b. [sDe ge]: [Sde dge par khan chen mo], [2000–2008].
- GTD_D In vol. 2 of *Mdzod bdun: The Famed Seven Treasuries of Vajrayāna Buddhist Philosophy*, 603 (1b)–1255 (327b). Gangtok: Sherab Gyaltzen and Khyentse Labrang, 1983.
- GTD_O *rGya gar chos 'byung* by Tāranātha. *Tāranāthae de doctrinae Buddhicae in India propagatione: Narratio; Contextum Tibeticum e codicibus Petropolitanis.* Edidit Antonius Schiefner. Petropol: Academia scientiarum Petropolitanae, 1868.
- rGyan gyi me tog *Tshad ma rnam nges rgyan gyi me tog* by bCom ldan rig pa 'i ral gri. In vol. 62 of *bKa' gdams gsung 'bum*, 449–744. [Chengdu]: Si khron Mi rigs dPe skrun khang, 2009.
- J *Jayamaṅgalā* by Śaṅkarārya. *Sāṃkhya-kārikā of Srimad Īśvarakṛiṣṇa with the Jayamaṅgalā of Śrī Śaṅkara.* Critically edited with an introduction by Satkāriśarmā Vaṅḡīya. 2nd ed. Chowkhamba Sanskrit Series, a Collection of Rare & Extraordinary Sanskrit Works, no. 296 (work no. 56). Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1970.
- 六一 JSSN *Jñānasārasamuccayanibandha* (Tib. *Ye shes snying po kun las btus pa zhes bya ba 'i bshad sbyar*) by Bodhibhadra. D no. 3852; P no. 5252.
- JSSN_{PD} *Ācārya Āryadeva's Jñānasārasamuccayaḡ with the Commentary of Ācārya Bodhibhadra.* Restored, translated and critically edited by Penpa Dorjee. Supervisor, Ram Shankar Tripathi. Bibliotheca Indo-Tibetica Series 67. Sarnath, Varanasi: Central Institute of Higher Tibetan Studies, 2008.
- mKhas 'jug dri lan *mKhas 'jug rnam bshad dri lan dang bcas pa* by Shākya mchog ldan. In vol. 24 of *The Complete Works (gsuñ 'bum) of Gser-mdog Pañ-chen Śākya-mchog-lDan*, 117–54. Thimphu: Kunzang Tobgey, 1975.
- KS **Kanakasaptati* (Chi. *Jin qishi lun* 金七十論). Translated by Paramārtha (Zhendi 真諦). T no. 2137, vol. 54, 1245–62.

- LAV *Āryalaṅkāvatāravṛtti* (Tib. 'Phags pa lang kar gshegs pa'i 'grel pa) by Jñānaśrībhadrā. D no. 4018; P no. 5519.
- LTSV *Laghīyastrayasvopajñāvṛtti* by Akalaṅka. In *Akalaṅka granthatrayam (svopajñāvivṛti-sahitam Laghīyastrayam, Nyāyavinīścayaḥ, Pramāṇasaṅgrahaś ca) of Śrī Bhattākalaṅkadeva*. Edited by Mahendra Kumar Śāstri. Siṅghī Jaina Series, no. 12. Ahmedabad: The Sañchālaka-Siṅghī Jaina Granthamālā, 1939.
- LV *Laghuvṛtti* by Somatilaka.
- LV_{ch} *Ṣaḍdarśhanasamuchchaya* by Shree Haribhadrasoori with a Commentary Called *Laghuvṛtti* by Manibhadra. Edited by Dāmodara Lāl Goswāmi. Chowkhambā Sanskrit Series, a Collection of Rare & Extraordinary Sanskrit Works, no. 95. Benares: Chokhambā Sanskrit Book-Depōt, 1905.
- LV_{mk} *Ṣaḍdarśanasamuccaya of Haribhadra Sūri with the Commentaries of Tarka-rahasya-dīpikā of Guṇaratna Sūri and Laghuvṛtti of Somatilaka Sūri and an Avacūrṇi*. Edited by Mahendra Kumar Jain. 2nd ed. Jñānapīṭha Mūrtidevī granthamālā, Sanskrit grantha, no. 36. New Delhi: Bharatiya Jnanpith Publication, 1981.
- M *Mātharavṛtti. Sāṃkhya-kārikā of Srimad Isvarakrisna with the Mātharavṛtti of Mātharacārya*. Edited by Viśṇu [sic] Prasād Śarmā. 2nd ed. Chowkhamba Sanskrit Series, a Collection of Rare & Extraordinary Sanskrit Works, no. 296 (work no. 56). Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1970.
- MABh *Madhyamakāvatārabhāṣya* (Tib. dBu ma la 'jug pa'i bshad pa) by Candrakīrti. D no. 3862; P no. 5263.
- MABh_{LVP} *Madhyamakāvatāra par Candrakīrti: Traduction tibétaine*. Publiée par Louis de la Vallée Poussin. Bibliotheca Buddhica 9. St.-Petersbourg: Imprimerie de l'Académie Impériale des Sciences, 1912.
- MAṬ *Madhyamakāvatāratīkā* (Tib. Dbu ma la 'jug pa'i 'grel bshad) by Jayānanda. D no. 3870; P no. 5271.
- MAV *Madhyamakālaṅkāravṛtti* (Tib. dBu ma'i rgyan gyi 'grel pa) by Śāntarakṣita. D no. 3885; P no. 5286.
- MAV₁ *In Madhyamakālaṅkāra*. Edited by Masamichi Ichigō. Kyoto: Buneido, 1985.
- MBh *Mahābhārata. The Mahābhārata*. For the first time critically edited by Vishnu S. Sukthankar (vols. 1, 3, 4), Franklin Edgerton (vol. 2), Raghu Vira (vol. 5), Sushil Kumar De (vols. 6, 8, 9), Shripad Krishna Belvalkar (vols. 7, 13–16, 19), Parashuram Lakshman Vaidya (vol. 10), Ranchandra Narayan Dandekar (vols. 11, 17), Hari Damodar Velankar (vol. 12), Vasudev Gopal Paranjpe (vol. 12), and Raghunath Damodar Karmarkar (vol. 18). 19 vols. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1933–1966.
- MDhś *Mānavadharmasāstra. Manu's Code of Law: A Critical Edition and Translation of the Mānavadharmasāstra [sic]*. By Patrick Olivelle. With the editorial assistance of Suman Olivelle. South Asia Research. Oxford: Oxford University Press, 2005.
- MHK *Madhyamakahṛdayakārikā* by Bhāviveka. *Madhyamakahṛdayam of Bhavya*. Edited by Chr. Lindtner. The Adyar Library Series 123. Adyar, Chennai: Adyar Library and Research Centre, 2001.
- MVy *Mahāvvyutpatti*.
- MVy_{IF} *A New Critical Edition of the Mahāvvyutpatti: Sanskrit-Tibetan-Mongolian Dictionary of Buddhist Terminology*. Edited by Yumiko Ishihama and Yoichi Fukuda. Studia Tibetica, no. 16; Materials for Tibetan-Mongolian Dictionaries, vol. 1. Tokyo: Toyo Bunko, 1989.
- MVy_s *Bon Zō Kan Wa yon'yaku taikō Hon'yaku myōgi daishū 梵藏漢和四訳対校翻訳名義大集*. By Sakaki Ryōzaburō 榎亮三郎. 2 vols. Kyoto: Shingonshū Kyōto Daigaku, 1916–1925.
- NĀA *Nyāyāgamānusāriṇī* by Siṃhasūri. *Dvādaśāraṇa nayacakram of Ācārya Śrī Mallavādi Kṣamāśramaṇa with the Commentary Nyāyāgamānusāriṇī of Śrī Siṃhasūri Gaṇi Vādi Kṣamāśramaṇa*. Edited with critical notes by Muni Jambuvijayaji. 2nd ed. 3 vols. Śrī Ātmānand Jain granthamālā, serial nos. 92, 94, 95. Bhavanagar: Sri Jain Atmanand Sabha, 1966–1988.

- NAṬ *Nyāyāvataṛaṭṭippana* by Devabhadra. *Nyāyāvataṛa of Siddhasena Divākara with the Vivṛti of Siddharṣigaṇi and with the Ṭippana of Devabhadra*. Edited by P. L. Vaidya. Bombay: Shri Jain Swetamber Conference, 1928.
- NAVV *Nyāyāvataṛavārttikavṛtti* by Śāntisūri. *Nyāyāvataṛavārttika-vṛtti of Śrī Śānti Sūri*. Critically edited by Dalasukha Malwaniya. Saraswati Oriental Research Sanskrit Series, no. 14. Ahmedabad: Saraswati Pustak Bhandar, 2002. Originally published as Singhi Jain Series, no. 20 (Mumbai: Bharatiya Vidya Bhavan, 1949).
- NBhū *Nyāyabhūṣana* by Bhāsarvajña.
- NBhū_{MS} Manuscript of the *Nyāyabhūṣana* preserved in the Śrī Hemacandrācārya Jaina Jñāna Maṃdira, Pāṭṇa. No. 10717. Devanāgarī. 149 folios.
- NBhū_v *Nyāyabhūṣanam: Śrīmadācāryabhāsarvajñapraṇītasya Nyāyasārasya svopajñam vyākhyānam*. Edited by Svāmī Yogīndrānanda. *Ṣaḍdarśanaprakāśanagranthamālā* 1. Vārāṇasī: Ṣaḍdarśana Prakāśana Pratiṣṭhāna, 1968.
- NBPS *Nyāyabindupūrvapakṣesaṃkṣipta* (Tib. *Rigs pa'i thigs pa'i phyogs snga ma mdor bsduṣ pa*) by Kamalaśīla. D no. 4232; P no. 5731.
- NBṬ *Nyāyabinduṭīkā* by Dharmottara. *Paṇḍita Durveka Miśra's Dharmottarapradīpa: Being a Sub-commentary on Dharmottara's Nyāyabinduṭīkā, a Commentary on Dharmakīrti's Nyāyabindu*. Deciphered and edited by Dalsukhbhai Malvania. Tibetan Sanskrit Works Series, vol. 2. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1955.
- NKC *Nyāyakumudacandra* by Prabhācandra. *Nyāya-kumuda-candra of ŚrīmatPrabhācandrācārya: A Commentary on Bhaṭṭākalaṅkadeva's Laghīyastraya*. Edited by Mahendra Kumar. 2nd ed. 2 vols. Sri Garib Dass Oriental Series, nos. 121, 122. Delhi: Sri Satguru Publications, 1991.
- NM *Nyāyamañjarī* by Jayanta.
- NM_k *The Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa*. Edited by Sūrya Nārāyana S'ukla. 2 vols. in 1. The Kashi Sanskrit Series (Haridās Sanskrit granthamālā), Nyāya Section, no. 15. Benares: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1936.
- NM_M *Nyāyamañjarī of Jayantabhaṭṭa with Ṭippanī—Nyāyasaurabha by the Editor*. Critically edited by K. S. Varadacharya. 2 vols. Oriental Research Institute Series, nos. 116, 139. Mysore: Oriental Research Institute, 1969–1983.
- NM_v *The Nyāyamañjarī of Jayanta Bhaṭṭa*. Edited by Gaṅgādhara Śāstrī Tailaṅga. Vol. 8. 2 parts. The Vizianagram Sanskrit Series, no. 10. Benares: E. J. Lazarus, 1895.
- NPVP *Nyāyapraveśakavṛttipañjikā* by Pārśvadevagaṇi. *Nyāyapraveśakaśāstra of Baudh [sic] Ācārya Dīrnāga (The Father of the Buddhist Logic): With the Commentary of Ācārya Hari-bhadrāsūri and with the Subcommentary of Pārśvadevagaṇi*. Critically edited by Muni Jambuvijaya. Delhi: Motilal Banarsidass, 2009.
- NV *Nyāyavārttika* by Uddyotakara.
- NV_c *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparya-ṭīkā & Viśvanātha's Vṛtti*. Critically edited with notes Taranatha Nyaya-Tarkatirtha (chapter I, section I), Amarendramohan Tarkatirtha and Hemantakumar Tarkatirtha (chapters I-ii–[III]), and Hemantakumar Tarkatirtha (chapter 5). 2 vols. Rinsen Sanskrit Text Series 1. Kyoto: Rinsen Shoten, 1982. Originally published as The Calcutta Sanskrit Series, nos. 18, 29 (Calcutta: Metropolitan Printing and Publishing House, 1936–1944).
- NV_{Th} *Nyāyabhāṣyavārttika of Bhāradvāja Uddyotakara*. Edited by Anantalal Thakur. *Nyāyacaturgranthikā*, vol. 2. New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1997.
- NVinV *Nyāyaviniścayavivaraṇa* by Vādirāja. *Nyāyaviniścaya-vivaraṇa of Śrī Vādirāja Sūri, the Sanskrit Commentary on Bhaṭṭa Akalaṅkadeva's Nyāyaviniścaya*. Edited by Mahendra Kumar Jain. 2nd ed. 2 vols. Moortidevi Jain granthamala, Sanskrit grantha, nos. 3, 12. New Delhi: Bharatiya Jnanpith, 2000.
- NVTṬ *Nyāyavārttikatātparyaṭīkā* by Vācaspati Miśra.

- NVTTC *Nyāyadarśanam with Vātsyāyana's Bhāṣya, Uddyotakara's Vārttika, Vācaspati Miśra's Tātparya-
 ṭikā & Viśvanātha's Vṛtti. Critically edited with notes Taranatha Nyaya-Tarkatirtha
 (chapter I, section I), Amarendramohan Tarkatirtha and Hemantakumar Tarkatirtha
 (chapters I-ii-[III]), and Hemantakumar Tarkatirtha (chapter 5). 2 vols. Rinsen Sanskrit
 Text Series 1. Kyoto: Rinsen Shoten, 1982. Originally published as The Calcutta Sanskrit
 Series, nos. 18, 29 (Calcutta: Metropolitan Printing and Publishing House, 1936–1944).*
- NVTTh *Nyāyavārttikatātparyaṭikā of Vācaspatimiśra. Edited by Anantalal Thakur. Nyāya-
 caturgranthikā, vol. 3. New Delhi: Indian Council of Philosophical Research, 1996.*
- P *Peking edition of the Tibetan Tripiṭaka.*
- PhPGT *Phya pa grub mtha' (bDe bar gshegs pa dang phyi rol pa'i gzhung rnam par 'byed pa) by
 Phya/Phywa pa Chos kyi seng ge. In vol. 9 of bKa' gdams gsung 'bum, 7 (1a)–72 (33b).
 [Chengdu]: Si khron Mi rigs dPe skrun khang, 2006.*
- PKM *Prameyakamalamārtaṇḍa by Prabhācandra. Prameyakamala-mārtaṇḍa by Shri Prabha
 Chandra (A Commentary on Shri Manik Nandi's Pareeksha mukh sutra). Edited with in-
 troduction, indexes etc. by Mahendra Kumar Shastri. 3rd ed. Sri Garib Dass Oriental
 Series, no. 94. Delhi: Sri Satguru Publications, 1990.*
- PP *Prajñāpradīpa (Tib. Shes rab sgron ma) by Bhāviveka. D no. 3853; P no. 5253.*
- PPra *Prakīrṇakaprakāśa by Helārāja. Vākyaṇḍīya of Bharṭṛhari with the Commentary of
 Helārāja, Kāṇḍ[a] III. Critically edited by K. A. Subramania Iyer. 2 parts. Deccan College
 Monograph Series 21. Poona: Deccan College, 1963–1973.*
- PPT *Prajñāpradīpaṭikā (Tib. Shes rab sgron ma rgya cher 'grel pa) by Avalokitavrata. D no.
 3859; P no. 5259.*
- PS *Pramāṇasamuccaya by Dignāga.*
- PS_K *Kanakavarman's and Dad pa'i shes rab's Tibetan translation of the Pramāṇasamuccaya,
 Tshad ma kun las btus pa. P no. 5700.*
- PS_V *Vasudhararakṣita's and Seng rgyal's Tibetan translation of the Pramāṇasamuccaya,
 Tshad ma kun las btus pa. D no. 4203.*
- PST *Pramāṇasamuccayaṭikā (Viśālāmalavati) by Jinendrabuddhi.
 Chapter 2 (Svārthānumāna). Jinendrabuddhi's Viśālāmalavati Pramāṇasamuccayaṭikā.
 Edited by Horst Lasic, Helmut Krasser, and Ernst Steinkellner. Part 1. Sanskrit Texts
 from the Tibetan Autonomous Region, no. 15/1. Beijing: China Tibetology Publishing
 House, 2012.*
- PST_{Tib} *Tibetan translation of the Pramāṇasamuccayaṭikā, Yangs pa dang dri ma med pa ldan pa
 shes bya ba Tshad ma kun las btus pa'i 'grel bshad. D no. 4268; P no. 5766.*
- PSV *Pramāṇasamuccayavṛtti by Dignāga.
 Restored Sanskrit text: Chapter 5 (Anyāpoha). In part 1 of Dignāga's Philosophy of Lan-
 guage: Pramāṇasamuccayavṛtti V on anyāpoha. By Ole Holten Pind. Edited by Ernst
 Steinkellner. 2 parts. Österreichische Akademie der Wissenschaften, philosophisch-
 historische Klasse Sitzungsberichte, 871. Band; Beiträge zur Kultur- und Geistesge-
 schichte Asiens, Nr. 92. Vienna: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissen-
 schaften, 2015.*
- PSV_{TibH} *“The Pramāṇasamuccayavṛtti of Dignāga with Jinendrabuddhi's Commentary, Chap-
 ter Five: Anyāpoha-parīkṣā, Tibetan Text with Sanskrit Fragments.” Edited by Masaaki
 Hattori. Kyōto Daigaku Bungakubu kenkyū kiyō 京都大学文学部研究紀要 21 (1982):
 101–224.*
- PSV_{TibK} *Kanakavarman's and Dad pa'i shes rab's Tibetan translation of the Pramāṇasamuccayavṛtti,
 Tshad ma kun las btus pa'i 'grel pa. P no. 5702.*
- PSV_{TibV} *Vasudhararakṣita's and Seng rgyal's Tibetan translation of the Pramāṇasamuccayavṛtti,
 Tshad ma kun las btus pa'i 'grel pa. D no. 4204; P no. 5701.*

- PVA *Pramāṇavārttikālamkāra* by Prajñākaragupta. *Pramāṇavārttikabhāṣyam, or Vārttikālankārah of Prajñākaragupta (Being a Commentary on Dharmakīrti's Pramāṇavārttikam)*. Deciphered and edited by Rāhula Sāṅkṛityāyana. Tibetan Sanskrit Works Series, vol. 1. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1953.
- PVA_{Tib} Tibetan translation of the *Pramāṇavārttikālamkāra*, *Tshad ma rnam 'grel gyi rgyan*. D no. 4221; P no. 5719.
- PVin *Pramāṇaviniścaya* by Dharmakīrti. Chapter 1. *Dharmakīrti's Pramāṇaviniścaya*. Critically edited by Ernst Steinkellner. Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, no. 2. Beijing: China Tibetology Publishing House, 2007.
- PVinṬ *Pramāṇaviniścayaṭikā* (Tib. *Tshad ma rnam par nges pa'i 'grel bshad*) by Dharmottara. D no. 4229; P no. 5727.
- PYŚ *Pātañjalayogaśāstra* attributed to Vyāsa.
 PYŚ_A In TV_A.
 PYŚ_B In TV_B.
 PYŚ_M *Samādhipāda: Das erste Kapitel des Pātañjalayogaśāstra zum ersten Mal kritisch ediert*. Von Philipp André Maas. Indologica Halensis; Geisteskultur Indiens; Texte und Studien, Band 9. Aachen: Shaker Verlag, 2006.
- Rigs gter *Tshad ma rigs pa'i gter* by Sa skya paṅḍita Kun dga' rgyal mtshan. In vol. 5 (The Complete Works of Paṅḍita Kun dga' rgyal mtshan) of *The Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect of the Tibetan Buddhism*, compiled by Bsod nams Rgya mtsho, 167.2 (26a)–264.2 (220a). Bibliotheca Tibetica I-5. Tokyo: The Toyo Bunko, 1968.
- Rin po che'i sning po *Tshad ma rnam 'grel gsal bar byed pa'i zin bris legs par bshad pa rin po che'i sning po* (Anonymous). In vol. 88 of *bKa' gdams gsung 'bum*, 7–220. [Chengdu]: Si khron Mi rigs dPe skrun khang, 2009.
- SK *Sāṃkhyakārikā* by Īśvarakṛṣṇa. In Appendix A to “Koten Sāṅkiya taikei tenkaishi-ron: Yukutidīpikā ni yoru fukko to kaishin” 古典サーンキヤ体系展開史論: 『ユクテイデイベカー』による復古と改新, by Kondō Hayato 近藤隼人. PhD diss., The University of Tokyo, 2017.
- SPYHS **Skhalitapramardanayuktihetusiddhi* (Tib. 'Khrul pa bzlog pa'i rigs pa gtan tshigs grub pa) attributed to Āryadeva. D no. 3847; P no. 5247.
- SS *Sāṃkhyasūtra* attributed to Kapila. In *The Sāṃkhya-pravacana-bhāṣya, or Commentary on the Exposition of the Sāṅkhya Philosophy by Vijñānabhikṣu*. Edited by Richard Garbe. Harvard Oriental Series, vol. 2. Cambridge, MA: Harvard University, 1895.
- SŚP *Satyāsānaaparīkṣā* by Vidyānandin. Ācārya Vidyānandīkṛta *Satyāsāsana-parīkṣā: Hindī prastāvanā tathā pariśiṣṭa sahita*. Edited by Gokulacandra Jaina. Bhāratīya Jñānapīṭha Mūrtidevī Jaina granthamālā, saṃskṛta granthāṅka 30. Kalakattā: Bhāratīya Jñānapīṭha Prakāśana, 1964.
- SSP *Sarvasiddhāntapraveśaka. Cirantanajainamunivaraṇāṭaḥ Sarvasiddhāntapraveśakaḥ*. Edited by Muni Jambūvijaya. Bambaī: Jainasāhityavikāśamaṇḍala, 1964.
- SSPra *Sarvajñasiddhiprakaraṇa* by Haribhadra. In *Śrīharibhadrasūgrīngraṇhasaṅgrahaḥ*, 119a–128b. Ahammadāvāda: Śrījainagranthaprakāśakasabhā, 1939.
- SSS *Sarvasiddhāntasaṅgraha* attributed to Śaṅkara. *The Sarva-siddhānta-saṅgraha of Śaṅkarācārya*. Edited and translated by M. Raṅgācārya. New Delhi: Ajay Book Service, 1983.
- ŚU *Śvetāśvataraopaniṣad*. In “Die Śvetāśvatara-Upaniṣad: Edition und Übersetzung von Adhyāya II–III (Studien zu den ‘mittleren’ Upaniṣads II–2. Teil).” By Thomas Oberlies. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* 40 (1996): 123–60; “Die Śvetāśvatara-Upaniṣad: Edition und Übersetzung von Adhyāya IV–VI (Studien zu den ‘mittleren’ Upaniṣads II–3. Teil).” By Thomas Oberlies. *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* 42 (1998): 77–138.

- ŚV *Ślokovārttika* by Kumārila Bhaṭṭa. *The Mīmāṃsā-s'loka-vārtika of Kumārila Bhatta with the Commentary Called Nyāyaratnākara by Pārtha Sārathi Miśra*. Edited by Rāmas'āstri Tailanga. 10 fascs. The Chowkhambā Sanskrit Series, a Collection of Rare & Extraordinary Sanskrit Works, nos. 11, 12, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 24. Benares: Chowkhambā Sanskrit Series Office, 1898–1899.
- SVR *Syādvādaratnākara* by Vādideva. *Śrīmadvādidevasūviracitaḥ Pramāṇanayatattvālokalānkāraḥ tadvyākhyā ca Syādvādaratnākaraḥ*. Edited by M. L. Osavāla. 2 vols. Dillī: Bhāratiya Buka Kārporeśana, 1988.
- ŚVS *Śāstravārttāsamuccaya* by Haribhadra. *Śāstra vārtā=samuchchaya by Śrī Haribhadra Sūri with His Own Commentary Named Dikpradā*. Bombay: printed at the Nirnaya-Sagar Press, 1929.
- SVṬ *Siddhivinīścayaṭīkā* by Anantavīrya. *Siddhivinīschayatika of Shri Anantaviryacharya, the Commentary on Siddhivinīschaya and Its Vritti of Bhatta Akalanka Deva*. Edited with “Aloka” and introduction etc. by Mahendrakumar Jain. 2 vols. Jñānapītha Murtidevī Jaina granthamālā, Sanskrit grantha, nos. 22, 23. Kāshī: Bhāratiya Jñānapītha, 1959.
- SyM *Syādvādamañjarī* by Malliṣeṇa.
 SyM_{Bh} *Kalikālasarvajña Śrīhemacandrasūrisvarajī viracita Anyayogavyavachedadvātriṃśikā, ṭīkāgrantha Tārkikaratna Śrī Malliṣeṇasūrijī viracita Syādvādamañjarī (Gurjara bhāvānuvāda yuta)*. Translated by Bhuvanabhānu Sūri, Jayaśekhara Sūri, and Ajitāśekhara Vijaya. Muṃbāi: Śrī Ārādhanā Bhavana Jaina Pauśadhasālā, 2001/2002.
 SyM_{BSP} *Syādvādamañjarī of Mallisena with the Anyayoga-vyavacheda-dvātriṃśikā of Hemacandra*. Edited with introduction, notes and appendices by A. B. Dhruva. Bombay Sanskrit and Prakrit Series, no. 83. Poona: Bhandarkar Oriental Research Institute, 1933.
 SyM_J *Kalikālasarvajñāśrīhemacandrācāryaviracitānyayogavyavachedadvātriṃśikāstāvanaṭīkā Śrīmaliṣeṇasūripraṇītā Syādvādamañjarī*. Edited by Jagadīśacandra Jaina. 3. āvṛttiḥ. Śrī-madrājacandrajainasāśtramālā. Āṇaṃḍa, Gujarāta: Rāvajībhāi Chaganabhāi Desāi, Paramaśrutaprabhāvākamaṇḍala, 1970.
 SyM_{ML} *Syādvādakalpadrumaśrīmaliṣeṇasūripraṇītā Syādvādamañjarī*. Pradhāna saṃpādaka, Motī-lāla Lādhājī; saṃpādaka, Praśamarativijayah. Śrī Vijayamahodayasūrigramṭhamālā 1. Pūnā: Pravacana Prakāśana, 2002. First published 1925/1926.
- TĀ See TĀBh.
- TĀBh *Taittirīyāranyakabhāṣya* by Sāyaṇa. In *Kṛṣṇayajurvedīyaṃ Taittirīyāranyakam: Śrīmat-sāyaṇācāryaviracitabhāṣyasametam (sapariśiṣṭam)*. Edited by Ve. Śā. Rā. Rā. “Bābāśāstrī Phāḍake.” 2 vols. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvalīḥ, granthāhīkaḥ 36. Puṇyākhyapattana: Ānandāśramamudraṇālaya, 1897–1898.
- TĀV *Tantrāloka* by Jayaratha. *The Tantrāloka of Abhinava Gupta with Commentary by Rājānaka Jayaratha*. Edited by Mukund Rām Shāstrī (vol. 1) and Madhusudan Kaul Shāstrī (vols. 2–12). 12 vols. Kashmir Series of Texts and Studies, nos. 23, 28, 29, 30, 35, 36, 41, 47, 52, 57, 58, 59. Allahabad: printed at the Indian Press (vols. 1, 5, 6); Bombay: printed at the Shri Venkateshvar Steam Press (vol. 2); Bombay: printed at the “Tattva-Vivechaka” Press (vols. 3, 4, 8, 9); Bombay: printed at the “Nirnaya-Sagar” Press (vols. 7, 10, 11, 12), 1918–1938.
- TBV *Tattvabodhavidhāyinī* by Abhayadeva. *Saṃmatitarka-prakaraṇa of Siddhasena Divākara with Abhayadevasūri's Commentary, Tattvabodhavidhāyinī*. Edited by Sukhalāla Saṃghavi. 2 vols. Rinsen Buddhist Text Series 6. Kyoto: Rinsen Shoten, 1984. Originally published as Gujarāta Purātattvamandira granthāvalī 10, 16, 18, 19, 21 (Amadāvāda: Gujarātapurātattvamandira, 1924–1931).
- TJ *Tarkajvālā* (Tib. *Dbu ma'i snying po'i 'grel pa rtog ge 'bar ba*) attributed to Bhāviveka. D no. 3856; P no. 5256.
- TJ_{He} In vol. 2 of Zhongguan xin lun *ji qi guzhu Sizeyan yanjiu* 《中觀心論》及其古注《思 挾焰》研究. By He Huanhuan 何歡歡. Zhongguo Shehui Kexueyuan wenku, zhexue zongjiao yanjiu xilie 中国社会科学院文庫·哲学宗教研究系列. Beijing: Zhongguo Shehui Kexue Chubanshe, 2013.

- TJ_N “The Sanskrit Text of the Madhyamaka-hṛdaya-kārikā (Dbu-maḥi sñin-poḥi tshig-leḥur-byas-pa) and the Tibetan Text of the Madhyamaka-hṛdaya-vṛtti-tarkajvālā (Dbu-maḥi sñin-poḥi ḥgrel-pa rtog-ge ḥbar-ba) saṣṭhaḥ paricchedaḥ/ Sārnkhyatattvāvatāraḥ// (Part 1. pūrvapakṣa).” Edited by Naomichi Nakada. *Tsurumi Joshi Daigaku Tanki Daigakubu kiyō* 鶴見女子大学短期大学部紀要 6 (1972): 145–55.
- TK
TK_J *Tattvakaumudī* by Vācaspati Mīśra.
An English Translation with the Sanskrit Text of the Tattva-kaumudī (Sānkhya) of Vāchaspati Mīśra. By Gangānātha Jhā. [Bombay]: Tookaram Tatya, 1896.
- TK_S *Vācaspatimīśras Tattvakaumudī: Ein Beitrag zur Textkritik bei kontaminierter Überlieferung*. Von Srinivasa Ayya Srinivasan. Alt- und neu-indische Studien 12. Hamburg: Cram, de Gruyter, 1967.
- TR
TR_S *Tarkarahasya*. Edited by Paramanandan Shastri. Tibetan Sanskrit Works Series, no. 20. Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1979.
- TR_V In *Bukkyō chishikiron no genten kenkyū: Yugaron inmyō, Darumottara tippanaka, Taruka rahasuya* 仏教知識論の原典研究: 瑜伽論因明、ダルモツタラティッパナカ、タルカラハスヤ, by Yaita Hideomi 矢板秀臣, 264–407. Monogurafu shirizu モノグラフ・シリーズ IV. Chiba: Naritasan Shinshōji, 2005.
- TRD
TRD_{BI} *Tarkarahasyadīpikā* by Guṇaratna.
Ṣaḍḍarśana-samuccaya by Haribhadra with Guṇaratna’s Commentary *Tarkarahasya-dīpikā*. Edited by Luigi Sualì. 3 fascs. Bibliotheca Indica, a Collection of Oriental Works, n.s., nos. 1128, 1151, 1401. Calcutta: Asiatic Society, 1905–1914.
- TRD_{MK} *Ṣaḍḍarśanasamuccaya* of Haribhadra Sūri with the Commentaries of Tarka-rahasya-dīpikā of Guṇaratna Sūri and Laghuvṛtti of Somatilaka Sūri and an Avacūrṇi. Edited by Mahendra Kumar Jain. 2nd ed. Jñānapīṭha Mūrtidevī granthamālā, Sanskrit grantha, no. 36. New Delhi: Bharatiya Jnanpith Publication, 1981.
- TS
Tshul gsum pa *Tattvasaṃgraha* by Śāntarakṣita. In *TSP*.
Tshul gsum pa’i rtags shes kyang brjod pa la mi mkhas pa’i byis pa la bstan par bya ba’i phyir tshul gsum pa’i rtags ston par byed pa’i mtshan nyid gzhan gyi don gyi rjes su dpag pa’i skabs su bab nas bshad pa by Dharmottara. D no. 4227.
- TSP
TSP_{BBS} *Tattvasaṃgrahapañjikā* by Kamalaśīla.
Tattvasaṃgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Commentary “Pañjikā” of Shri Kamalashīla. Critically edited by Swami Dwarikadas Shastri. 2 vols. Bauddha Bharati Series 1, 2. Varanasi: Bauddha Bharati, 1968.
- TSP_{GOS} *Tattvasaṃgraha of Śāntarakṣita with the Commentary of Kamalaśīla*. Edited by Embar Krishnamacharya. 2 vols. Gaekwad’s Oriental Series, nos. 30, 31. Baroda: Central Library, 1926.
- TSP_{MSJ} Manuscript of the *Tattvasaṃgraha* preserved in Jaina Jñāna Bhaṇḍāra, Jaisalamera. No. 378. Devanāgarī. 313 folios.
- TSP_{MS P} Manuscript of the *Tattvasaṃgraha* preserved in the Śrī Hemacandrācārya Jaina Jñāna Maṃdira, Pāṭaṇa. No. 6680. Devanāgarī. 260 folios.
- TSP_{Tib} Tibetan translation of the *Tattvasaṃgrahapañjikā*, *De kho na nyid bsdu pa’i dka’ ’grel*. D no. 4267; P no. 5765.
- 五
五
TSV *Tattvasamāsasūtravṛtti*. In *Sāṃkhya-saṅgraha: A Collection of Nine Works on the Sāṃkhya Philosophy*. Edited by Vindhyaśvarī Prasāda Dvivedi. 2nd ed. Chowkhamba Sanskrit Series, a Collection of Rare & Extraordinary Sanskrit Works, nos. 246, 286 (work no. 50). Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1969.
- TUS
TUS_F *Tattvopaplavasīmha* by Jayarāśi Bhaṭṭa.
In *Perception, Knowledge and Disbelief: A Study of Jayarāśi’s Scepticism*. By Eli Franco. Alt- und neu-indische Studien 35. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1987.
- TUS_{SP} *Tattvopaplavasīmha* of Jayarāśi Bhaṭṭa. Edited with an introduction and indices by Sukhlalji Sanghavi and Rasiklal C. Parikh. Gaekwad’s Oriental Series, no. 87. Baroda: Oriental Institute, 1940.

- TV Tattvavaiśārādī by Vācaspati Mīśra.
 TV_Ā Vācaspatimīśraviracitaṭīkāsaṃvalitavyāśabhāṣyasametāni Pātañjalayogasūtrāni. Edited by Kāśīnātha Śāstrī Āgāśe. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ, granthāṅkaḥ 47. Puṇyākhyapattana: Ānandāśramamudraṅālaya, 1904.
 TV_B Pātañjalasūtrāni with the Scholium of Vyāsa and the Commentary of Vāchaspati. Edited by Rājārām Shāstrī Bodas. Bombay Sanskrit Series, no. 46. Bombay: Government Central Book Depôt, 1892.
 TYD Tattvayāthārthyadīpana by Bhāvāgaṇeśa. In Sāṃkhya-saṅgraha: A Collection of Nine Works on the Sāṃkhya Philosophy. Edited by Vindhyeśvarī Prasāda Dvivedī. 2nd ed. Chowkhamba Sanskrit Series, a Collection of Rare & Extraordinary Sanskrit Works, nos. 246, 286 (work no. 50). Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1969.
 V₁ Sāṃkhyasaptativṛtti. Sāṃkhya-saptati-vṛtti (V₁). Edited by Esther A. Solomon. Ahmedabad: Gujarat University, 1973.
 V₂ Sāṃkhyavṛtti.
 V_{2N} Sāṃkhyavṛttiḥ. Edited by Naomichi Nakada. Tokyo: Hokuseido Press, 1978.
 V_{2S} Sāṃkhya-vṛtti (V₂). Edited by Esther A. Solomon. Ahmedabad: Gujarat University, 1973.
 VST₁ Viśeṣastavaṭīkā (Tib. Khyad par du 'phags pa'i bstod pa'i rgya cher bshad pa) by Prajñāvarman. D no. 1110; P no. 2002.
 VST₅ Der Lobpreis der Vorzüglichkeit des Buddha: Udbhaṭasiddhasvāmins Viśeṣastava mit Prajñāvarmans Kommentar. Nach dem tibetischen Tanjur herausgegeben und übersetzt von Johannes Schneider. Indica et Tibetica, Band 23. Bonn: Indica et Tibetica Verlag, 1993.
 YD Yuktidīpikā. Yuktidīpikā: The Most Significant Commentary on the Sāṃkhyakārikā. Critically edited by Albrecht Wezler and Shujun Motegi. Vol. 1. Alt- und neu-indische Studien 44. Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1998.
 YS Yogasūtra attributed to Patañjali. In PYŚ.
 YST Aparārka's (alias Aparāditya's) commentary on the Yājñavalkyasmṛti. Aparārkāparābhīdhāparādityaviracitaṭīkāsaṃmetā Yājñavalkyasmṛtiḥ. Edited by Ānandāśramasthapaṇḍitaś. 2 vols. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ, granthāṅkaḥ 46. Puṇyākhyapattana: Ānandāśramamudraṅālaya, 1903–1904.
 ZL gZhung's lugs legs par bshad pa attributed to Sa skya paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan.
 ZL_{BT} In vol. 5 (The Complete Works of Paṇḍita Kun dga' rgyal mtshan) of The Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect of the Tibetan Buddhism, compiled by Bsod nams Rgya mtsho, 61.3 (123a)–77.1 (153a). Bibliotheca Tibetica I-5. Tokyo: The Toyo Bunko, 1968.
 ZL_K In vol. tsa (Sa paṇ Kun dga' rgyal mtshan gyi gsung rab, glegs bam dang po) of Sa skya gong ma rnam lnga'i bka' 'bum, 225–82. Krung hwa'i Bod yig rig mdzod chen mo. [Beijing]: Krung go'i Bod rig pa Dpe skrun khang, 2015.

〈参考文献〉

- Almogi, Orna. 2010. “Māyopamādvayavāda versus Sarvadharmāpratiṣṭhānavāda: A Late Indian Subclassification of Madhyamaka and Its Recension in Tibet.” *Kokusai Bukkyōgaku Daigakuin Daigaku kenkyū kiyō* 国際仏教学大学院大学研究紀要 14:135–212.
 Bhattacharyya, B. 1926. Forward to vol. 1 of *Tattvasaṅgraha of Śāntarākṣita with the Commentary of Kamalaśīla*, edited by Embar Krishnamacharya, vii–clvii. Gaekwad's Oriental Series, no. 30. Baroda: Central Library.
 Bronkhorst, Johannes. 1981. “Yoga and Seśvara Sāṃkhya.” *Journal of Indian Philosophy* 9 (3): 309–20.
 Chakravartī, Pulinbihari. 1951. *Origin and Development of the Sāṃkhya System of Thought*. Calcutta Sanskrit Series, no. 30. Calcutta: Metropolitan Printing and Publishing House.
 Dave, K. N. 1985. *Birds in Sanskrit Literature*. Delhi: Motilal Banarsidass.
 Drefyus, George. 2007. “Is Perception Intentional? A Preliminary Exploration of Intentionality in Dharmakīrti.”

- In part 1 of *Pramāṇākīrtiḥ: Papers Dedicated to Ernst Steinkellner on the Occasion of His 70th Birthday*, edited by Birgit Kellner et al., 95–113. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 70.1. Vienna: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.
- Edgerton, Franklin. 1965. *The Beginnings of Indian Philosophy: Selections from the Rig Veda, Atharva Veda, Upaniṣads, and Mahābhārata*. UNESCO Collection of Representative Works—Indian Series. London: George Allen & Unwin.
- Franco, Eli. 1987. *Perception, Knowledge and Disbelief: A Study of Jayarāsi's Scepticism*. Alt- und neu-indische Studien 35. Stuttgart: Franz Steiner Verlag.
- Frauwallner, E[rich]. 1927. "Zur Elementenlehre des Sāṃkhya." *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 34 (1/2): 1–5.
- . 1957. "Zu den buddhistischen Texten in der Zeit Khri-sron-lde-btsan's." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens und Archiv für indische Philosophie* 1:95–103.
- . 1958. "Die Erkenntnislehre des klassischen Sāṃkhya-Systems." *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ost-Asiens* 2:84–139.
- Furusaka, Koichi. 1998. "Criticism on Sāṃkhya in the *Ārya-lāṅkāvatāra-vṛtti*." *Indogaku Bukkyōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 47 (1): 499–493.
- Gerschheimer, Gerdi. 2007. "Les 'Six doctrines de speculation' (*ṣaṭtarkī*): Sur la catégorisation variable des systèmes philosophiques dans l'Inde classique." In *Expanding and Merging Horizons: Contributions to South Asian and Cross-Cultural Studies in Commemoration of Wilhelm Halbfass*, edited by Karin Preisendanz, 239–58. Österreichische Akademie der Wissenschaften, philosophisch-historische Klasse Denkschriften, 351. Band; Beiträge zur Kultur- und Geistesgeschichte Asiens, Nr. 53. Vienna: Austrian Academy of Sciences Press.
- Gopal, Lallanji. 2000. *Retrieving Sāṃkhya History: An Ascent from Dawn to Meridian*. Contemporary Researches in Hindu Philosophy and Religion, no. 11. New Delhi: D.K. Printworld.
- Gotō, Toshifumi. 2000. "Zur Sprache der Śvetāśvatara-Upaniṣad." In *Vividharatnakaraṇḍaka: Festgabe für Adelheid Mette*, herausgegeben von Christine Chojnacki, Jens-Uwe Hartmann, und Volker M. Tschannerl, 259–81. Indica et Tibetica: Monographien zu den Sprachen und Literaturen des indo-tibetischen Kulturraumes, Band 37. Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag.
- Granoff, Phyllis. 1999. "Refutation as Commentary: Medieval Jain Arguments against Sāṃkhya." *Asiatische Studien* 53 (3): 579–91.
- Hattori, Masaaki. 1999. "On Seśvara-Sāṃkhya." *Asiatische Studien* 53 (3): 609–18.
- Hugon, Pascale. 2008. *Trésors du raisonnement: Sa skya Paṇḍita et ses prédécesseurs tibétains sur les modes de fonctionnement de la pensée et le fondement de l'inférence; Édition et traduction annotée du quatrième chapitre et d'une section du dixième chapitre du Tshad ma rigs pa'i gter*. 2 vols. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 69. Vienna: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.
- . 2012. "Inherited Opponents and New Opponents: A Look at Informal Argumentation in the *Tshad ma rigs gter*." *Zangzue xuekan* 藏学学刊 8:26–57.
- . 2016. "Can One Be a Mādhyamika, a Crypto-Vaiḥṣika, and a Faithful Interpreter of Dharmakīrti? On Phya pa Chos kyi seng ge's Doxographical Divisions and His Own Philosophical Standpoint." *Zangzue xuekan* 藏学学刊 15:51–153.
- Isaacson, Harunaga, and Francesco Sferra, eds. 2014. *The Sekanirdeśa of Maitreyanātha (Advayavajra) with the Sekanirdeśapañjikā of Rāmapāla: Critical Edition of the Sanskrit and Tibetan Texts with English Translation and Reproductions of the MSS*. With contributions by Klaus-Dieter Mathes and Marco Passavanti. Serie Orientale Roma, vol. CVII. Manuscripta Buddhica 2. Napoli: Università Degli Studi di Napoli "L'Orientale."

- Jackson, David P. 1985. "Two Grub mtha' Treatises of Sa-skya Pandita—One Lost and One Forged." *The Tibet Journal* 10 (1): 3–13.
- . 1987. *The Entrance Gate for the Wise (Section III): Sa-skya Paṇḍita on Indian and Tibetan Traditions of Pramāṇa and Philosophical Debate*. 2 vols. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 17. Vienna: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien.
- Jacobsen, Knut A. 2008. *Kapila: Founder of Sāṃkhya and Avatāra of Viṣṇu (with a Translation of Kapilāsuriṣaṃvāda)*. New Delhi: Munshiram Manoharlal Publishers.
- Kajiyama, Yuichi. 1965. "Controversy between the sākāra- and nirākāra-vādins of the Yogācāra School—Some Materials." *Indogaku Bukkyōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 14 (1): 429–418.
- Kano, Kazuo. 2016. "The Transmission of Sanskrit Manuscripts from India to Tibet: The Case of a Manuscript Collection in the Possession of Atiśa Dīpaṃkaraśrījñāna (980–1054)." In *Transfer of Buddhism Across Central Asian Networks (7th to 13th Centuries)*, edited by Carmen Meinert, 82–117. Dynamics in the History of Religions, vol. 8. Leiden: Brill.
- Kapstein, Matthew T. 2009. "Preliminary Remarks on the Grub mtha' chen mo of Bya 'Chad kha ba Ye shes rdo rje." In *Sanskrit Manuscripts in China: Proceedings of a Panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies, October 13 to 17*, edited by Ernst Steinkellner in cooperation with Duan Qing and Helmut Krasser, 137–52. Beijing: China Tibetology Publishing House.
- Karttunen, Klaus. 2000. "'Sparrows in Love': The Display and Pairing of Birds in Sanskrit Literature." In "On the Understanding of Other Cultures: Proceedings of the International Conference on Sanskrit and Related Studies to Commemorate the Centenary of the Birth of Stanisław Schayer (1899–1941), Warsaw University, Poland, October 7–10, 1999," edited by Piotr Balcerowicz and Marek Mejer. Special issue, *Studia Indologiczne* 7:199–207.
- Kellner, Bilgit. 2016. "The Concept of ākāra in Early Sāṃkhya Epistemology: An Evaluation of Fragments." In *Sanskrit Manuscripts in China II: Proceedings of a Panel at the 2012 Beijing Seminar on Tibetan Studies, August 1 to 5*, edited by Horst Lasic and Xuezhu Li, 127–53. Beijing: China Tibetology Publishing House.
- Kondo Hayato. 2010. "A Comparative Study of Characteristics of the Perception Theories in the Yuktidīpikā and the Yogasūtrabhāṣya." *Indogaku Bukkyōgaku kenkyū* 印度学仏教学研究 58 (3): 1134–38.
- van der Kuip, Leonard W. J. 1985. "On the Authorship of the Gzhung-lugs legs-par bshad-pa Attributed to Sa-skya Paṇḍita." *Journal of the Nepal Research Centre* 7:75–86.
- Larson, Gerald James, and Ram Shankar Bhattacharya, eds. 1987. *Sāṃkhya: A Dualist Tradition in Indian Philosophy*. Encyclopedia of Indian Philosophies, vol. 4. Delhi: Motilal Banarsidass.
- Liebenthal, Walter. 1934. *Satkārya in der Darstellung seiner buddhistischen Gegner: Die prakṛti-pariṣā im Tattva-saṃgraha des Śāntaraṣita zusammen mit der Pañjikā des Kamalaśīla*. Beiträge zur indischen Sprachwissenschaft und Religionsgeschichte, Heft 9. Stuttgart: Verlag von W. Kohlhammer.
- Mejer, Marek. 1999. "'There Is No Self' (Nātmāsti)—Some Observations from Vasubandhu's Abhidharmakośa and the Yuktidīpikā." *Communication & Cognition* 32 (1/2): 97–126.
- Mimaki, Katsumi. 1976. *La réfutation bouddhique de la permanence des choses (Sthirasiddhidūṣaṇa) et la preuve de la momentanéité des choses (Kṣaṇabhaṅgasiddhi)*. Publications de l'Institut de civilisation indienne, série in-8°, fasc. 41. Paris: Institut de civilisation indienne.
- . 1982. *Blo gsal grub mtha': Chapitres IX (Vaibhāṣika) et XI (Yogācāra) édités et chapitre XII (Mādhyamika) édité et traduit*. Kyoto: Zinbun Kagaku Kenkyusyo, Université de Kyoto.
- . 1983. "The Blo gsal grub mtha', and the Mādhyamika Classification in Tibetan Grub mtha' Literature." In *Contributions on Tibetan and Buddhist Religion and Philosophy*, edited by Ernst Steinkellner and Helmut Tauscher, 161–67. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 11; Proceedings of the

- Csoma de Kőrös Symposium: Held at Velm-Vienna, Austria, 13–19 September 1981. Vienna: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, Universität Wien.
- . 1987. “Āryadeva.” In vol. 1 of *The Encyclopedia of Religion*, editor in chief, Mircea Eliade, 431a–432a. New York: Macmillan Publishing Company.
- . 2000. “Jñānasārasamuccaya kḳ° 20–28: Mise au point with a Sanskrit Manuscript.” In *Wisdom, Compassion, and the Search for Understanding: The Buddhist Studies Legacy of Gadjin M. Nagao*, edited by Jonathan A. Silk, 233–44. Studies in the Buddhist Traditions. Honolulu: University of Hawai‘i Press.
- Oberlies, Thomas. 1995. “Die Śvetāśvatara-Upaniṣad: Einleitung – Edition und Übersetzung von Adhyāya I (Studien zu den „mittleren“ Upaniṣads II–1. Teil).” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens und Archiv für indische Philosophie* 39:61–102.
- Pandeya, Om Prakasha. 1981. *Sāṅkhyatattvakaumudī of Sri Vacaspati Mishra with Vivrti and “Tattvacandrika” Hindi Commentary*. Krishnadas Sanskrit Series 8. Varanasi: Chowkhamba Saraswatibhawan.
- Qvarnström, Olle. 1989. *Hindu Philosophy in Buddhist Perspective: The Vedāntatattvaviniścaya Chapter of Bhavya’s Madhyamakahrdayakārikā*. Lund Studies in African and Asian Religions, vol. 4. Lund: Plus Ultra.
- Ruegg, David Seyfort. 1981. *The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India*. A History of Indian Literature, vol. 7, fasc. 1. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- Schayer, Stanislaw. 1931–1932. “Kamalaśīlas Kritik des Pudgalavāda.” *Rocznik Orientalistyczny* 8:68–93.
- Schuster, Nancy. 1972. “Inference in the Vaiśeṣikasūtras.” *Journal of Indian Philosophy* 1 (4): 341–95.
- Steinkellner, Ernst. 2017. *Early Indian Epistemology and Logic: Fragments from Jinendrabuddhi’s Pramāṇasamuccayaṭīkā 1 and 2*. Studia philologica Buddhica, Monograph Series 35. Tokyo: International Institute for Buddhist Studies of the International College for Advanced Buddhist Studies.
- Strauß, Otto. 1913. “Zur Geschichte des Sāṅkhyā.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 27:258–75.
- . 1925. *Indische Philosophie*. Geschichte der Philosophie in Einzeldarstellungen, Abt. I: Das Weltbild der Primitiven und die Philosophie des Morgenlandes, Band 2. München: Verlag Ernst Reinhardt.
- Szántó, Péter-Dániel. 2015. “Early Works and Persons Related to the So-called Jñānapāda School.” *Journal of the International Association of Buddhist Studies* 36/37:537–61.
- Tauscher, Helmut. 2009–2010. “Remarks on Phya pa Chos kyi seng ge and His Madhyamaka Treatises.” *The Tibet Journal* 34/35 (2/3): 1–35.
- Tillemans, Tom J. F. 1990. *Materials for the Study of Āryadeva, Dharmapāla and Candrakīrti: The Catuḥśataka of Āryadeva, Chapters XII and XIII, with the Commentaries of Dharmapāla and Candrakīrti; Introduction, Translation, Sanskrit, Tibetan and Chinese Texts, Notes*. 2 vols. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde, Heft 24. Vienna: Arbeitskreis für tibetische und buddhistische Studien, Universität Wien.
- Tomabechi, Toru. 2016. “Bhavyakīrti’s Sub-commentary on the *Pradīpodyotana* as a Doxography: Some Preliminary Remarks and a Synopsis.” *Tōyō bunka 東洋文化 (Tōkyō Daigaku Tōyō Bunka Kenkyūjo)* 96:81–94.
- Watson, Alex, Dominic Goodall, and S. L. P. Anjaneya Sarma, eds. and trans. 2013. *An Enquiry into the Nature of Liberation: Bhaṭṭa Rāmakaṇṭha’s Paramokṣanirāsakārikāvṛtti, a Commentary on Sadyojyotiḥ’s Refutation of Twenty Conceptions of the Liberated State (mokṣa)*. Collection Indologie 122. [Pondichéry]: Institut Français de Pondichéry.
- Wexler, Albrecht. 1970. “Der Gott des Sāṅkhyā: Zu Nyāyakusumāñjali 1.3.” *Indo-Iranian Journal* 12 (4): 255–62.
- . 1992. “Paralipomena zum Sarvasarvātmakatvavāda II: On the Sarvasarvātmakatvavāda and Its Relation to the Vṛkṣāyurveda.” *Studien zur Indologie und Iranistik* 16/17:287–315.
- 天野宏英 1966 「因果論の一資料——ハリバドラの解釈——」『金倉博士古稀記念 印度学仏教学論集』平楽寺書店、323–50。
- 一郷正道 1985 『中観莊嚴論の研究』文栄堂。

- 今西順吉 1965 「サーンキヤ哲学に於けるブルシャ観の一つの問題——adhīṣṭhātr̥について——」『印度学仏教学研究』13 (2): 605-12.
- 今西順吉 1972 「根本原質の考察——タットヴァサングラハ第一章訳註——」『北海道大学文学部紀要』20 (2): 147-227.
- 宇野智行 1996 「Kumārila におけるアートマンの常住性」『哲学』(広島哲学会) 48:96-110.
- 宇野智行 1997 「アートマンをめぐる仏教とミーマーンサー学派との対論」『日本仏教学会年報』62:13-26.
- 小川一乗 1976 『空性思想の研究——入中論の解説——』文栄堂.
- 樞尾慈覚 1988 「ヨーガストラにおける自我意識の構造——古サーンキヤ哲学の根本的立場に関する一考察——」『密教学』25:23-44.
- 梶山雄一 1978 「知恵のともしび (中論清弁釈)——第十八章 自我と対象の研究——」長尾雅人責任編集『世界の名著 2 大乘仏典』中央公論社、287-328.
- 梶山雄一 1983 『仏教における存在と知識』紀伊國屋書店.
- 桂紹隆 1986 「インド論理学における遍充概念の生成と発展——チャラカ・サンヒターからダルマキールティまで——」『広島大学文学部紀要』45 (特輯号 1): 1-122.
- 桂紹隆 1998 『インド人の論理学——問答法から帰納法へ——』中公新書、中央公論社.
- 金倉圓照 1984 『真理の月光』インド古典叢書、講談社.
- 川崎信定・吉水千鶴子 2007 『西藏仏教宗義研究第八巻 トウカン『一切宗義』序章「インドの思想と仏教」』Studia Tibetica, no. 43、東洋文庫.
- 木村誠司 1993 「分別について」『駒澤大学仏教学部研究紀要』51:297-283.
- 木村誠司 2014 「雨衆外道 (Vārṣaganya) について I——序論——」『駒澤大学仏教学部研究紀要』72:144-116.
- 後藤敏文 2017 「Śvetāśvatara-Upaniṣad の言語について」『国際仏教学大学院大学研究紀要』21:45-89.
- 近藤隼人 2017 「両面鏡比喩の両面性——古典サーンキヤ映像説変遷史——」『印度学仏教学研究』66 (1): 485-480.
- 近藤隼人 2018 「因中有果説の陥穽——五元素における性質の遞増問題——」『印度学仏教学研究』67 (1): 509-504.
- 高木神元 1991 『古典ヨーガ体系の研究』高木神元著作集 1、法蔵館.
- 田丸俊昭 1978 「実体と様態——Tattvasaṅgraha 7-4.——」『印度学仏教学研究』26 (2): 671-72.
- 田丸俊昭 1980 「Śāntarākṣita 及び Kamalaśīla の Jaina 批判——Tattvasaṅgraha, 7 章第 4 節——」『龍谷大学大学院紀要』2:16-29.
- 丹治昭義訳註 1988 『中論釈 明らかなことば1』関西大学東西学術研究所訳注シリーズ 4、関西大学出版部.
- 戸崎宏正 1960 「蓮華戒造 Nyāyabindupūrvapakṣesaṃkṣipta について」『印度学仏教学研究』8 (1): 140-41.
- 戸崎宏正 1990 「法称著『ブラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第 1 章 現量 (知覚) 論の和訳 (5)」『哲学年報』(九州大学文学部) 49:61-79.
- 内藤昭文 1984 「TSP におけるアートマン説批判 (I)——サーンキヤ学派の構想するアートマン説をめぐって (3)——」『龍谷大学大学院紀要 文学研究科』5:1-26.
- 内藤昭文 1985a 「TSP におけるアートマン説批判 (III)——ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派の構想するアートマン説をめぐって (1) 《Pūrva-pakṣa》——」『龍谷大学大学院紀要 文学研究科』7:1-26.
- 内藤昭文 1985b 「TSP におけるアートマン説批判 (II)——プドガラ説をめぐって (2)——」『仏教学研究』(龍谷大学仏教学会) 41:20-51.
- 内藤昭文 1986 「TSP におけるアートマン説批判 (IV)——ミーマーンサー学派の構想するアートマン説をめぐって (1)——」『印度学仏教学研究』35 (1): 20-51.
- 内藤昭文 1987 「無我説をめぐる寂護・蓮華戒とクマーリラの論争点——TSP におけるアートマン説批

- 判 (IV) - (2) として——」『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』9:39-57.
- 内藤昭文 1988 「クマーリラのアートマン説の理論「区別と随伴」への批判——TSP におけるアートマン説批判 (IV) - (3) として——」『仏教学研究』(龍谷大学仏教学会) 44:61-80.
- 内藤昭文 1989 「アートマン説批判への布石——TSP におけるアートマン説批判 (IV) - (5) として——」『龍谷大学大学院研究紀要 人文科学』10:18-36.
- 内藤昭文 2003 「TSP (K.328-K.335) の和訳研究と研究ノート——ウパニシャッド論者の構想するアートマン説批判——」『仏教学研究』(龍谷大学仏教学会) 58/59:23-50.
- 中村元 1950 『初期のヴェーダーンタ哲学』インド哲学思想第一巻、岩波書店.
- 中村元 1976 『中観心論頌』と初期ヴェーダーンタ説『印度学仏教学研究』24 (2): 535-40.
- 中村元 1996 『中村元選集 [決定版] 第 24 巻 ヨーガとサーンキヤの思想』春秋社.
- 中村了昭 1982 『サーンキヤ哲学の研究——インドの二元論——』大東出版社.
- 西沢史仁 2013 「チャパ・チューキセングの教義書」『日本西藏学会々報』59:67-84.
- 能仁正顕 1992 『『知恵のともしび』第 1 章の和訳 (1)——縁の考察——』龍谷大学短期大学部編『仏教と福祉の研究 龍谷大学短期大学部創設仏教科四十周年社会福祉科三十周年記念論文集』永田文昌堂、45-66.
- 野沢静証 1955 「般若灯論釈の二態論者」『印度学仏教学研究』3 (2): 476-83.
- 野沢静証訳註 1971 「清弁造『中論学心髓の疏・思釈炎』「真如智を求むる章」第三 (IX)」『密教文化』97:96-86.
- 服部正明 1966 「真理綱要における我論批判——ミーマンサー、サーンキヤの想定する私の考察——」中村元編『自我と無我——インド思想と仏教の根本問題——』平楽寺書店、515-46.
- 原実訳 1974 『ブッダ・チャリタ』大乘仏典 13、中央公論社.
- 張本研吾 1991 「Hairanyagarbhayogaśāstra について」『印度学仏教学研究』40 (1): 458-456.
- 平等通昭 1928 「仏伝文献に現れた数論瑜伽思想に就いて——特に仏所行讃の数論思想発達史上の地位に留意して——」『宗教研究』新 5 (6): 797-819.
- 古坂紘一 1980 「中観における輪廻観の否定」『大阪教育大学紀要 第 1 部門』29 (2/3): 171-84.
- 本多恵 1980 『サーンキヤ哲学研究』上、春秋社.
- 丸井浩 2014 『ジャヤンタ研究——中世カシミールの文人が語るニヤーヤ哲学——』山喜房佛書林.
- 三澤祐嗣 2010 「エピック・サーンキヤにおけるアハンカーラの創造的機能」『東洋大学大学院紀要——文学研究科——』46:103-25.
- 御牧克己 1978 「Blo gsal grub mtha' について」『密教学』15:95-111.
- 御牧克己 1980 「チベット語仏典について」岡崎敬・樋口隆康編『シルクロードと仏教文化』続、東洋哲学研究所、283-316.
- 御牧克己 1982 「チベットにおける宗義文献 (学説綱要書) の問題」『東洋学術研究』21 (2): 179-92.
- 御牧克己 1987 「チベット語仏典概観」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化 北村甫教授退官記念論文集』冬樹社、277-314.
- 村上真完 1974 「サーンキヤ哲学におけるプルシャ (霊我) の遍在と一・多の問題」『日本文化研究所研究報告』10:35-94.
- 村上真完 1976 「ヴァイシェーシカ哲学のアートマン——サーンキヤ哲学のプルシャと対比される——」『日本文化研究所研究報告』12:141-75.
- 村上真完 1978 『サーンキヤ哲学研究——インド哲学における自我観——』春秋社.
- 村上真完 1980 「有神論サーンキヤ (Seśvara-Sāṃkhya)」『論集』(東北印度学宗教学会) 7:139-43.
- 望月海慧 2006 「ボーディパドラとアティシャ」『宗教研究』79 (4): 1144-45.
- 望月海慧 2007 「Dīpaṃkaraśrījñāna に帰される三種の gīti 文献について」『印度学仏教学研究』55 (2): 925-919.

- 望月海慧 2011 「Dīpaṃkaraśrijñāna に帰される三種の gīti 文献について (2)」『身延山大学仏教学部紀要』12:1-20.
- 望月海慧 2016 「ディーバンカラシュリージュニャーナ研究」立正大学提出博士学位論文.
- 茂木秀淳 1980 「他学派に關説されたサーンキヤ思想 (I)」『宗教研究』53 (3): 450-51.
- 茂木秀淳 1984 「他学派に關説されたサーンキヤ思想 (III)」『宗教研究』57 (4): 168-69.
- 茂木秀淳 1985 「saṃbandha の問題点」『宗教研究』58 (4): 527-28.
- 茂木秀淳 1989 「サーンキヤ学派の推理説」『インド思想史研究』6:41-52.
- 茂木秀淳 2019 「叙事詩の宗教哲学——Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (LXVIII)——」『信州大学教育学部研究論集』13:256-74.
- 山口益 1972 『山口益仏教学文集』上、春秋社.
- 山口益 1975 『中観仏教論攷』第二版、山喜房佛書林.

(筑波大学人文社会系助教)

Sāṃkhya Doctrines in the Tibetan Buddhist Doxographies:
Textual Analysis and Annotated Japanese Translation of
the Sāṃkhya Section of the *bDe bar gshegs pa dang phyi rol pa'i gzhung rnam
par 'byed pa* by Phya pa Chos kyi seng ge

Hayato KONDŌ

This paper presents an annotated Japanese translation of the Sāṃkhya section of the *bDe bar gshegs pa dang phyi rol pa'i gzhung rnam par 'byed pa* (*Phya pa grub mtha'*) by Phya pa Chos kyi seng ge (1109–1169), as well as an examination of its sources and distinctive terminology. Although the main sources of this section are most likely the *Prajñāpradīpāṭikā* by Avalokitavrata (circa first half of the eighth century CE) and the *Tattvasaṃgrahapañjikā* by Kamalaśīla (circa 740–795 CE), there are several minor discrepancies between the verses quoted in this section and those quoted in their extant Tibetan translations. More notably, previous studies argued that the *Phya pa grub mtha'* is a major source of the *Blo gsal grub mtha'* by dBus pa blo gsal (circa first half of the fourteenth century CE), but this paper reveals the discrepancies between both the doxographies by examining several Sāṃkhya doctrines, such as the derivatives from the three kinds of *ahaṃkāra*, and the verses common to them.